は　じ　め　に

研究代表者
健康福祉学部　福士政広

我々は、「社会貢献力・国際貢献力を持つ骨太な学生の育成を目指した多面的な学外教育プログラムの開発－その定常プログラム化を目指して－」を２年間推進してきた。このプログラムの目的は、現場を見据え「自ら考え、議論し、そして動く」力を学生達に涵養することによって、日本社会はもとより世界に向かって弛まず貢献する骨太の若者を輩出することである。そして、東京が持つ多面的特徴を教育資源として縦横に活用することにより、東京全域（大都市、山間部および島嶼）をキャンパスとして捉えた本学ならではの教育プログラム開発である。他分野の学生、教員、社会人および留学生等と食事や宿泊を共にすることによるヒューマンコミュニケーションをベースに、教室における座学や実習では得られない知的実体験を通し、苦しみの場景を安全な場所から観察者が描写するのではなく、その苦しみを共にすくいあげ一緒に立ち上がることができる人間としての始原的姿を獲得することにある。

この取り組みは、プログラムに参加した社会人や学生の回答から東京都の大学ならではの提供内容であることが特徴として評価された。すなわち、東京都の多くの施設を学びの場としての実体験や東京都の自然や文化財の保護に関わる地元の有識者による奥深く味わいのある解説と見学、その複合した提供内容が高く評価されたものである。

主な活動場所と内容は、伊豆大島、八丈島、小笠原、神津島、青梅・御嶽山および都心と東京全域をキャンパスとして都市教養プログラム、専門実習、セミナー、留学生講座、野外討論会、社会人野外講座、公開講座、ファーラムおよび高大連携などさまざまの取り組みを実施してきた。東京全体を学びの場とした学外体験のみならず、異分野学生間、学生-教員間および地元の人々とのヒューマンコミュニケーションを通して、広い視野をもって社会貢献や国際貢献活動に自ら参加し継続する力を持つ学生の育成につながった教育プログラムであったと確信している。

また、副次的な効果として少子化や高齢化が進む島嶼部や山間部を“学びの場”とした体験学習を積極的に推し進めることにより、健康福祉学部や社会福祉学分野の学生にとっては学びの現場であるばかりでなく、“働きの場”として卒業後の永寿禍福な進路として捉えることができた。さらに、大都市東京では見逃されがちな離島の活性化と地域振興に学生の意見が直接貢献できる可能性が示され、これは大きな収穫であった。

各プログラムの詳細な報告は共同研究者に譲りますが、２年間の研究が無事に達成できたことは各共同研究者皆様の献身的な協力と弛まぬ探求心の賜と心より感謝申し上げます。

最後に、この２年間の成果を定常的教育カリキュラムに組み込むことにより、社会に貢献する学生、国際的舞台で活躍する学生を数多く継続的に育成、輩出することができると確信する。

傾斜的研究費　実施プログラム　もくじ

１　都市教養プログラム※　1-9

2009 年度

8/20-22　都市教養プログラム「自然と社会と文化」@伊豆大島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3/2-4　都市教養プログラム「自然と社会と文化」@伊豆大島

2010 年度

8/7-9　都市教養プログラム「自然と社会と文化」@伊豆大島

8/19-24　都市教養プログラム「自然と社会と文化」@小笠原・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

9/10-14　都市教養プログラム「自然と社会と文化」@八丈島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

3/1-4　都市教養プログラム「自然と社会と文化」@伊豆大島

２　学部専門実習　10-18

2009 年度

7/31-8/6　生理発生生物学実習+高大連携：実習@大島海洋国際高校※・・・・・・・・・・・・・・11

植物系統学野外実習@大島海洋国際高校※・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

10/17-18　地理環境科学実習巡検@伊豆大島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

8/4-6　数理科学セミナー@大島海洋国際高校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

2010 年度

7/29-8/6　生理発生生物学実習+高大連携：実習@大島海洋国際高校※

植物系統学野外実習@大島海洋国際高校※

1/4-5　地理環境科学実習巡検

3/3-5　数理科学セミナー

３　大学院セミナー　19-30

2009 年度

10/9-11　大学院セミナー@伊豆大島：分子物質化学セミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

3/16-17　社会学セミナー@八王子セミナーハウス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

3/15-17　合同セミナー@八丈島（歴史、生命、数学、看護）

3/22-25　言語学セミナー@八丈島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

2010 年度

9/6-9/8　言語学実習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

9/10-14　歴史学セミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

9/10-11　大学院教育：社会学ゼミ合宿@八王子セミナーハウス

2/10-11　保健医療セミナーin 上牧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

3/15-16　社会学セミナー@八王子セミナーハウス

４　社会人講座・一般講演会　31-45

2009 年度

5/22-5/24　社会人野外講座@八丈島＋公開講座準備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

5/30-5/31　社会人野外講座@伊豆大島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

6/20-21　社会人野外講座@奥多摩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

9/11-12　公開講演会@八丈島（八丈島民大学共催）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

10/10-11 および 18　首都大と伊豆大島の連携活動フォーラム@伊豆大島

（島嶼共生研究環との連携）・・・・・・・・・40,113-122

10/11-12　社会人野外講座@青梅・奥多摩
12/11-13　社会人野外講座@八丈島「八丈学入門」および
「公開体験講座：海藻おしばで海を学ぶ」※・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
2/8-9　社会人野外講座@八丈島「公開体験講座」※
2/26-28　社会人野外講座@伊豆大島
3/5-7　社会人野外講座@伊豆大島

2010 年度
5/28-5/30　社会人野外講座@八丈島
7/16　公開フォーラム@南大沢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42,66-104
8/28-30　野外講座準備@神津島
10/1-3　社会人野外講座@神津島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
11/6-7　公開講演会@八丈島（八丈島民大学共催）
3/4-6　社会人野外講座@伊豆大島

５　高大連携プログラム　46-50
2009 年度
6/22　高大連携：海洋国際高校での進路説明会講師派遣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
9/7-11　大島海洋国際高校インターンシップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
2010 年度
9/6-11　大島海洋国際高校インターンシップ

６　健康福祉プログラム　51-58
2009 年度
8/20-22　健康福祉プログラム調査@伊豆大島（全学科）
9/11-12　健康福祉プログラム調査@八丈島（放射線、理学療法）・・・・・・・・・・・・・・・51
2/11-16　小笠原調査（放射線、理学療法）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
2/11-16　小笠原公開講演会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
2010 年度
9/10-14　看護学卒業研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

７　留学生・国際交流プログラム　59-65
2009 年度
11/13-15　留学生：野外体験授業@伊豆大島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
12/5-6　青梅・御岳山荘討論会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
2010 年度
11/13-14　留学生：青梅・御岳山荘討論会

資料１　第３回首都大学東京教育開発プロジェクト公開フォーラム記録
東京に学ぶ魅力ー島・海・山ー自然と歴史と文化と・・・・・・・・・・66-104

資料２　パンフレット、新聞掲載等・・・・・・・・・・・・・・・105-122

※一部別予算で実施したもの

自然と社会と文化（都市教養プログラム）

実施年月日と実施場所

大島・小笠原・八丈島にて、合計６回実施（２年間）。詳しくは、実施場所別に記載。

目的

本学の教育を特徴づける魅力的な教育プログラムとして、本プロジェクトでは東京都全体をキャンパスとして捉え、各地域と連携しながら実施する多様な学外体験型プログラムを提案し、開講してきた。教室を離れ「学外・集中・宿泊型」により、多分野横断的に、学部初年次、専門課程、大学院、留学生、社会人、高大連携教育およびそれらを複合した新しいタイプのプログラムが実施されている。その中で、「自然と社会と文化」は 2008 年度に新規開講された主に初年次全学部生を対象とした「都市教養プログラム」（2 単位）である。その概要およびアンケート調査などによって示された本科目の教育効果と評価についてはすでに別冊子「自然と社会と文化：概要とその効果および評価」で報告している。

パンフレットご希望の方は、island@tmu.ac.jp までご一報下さい。

本講義の中心は伊豆大島（2009-10 年度）、八丈島（2010 年度）、小笠原（2010 年度）などの学外をキャンパスとして集中形式で実施され、現場で社会・文化、民俗、歴史を直接見聞しその特徴を理解するとともに、海洋、火山を中心とした自然環境とそこに生きる生物の観察を通して地球と生命の歴史への理解を深めることを目的としている。

『実地に見聞し、観察、調査するという自らの体験を通して、物事を総合的に判断、考察する能力を高めることを目指す。自然および社会環境に対する生命・人間の適応プロセスを学びながら、人文・社会科学や技術・自然科学系等の学問的領域の枠を越えた総合的な問題認識、討論、課題発見能力の基礎を養う。受講生はこの講義における体験の中から独自に課題を見出して、それに対する答えを求めるために、何をどう考え、尋ね、議論したのかを具体的に問われる。』

実施概要（2010 年度の概要）

「伊豆大島」コースが夏と春の２回、「小笠原」コースと「八丈島」コースが夏にそれぞれ１回開講され、合計 67 名が受講した。現場での実施に先立って、4 月および１月に説明会を実施した。参加学生は合計約 170 名。学生はまずそこで授業内容の説明を受けた後、受講希望者はメールで申し出た。コースごとに受講可能人数が決まっている「指定科目」であり、必ずしも希望した全員が、希望したコースを受講できるとは限らなかった。

6 月～7 月には事前講義が「伊豆大島」「八丈島」「小笠原」の各コース毎に実施された。また２月には３月実施の「伊豆大島」コースの事前講義が行われた。そこでは現地での具体的な実施内容とともに講義の目的が改めて説明され、心構え、準備・予習事項、事前課題などが提示された。学外体験講義に際しての学生の個人負担金は主に往復交通費と食費、保険代金。この学生負担額は、学外教育・研修施設を持つ多くの大学がその施設で学外教育プログラムを実施する場合の額に相当する。

２０１１年度　「自然と社会と文化」シラバス

首都大学東京	自然と社会と文化	科目種別	都市教養プログラム （技・自Ⅱ/B）	単位数	２	指定科目
（東京都立大学等）	－	科目種別		単位数		
担当教員	黒川・他本学各分野の複数教員	集中	随時		掲示等に注意	

①授業方針・テーマ	東京都は、大都市を抱えるだけでなく、全国の海洋の 40%近くを有する海洋都市でもある。たとえば伊豆大島は東京都の島嶼地域の中で最も近くに位置し、三原山をはじめとする豊かな自然と美しい海洋環境を有するとともに、長い歴史と特徴ある民俗・文化を有している。本講義の中心は伊豆大島、八丈島、小笠原などの学外をキャンパスとして集中形式で実施され、都市と島嶼を対比させながら社会・文化、民俗、歴史を見聞しその特徴を理解するとともに、海洋、火山を中心とした自然環境とそこに生きる生物の観察を通して地球と生命の歴史への理解を深める。
②習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標	実地に見聞し、観察、調査するという自らの体験を通して、物事を総合的に判断、考察する能力を高めることを目指す。自然および社会環境に対する生命・人間の適応プロセスを学びながら、人文・社会科学や技術・自然科学系等の学問的領域の枠を越えた総合的な問題認識、討論、課題発見能力の基礎を養う。受講生はこの講義における体験の中から独自に課題を見出して、それに対する答えを求めるために、何をどう考え、尋ね、議論したのかを具体的に問われる。
③授業計画・内容	学内講義（学外講義の事前に１時限行なう） 学外集中講義（２泊３日以上の日程で伊豆大島、八丈島、小笠原などの学外で実施予定） 初日　1-7 限、２日目　1-7 限、３日目 1-5 限　（2 泊 3 日の場合） 内容： 下記のテーマ例から複数のテーマを関連付けながら総合的に学習する。各テーマとも、実習（見学、体験、観察、調査等）および講義・討論からなる。 ・島の文化と歴史 ・民俗と言語 ・地域社会の活性化 ・エネルギーと社会 ・火山噴火と危機管理 ・火山と地球の歴史 ・食文化と健康 ・健康と福祉 ・海洋生物と生命の誕生 ・海洋環境と地球温暖化 ・生物の適応と多様性
④テキスト・参考書等	適宜プリント等を配布すると共に、参考書等を指定する。
⑤成績評価方法	学外集中講義への参加は必須条件。現地での課題への取り組みを小レポートや討論・発表等で評価（50%）し、最終レポート（50%）と併せて総合的に成績評価する。
⑥特記事項	(1)学内での事前講義などを含む日程、内容等の詳細については掲示、ホームページなどを注意すること。 (2)履修希望者は定期健康診断を必ず受ける事。 (3)学外集中講義参加に当っては「学生傷害保険」に加入していない学生は、期間中をカバーする「旅行保険」に加入する必要がある。手続などについては掲示、ホームページなどを注意する事。 (4) 学外講義参加に要する交通費、食費等の実費は原則自己負担となる。 (5)本科目は指定科目であり、予備申請が必要である。履修希望者が多い場合はやむを得ず人数を制限することがある。

「自然と社会と文化」伊豆大島コース

実施年月日

2009 年 8 月 20 日～8 月 22 日（2 泊 3 日）

2010 年 3 月 2 日～3 月 4 日（2 泊 3 日）

2010 年 8 月 7 日～8 月 9 日（2 泊 3 日）

2011 年 3 月 1 日～3 月 4 日（船中 1 泊、2 泊 3 日）

参加者

2009 年 8 月　学生 22 名、TA1 名、教員 3 名：綾部(社会人類学)、黒川(生命科学)、菅又(公衆衛生学)、園部(看護学)

同時実施：健康福祉学学外体験型実習予備調査

学生５名、教員７名：福士・小倉(放射線学)、繁田・石橋・山田・小林(作業療法学)、柳沢(理学療法学)

2010 年 3 月　学生 19 名、TA4 名、教員 4 名：鄭(社会人類学)、ロング(日本語教育学)、黒川(生命科学)、菅又(公衆衛生学)

2010 年 8 月　学生 21 名、TA1 名、教員他 6 名：ロング(日本語教育)、村上・黒川(生命科学)、鈴木(地理環境科学)、菅又(公衆衛生学)、近藤(リサーチアシスタント)

2011 年 3 月　学生 19 名、TA3+1 名、教員他 9 名：谷口(史学)、ロング(日本語教育)、可知・黒川(生命科学)、鈴木(地理環境科学)、斉藤・呉(看護学)、眞正(放射線学)、近藤(リサーチアシスタント)

実施内容（2010 年 8 月）

東京の島、伊豆大島に船で渡り、その自然と社会と文化を学び考え議論する　　―植物、火山、健康、言語の班活動を通して―

8/7　大島郷土資料館にてオリエンテーションと「伊豆大島概論」椿油製油所、元町溶岩流先端、流人墓地（写真)、製塩所、くさや製造所、波浮港界隈等を訪ねながら。夜はウニの発生を顕微鏡で追いながら海と生命のつながりを考えました。

8/8　三原山登山、火山の成り立ち、生活、産業、観光とのかかわりを考えながら。夜はまとめの全体討論。

8/9　大島町長との討論。特別擁護老人ホーム椿の里を訪ね入居者との対話なども。

「自然と社会と文化」小笠原コース

実施年月日

2010 年 8 月 19 日～8 月 24 日（船中 2 泊、3 泊 4 日）

参加者

2010 年 8 月　学生 12 名、TA2 名、教員他 3 名：可知(生命科学)、ロング(日本語教育学)、近藤(リサーチアシスタント)

実施内容

8/19　船内オリエンテーション

8/20　小笠原丸操舵室・機械室見学

小笠原村長表敬訪問・交流

歴史のウォーキング講座

米軍の生活と町並みを教会、ラッドフォード跡、ブッシュの木、ペリー記念碑、北原白秋の歌碑、戦跡（トーチカ、残骸など）、欧米系墓地、など大村中心に見学しました。

自然保全：外来種対策　生態保全と世界自然遺産登録：講義

8/21　山の自然体験教室（小港から中山峠、ブタ海岸）

グループディスカッション（外来種、在来種、固有種を考える）

戦跡・歴史の野外講座

小笠原の芸能体験（南洋踊り）

小笠原ことばは、なぜ面白いのか重要か：講義

8/22　島の礼拝

対談：戦前の生活・強制疎開・米軍統治下の生活と欧米系島民にとって「返還」が意味したもの

海の生物観察＆シュノーケル体験

小笠原の芸能（小笠原フラの演奏、講演、講習、レイ作り体験）

小笠原で研究していた OB と小笠原について考える：講義

8/23　自由課題、

8/24　船内ディスカッション

「自然と社会と文化」八丈島コース

実施年月日

2010 年 9 月 10 日～9 月 14 日（船中 1 泊、3 泊 4 日）

参加者

2010 年 9 月　学生 15 名、TA3 名、教員他 6 名：谷口(史学)、金村(分子応用化学)、
黒川(生命科学)、斉藤・呉(看護学)、近藤(リサーチアシスタント)

実施内容

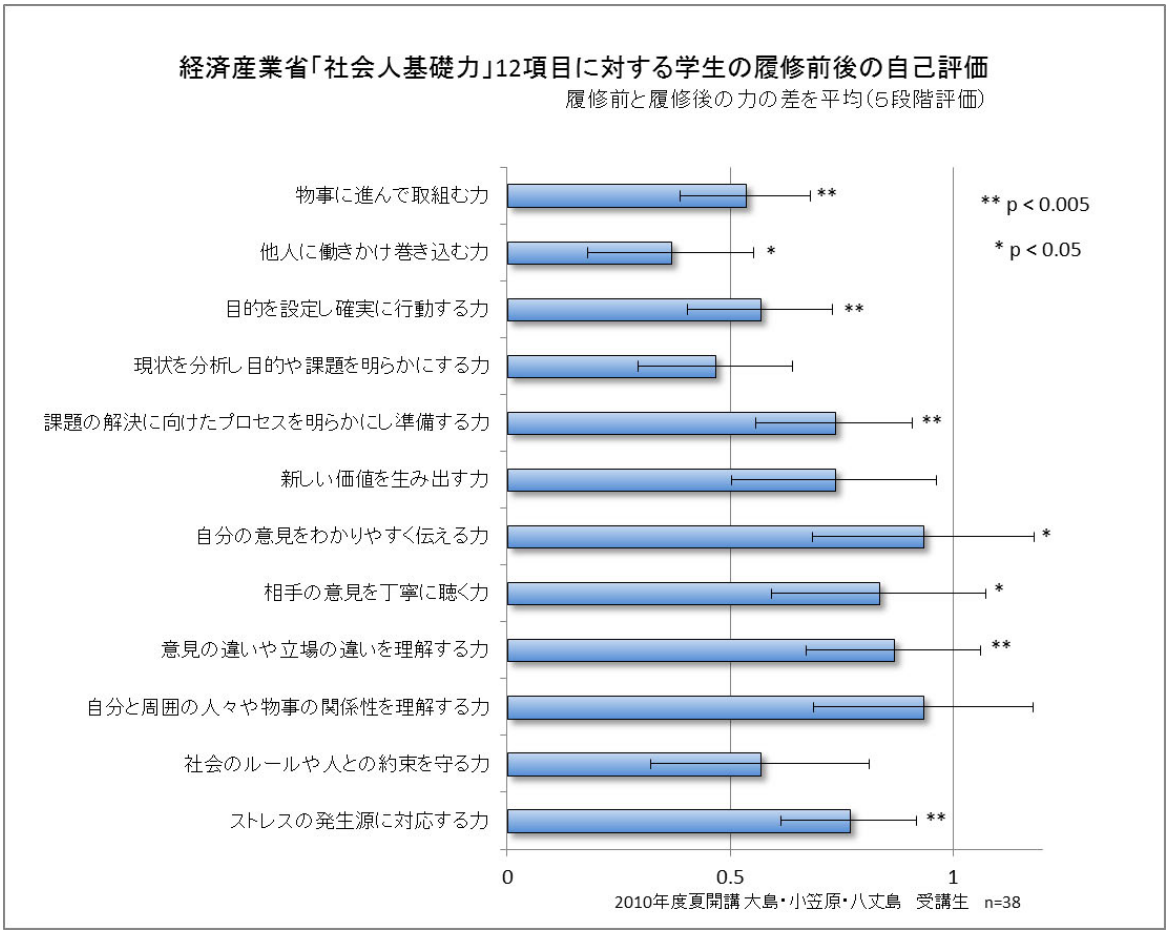
八丈島に大型船で渡り、その自然と社会と文化を学び考え議論する
―専門課程のプログラム受講生とも交流しながら―

前年度に「自然と社会と文化」を履修した学生たちのグループの提案に基づいて金山先生に参加をお願いするとともに、グループのうち 3 名が TA として実際に参加し往路船内でのアイスブレーキングや毎夜の討論、バードウォッチングなどを主体的にリードしました。

9/10　船内オリエンテーション
9/11　人間魚雷回天基地跡、歴史民俗資料館・宇喜田秀家、近藤富蔵他の流人の史跡などを訪れた後、島嶼農林水産総合センターにて黒潮の自然と産業について見学・説明と質疑応答。伝統の黄八丈の染め織元「め由工房」を訪ねた後、八丈太鼓と樫立踊りは乙千代ヶ浜で保存会の方々の手ほどきを受け全員で体験し汗を流します。夜は八丈島の看護学科卒研生による問題提起から町議会議員等地元の方々にも加わって頂いてグループディスカッション。
9/12　朝食前にバードウォッチング。特攻艇震洋基地跡、東光丸慰霊碑など戦争遺跡を地元講師の案内で訪ね、鉄壁山に掘られた陸軍司令部壕跡内では戦争をテーマに討論（写真）。東電地熱・風力発電所ではエネルギー開発と利用について考えます。夜は島嶼農協元組合長から伊豆諸島と農業の講義を受け、討論会。
9/13　焼酎醸造元、くさや製造所を訪ね八丈島の食文化について学ぶ。
八丈町役場表敬訪問、町長企画財政課長らと活発な質疑応答。
午後は、八丈富士、三原山で八丈島の大自然、景観を体験。
夜はまとめの討論と「My 八丈・ワンショット」を発表、さらに満天の星空観賞。

「自然と社会と文化」効果と評価

教育効果を測定する目的で平成 22 年度の受講生に対してアンケート調査を実施した。本科目がシラバスで目的とする「課題発見力」「主体性」「発信力」などを含む 12 項目（経済産業省「社会人基礎力」）に対する学生の自己評価（５段階評価）を履修前後で比較した。（有効回答数 38 人）



それぞれの質問項目について、自分に力がある（自信がある）かどうかを、「自分に力がある、自信がある（5 点）」から「自分に力がない、自信がない（1 点）」までの５段階に自己評価させた。履修前（教室での事前授業開始前）と学外講義終了１週間後との間の各自のポイントの差を平均±SEM でグラフに表した。プラスの数値（左方向）が「自信が向上した」変化を示す。対のある数値による t 検定（両側検定）により、** *はそれぞれ棄却域 p＜0.005、0.05 で有意に自信が向上したという変化を示した項目。

学生は「自然と社会と文化」を履修することによって、すべての項目に対する自信を増したと感じてした。特に、物事に進んで取組む主体性や、自分の意見をわかりやすく伝える発信力、目的を設定し確実に行動する実行力などに対して統計学的にも有意な変化が認められた。

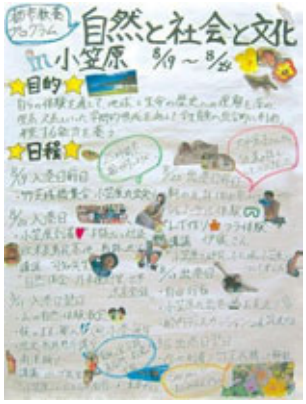
これらの効果を反映すると考えられる自主的、主体的活動が具体的にみられるようになっている。彼らが「自然と社会と文化」で体験し学んだことを学内外に発信し、また改善点などを主体的に提案しながら準備から実施までに関与するしくみが自主的につくられ機能し始めている。2009 年度に参加したシステムデザイン学部生は自主的に「自然と社会と文化」のポスターを作製した。

2010 年度に八丈島で開講するに当たり、前年度の受講生のグループによって「新たな担当教員の推薦」や「プログラムの進め方に関する提案」がなされた。３月には八丈を訪れ、現地の方々とも議論しながらプログラムの内容などについて担当教員らと検討を進めた。

実際のコースには３名がテーチングアシスタントとして参加し、全過程での補助的活動とともに往路船内でのアイスブレーキングや、報告会や討論会、バードウォッチングなどでは主体的にリーダーとしての役割を果たした。これらの活動経験は、「八丈島 TA 活動実施報告書」(http://www.tmu-edu-pjt.jp で公開中)としてまとめられ、次年度の学生 TA による自主的活動に引き継がれている。

2010 年に小笠原での「自然と社会と文化」を受講した学生たちは、大学祭「みやこ祭」で展示ブースを設け、学生や一般の来場者に、このプログラムの魅力を伝えるとともに、小笠原が直面する「外来種問題」をポスターで紹介した。また、レイ造りを実際に一般の来場者に指導し、南洋踊りを披露するなど、自ら学んだことを発表した。

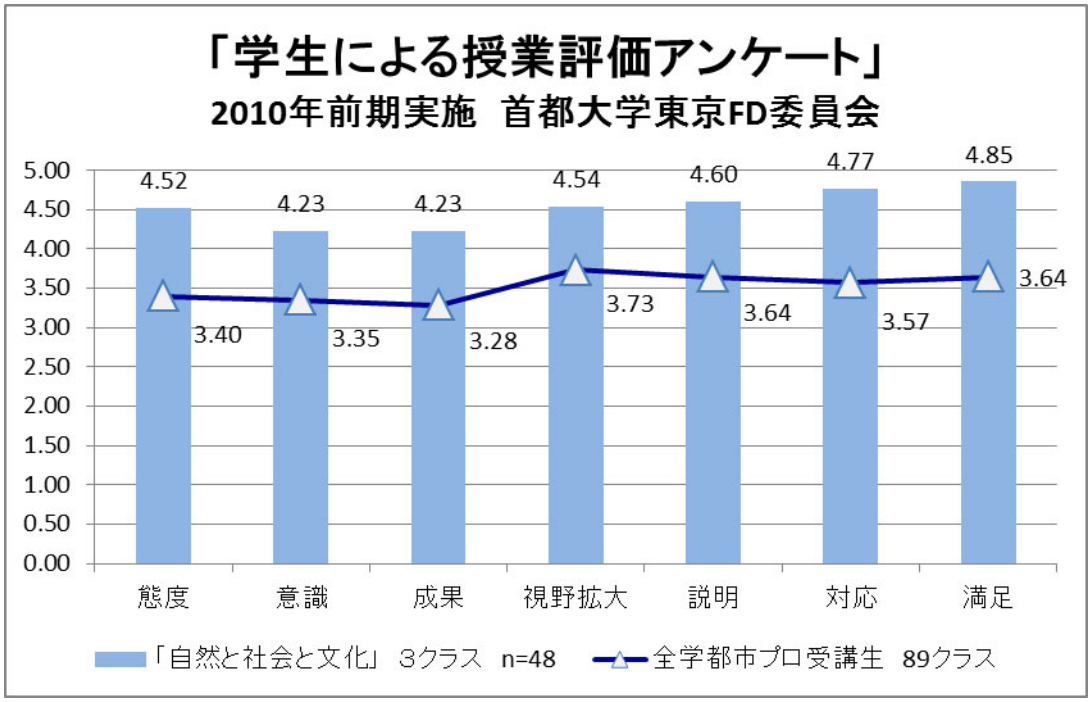
この様に「自然と社会と文化」を通して学生たちの主体性が育まれ、異分野・学年間の新たな人間関係が構築されてきている。



「自然と社会と文化」に対する学生の評価

首都大学東京 FD 委員会による学生による授業評価アンケート」を平成 22 年度全履修者 48 名を対象に行った。

授業に臨んだ自分の態度や、教員の説明や質問への対応に対する評価、授業への満足度などを学生が 5 段階評価したものです。結果を都市教養プログラム全体（平成 22 年度前期開講の 89 科目）の平均値と比較した。（このデータは FD 委員会の承認を得て公開している。）



「授業に意欲的・積極的に取組んだ：態度」「授業目的を意識しながら学習した：意識」などの授業への態度、意識などに関する項目をはじめ、「シラバスに掲げられた知識、能力を獲得した：成果」「自分の視野が広がったか：視野拡大」など成果に関する評価項目も**全科目平均に比べ 0.8 ポイントから 1.1 ポイント高い値**を示した。「学外・体験型」「多分野横断型」という特徴的な授業形態が、主体性や積極性を効果的に涵養するもの思われる。また宿泊・集中型の中で生まれるヒューマンコミュニケーションが「教員の説明がわかりやすかった：説明」「学生の質問・意見に対する適切な対応：対応」への高い評価につながっていると考えられる。**「受講に対する満足度：満足」が全体平均に対して、1.2 ポイントも高い値**を示したのはこれらを反映したものと推察される。

平成 20 年度、21 年度の履修者および担当教員を対象に行った独自の評価アンケート結果では、95%以上の学生が「自然と社会と文化」は「後輩に勧めたい科目」であり「今後も継続、発展していく必要がある科目」であると回答した。また、担当教員の全員が「シラバスに揚げられた知識、能力をつける目的を果たしうる科目」であると回答した。（注）

（注：強くそう思う（5）そう思う（4）どちらとも言えない（3）そう思わない（2）強くそう思わない（1）5 段階評価で、4 と 5 と答えた割合）

展　望

教室を離れ、様々な現場で体験的に「学外・集中・宿泊型」により多分野横断的に実施する「自然と社会と文化」の手法は、とりわけ昨今の大学生に求められる「自ら学び、考え、行動する」力を体得する端緒になることは間違いない。人間関係が希薄になりがちな若者社会にあって、様々な分野の教員、学生たちと文字通り寝食を共にしながら学び、考え、討論する機会は学生たちに見える形の変化をもたらしている。このようなタイプのプログラムを 1 学年 1600 余名の本学学生の全員を対象に実施することは現状では事実上不可能であるが、今後、実施方法などに一層の改良が加えられつつ基礎ゼミナールなどの他の初等年次科目の一部にでもこの実施形式のプログラムが組み入れられ拡充されていくことで、自発性・主体性を発揮し行動できる核となる学生の割合を増すことが強く期待される。

学部専門実習　実施プログラム

生理発生生物学臨海実習（生命科学コース専門実習科目）

2009 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）

2010 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）

植物系統学野外実習（生命科学コース専門実習科目）

2009 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）

2010 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）

地理環境科学実習Ⅰ巡検（地理環境コース専門実習科目）

2009 年 10 月 24 日～10 月 27 日（2 泊 3 日）

2011 年 1 月 4 日～1 月 5 日（1 泊 2 日）

数理科学セミナー
（数理科学コース専門科目・数理情報科学専攻科目）

2009 年 8 月 4 日～8 月 6 日（2 泊 3 日）

2010 年 3 月 3 日～3 月 5 日（2 泊 3 日）

生理発生生物学臨海実習（生命科学コース専門実習科目）

実施年月日

2009 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）
2010 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）

実施場所

伊豆大島　東京都立大島海洋国際高校

参加者

2009 年　学生 16 名　TA3 名　生命科学教員 3 名：西駕、福田、黒川
2010 年　学生 19 名　TA5 名　生命科学教員 2 名：西駕、黒川

（教員の出張は学生教育費）

目的

ウニやホヤ、アメフラシ、オニヤドカリなど沿岸で直接採集した新鮮な実験動物を用いて神経生理学、発生生物学の実験を行い生命現象の研究手法、解析方法を実地に学ぶ。得られたデータに基づいてグループ内、グループ間で議論し検討する。東京都立大島海洋国際高校との高大連携協定に基づく活動の一環として高校生に対して内容等を説明することを通して自らの実験の目的や意義を再確認する。

実施概要

本実習は、生命科学コースの専門実習科目として従来から学外で実施されてきたものであるが、都立大島海洋国際高等学校との高大連携協定（2009 年 1 月締結）に基づいてさらに円滑、かつ効果的に実施されるようになった。具体的には、
1、同校ドミトリー（寄宿舎）を宿舎として利用するとともに、高校教室および設備を借用して実習を実施した。2009 年は本実習と数理科学セミナーおよび植物系統学野外実習が、また 2010 年は、植物系統学野外実習が同時開講された。
2、出来るだけ他の実習、ゼミナールなどと同時期、同所的に開講することで、各分野の実習間の交流と議論の活性化が図られた。
3、生物クラブの生徒に教員が講義を行った他、実習中の学生が実地に解説するなどの交流などの高大連携活動をより充実させた。
　また、実験動物の確保、維持には東京都島嶼農林水産総合センター大島事業所、東京都栽培漁業センターを始め地元漁師などの協力を受けた。

実施内容

実習は大島海洋国際高校の理科実験室を借用して朝から晩まで行われる。前半 3 日間の「神経生理学」では、アメフラシやオニヤドカリなどの心臓や神経系を摘出し、持ち込んだオシロスコープ等の機器でその活動を記録するなどの実験を行った。

後半３日間の「発生生物学」ではウニやホヤの卵子と精子を受精させ、受精卵が卵割し発生を進めて行く様子を顕微鏡で観察し、その仕組みを調べる実験を行った。

ティーチングアシスタントの大学院生が高校生に実習内容を説明し、質問に答えた。このような高大連携交流活動の他に、本学の数学セミナー参加者などとの異分野間交流なども実施された。

宿泊施設は大島海洋国際高校のドミトリー（旧大島セミナーハウス）。セミナー室では毎晩、講義や討論が行われた。

高校のある波浮の港は実習材料の宝庫でもある。学生自ら海に入って実験動物の生態を直に観察し採集することもある。

評価と展望

「野外実習」や「臨海実習」などの学外型の実習は地理学コースや、考古学コースなどとともに生命科学コースにおいて従来から各種実施されてきている専門科目である。同様の専門コースを持つ大学の多くは通常、附属の学外研究教育施設で固定的に実施しているが、本学では同等の施設がないために、様々な地域で施設等を借用しながら開講してきている。その中で、本研究プロジェクトとして、東京の島嶼地域、特に伊豆大島を拠点として東京都の施設や都立高校、地域住民などと連携協力しながら学外実習を開講していこうとする試みは、講義を安定化、定常化するという点で高く評価できる。また、異分野の実習を同時、同所的に開講するという試みは、学生間の人間的交流の拡大はもとより、知的、学問的交流の端緒にもなっており、学外実習ならではのメリットの一つとして今後も続けていく意義があると考える。

植物系統学野外実習（生命科学コース専門実習科目）

実施年月日

2009 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）
2010 年 7 月 31 日～8 月 6 日（6 泊 7 日）

実施場所

伊豆大島

参加者

2009 年　学生 16 名、教員 3 名、TA3 名
2010 年　学生　9 名、教員 2 名、TA3 名

（教員の出張は学生教育費）

目的

伊豆大島に自生するベニシダ（無配生殖型）とハチジョウベニシダ（有性生殖型）を対象として、島内を広く踏査し、両種の分布パターンや生育環境を明らかにする。そして得られた調査結果をまとめ、グループごとに発表することで、植物系統学における調査・研究の流れを実際に体験しながら理解することを目標とする。

実施概要

本実習は、生命科学コースの専門実習科目としてかつては南会津で実施されてきたものであるが、都立大島海洋国際高等学校との高大連携協定が 2009 年 1 月に締結されたことに基づいて、同校ドミトリー（寄宿舎）を宿舎として利用するとともに、高校教室および設備を借用して実習を実施した。また、他の生理発生生物学実習などと同時期に開講し、各分野の実習間の交流と議論の活性化を図った。

2010 年には都立大島海洋国際高校の生徒も本実習の一部に参加し、野外調査を直接体験していただいたことに加え、実習最後の成果発表の際には、島民の方々をご招待して、実習中の学生が直接解説するなどの島民との交流活動を実施した。

実施内容

2009 年

1．島内全域を踏査し、ベニシダ類を集団サンプリング（各集団から約 25 個体）した。
2．持ち帰ったサンプルを用いて、胞子嚢を光学顕微鏡で観察し、胞子数から生殖様式を同定した（1 胞子嚢当たりの胞子数は、無配生殖型は 32、有性生殖型は 64）。
3．ベニシダとハチジョウベニシダが混生している集団に方形区を設置し、集団内分散構造を調べた。
4．島内全域におけるベニシダとハチジョウベニシダの分布パターンと、局所集団における分散構造の調査結果に基づき、両種の分布を決めている要因を考察・発表した（図 1）。

2010 年

1．2009 年の結果に基づき、過去の溶岩流とベニシダ類の分布パターンとの関連性を調べることを目的として、比較的新しい時代に溶岩流が流れた場所と長期間溶岩が流れていない場所が近接した地点をいくつか選び、ベニシダ類のサンプリングと GPS を用いた位置情報の記録を行った。
2．2009 年と同様に、持ち帰ったサンプルの胞子嚢を光学顕微鏡で観察し、無配生殖型と有性生殖型を同定した。
3．生殖様式と GPS データから分布図を作成し、溶岩流との関係について考察・発表した（図 2)。

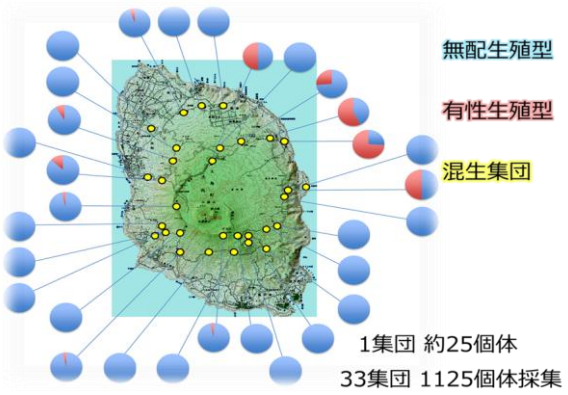


図 1. 2009 年の実習で得られた調査結果の一部

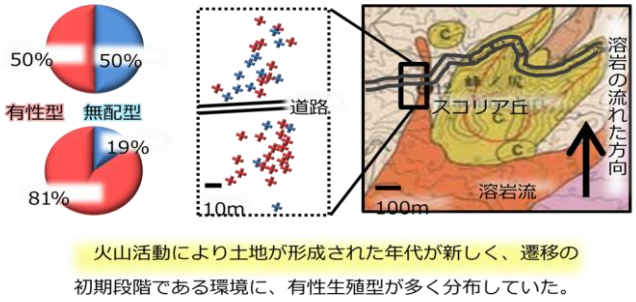


図 2. 2010 年の実習で得られた調査結果の一部

評価と展望

本野外実習は、かつて東京都立大学の学外施設「会津田島寮」で長年行われてきたが、2004 年閉所後は南会津町の「会津山村道場」を利用しながら実施してきた。2009 年より本研究プロジェクトにおいて、東京の島嶼地域で教育・研究を実施したことで、学生達がフィールド研究の醍醐味を実体験しながら、東京都が有する多様な自然環境への関心を高めることができたと思われる。また、異分野の実習を同時・同所的に開講し、都立高校や地域住民などと連携協力しながら学外実習を開講するという試みは、人的交流や地域還元の大切さを学生に認識させ、地域の自然と人間のつながりを実感できる貴重な体験にもなることから、今後は伊豆大島に加えて他の東京の島々においてもこのような学外実習を広げていく意義があると考える。

地理環境科学実習Ⅰ巡検（地理環境コース専門実習科目）

実施年月日

2009 年 10 月 24 日～10 月 27 日（2 泊 3 日）
2011 年 1 月 4 日～1 月 5 日（1 泊 2 日）

実施場所

伊豆大島

参加者

2009 年　学生 10 名、教員 2 名、TA2 名
2011 年　学生　6 名、教員 1 名

目的

数ある地球上の地学現象の中で日本列島での現象として特徴づけられる火山現象を取り上げ，実際に現地にて噴火の痕跡となる火山地質を観察し，そのスケールと火山現象の本質を理解することを第一の目的とする．そのために伊豆大島を実習先として選択し，同地にて地形・地質学的手法，とくに火山灰編年学の原理を現地で理解させ，学生自らの手で実践させる．第二の目的は，離島という特殊な環境下での自然現象と人間の関わりを目の当たりにする機会を設け，学生個人が独自に，自然と人間が如何に共存していくかを考えさせることとする．なお，実習を進める一方で，永続的に伊豆大島で実施可能な体験型教育プログラムの開発も目的とした．

実施概要

上記の目的に達するため，具体的には以下のスケジュールで実習を実施した．
1 日目は伊豆大島中心部の三原山を中心とし，ごく最近の火山活動の地質学的証拠の確認を行った．2 日目は，より長期的な火山活動の歴史を概観するため，伊豆大島最古の地質岩体や長期におよぶ火山噴出物の積み重なりをカルデラ外，とくに島の南島から南西海岸沿いおいて観察した．

実施内容

1 日目：伊豆大島のカルデラ内に分布する 1986 年噴火の溶岩流と A 火口，B 火口，江戸時代の安永溶岩流の地形や微細形態の観察，また，火山灰編年学的手法を学ぶことを目的に，大島温泉ホテル脇で三原山火山の噴出物と神津島由来の降下火山灰の観察を行った．溶岩流に関しては，玄武岩質溶岩の特徴としてその層厚が薄いことや，日本の地学的背景に起因してその微細構造に気泡が多く含まれることなどを現地で確認した．

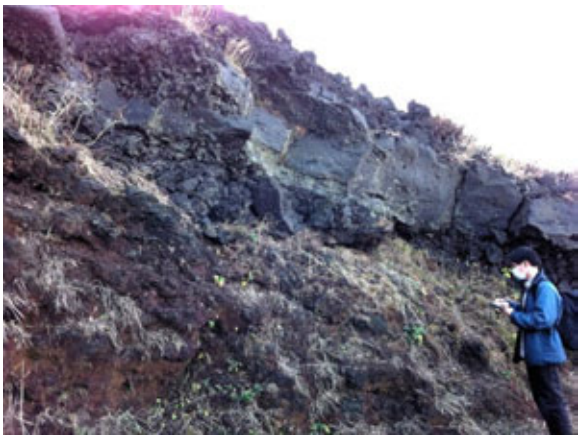


写真 1　1986 年噴火の溶岩流.
地質断面から 1986 年噴火の溶岩流を特定した上で，溶岩流の構造や厚さを観察し，それが溶岩の岩石学的な特徴とどの様に関連するかを考察した.

2 日目：伊豆大島南部の筆島火山という古い火山体の地形を観察し，伊豆大島の形成過程を概観した．また，波浮港を中心に残された水蒸気爆発に由来するマール地形やそれに関する噴出物を観察し，火山噴火の多様性や海岸付近でおきる伊豆大島内での激甚な火山災害などを考察した．さらには同地域のサド山スコリア丘では，伊豆大島における多様な噴火様式の一つの地質学的証拠を観察し，その後向かった伊豆大島南部の地層大切断面では，降下スコリア，降下火山灰，遠隔地の火山起源の火山灰の野外記載法と試料採取の実施を行った．最後に大島火山博物館で火山の基礎的な学習をおこない，その後，1986 年噴火の際に元町に迫った溶岩流跡の観察を行った.

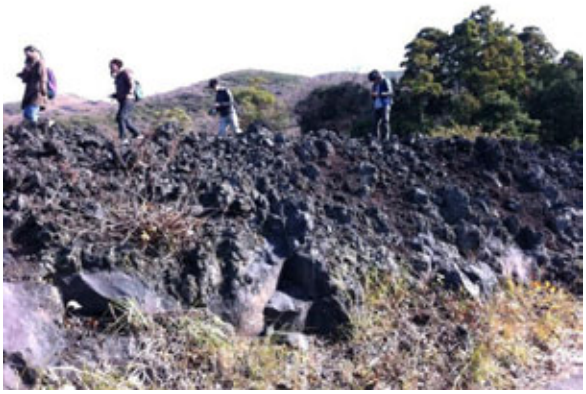


写真 2　1986 年噴火の溶岩流.
C 火口より流出し，伊豆大島中心の元町に迫った溶岩流.

評価と展望

地理環境科学実習 I は，地理環境コース 2 年生後期の選択必修科目で，地形・地質学的手法の基礎を学ぶことを目的とする科目である．従来から日帰りの野外実習と室内作業を中心として実施されてきた．これまで日帰りが中心であったので，東京西部を中心に限られた地形・地質が実習対象であったが，その中で，本研究プロジェクトとして，東京の島嶼地域，特に伊豆大島を拠点として東京都の施設や都立高校，地域住民などと連携協力しながら学外実習を開講していこうとする試みは，本実習のこれまでの実習地の限界を越え，実習内容の多様化と深みを与えた点で高く評価できる．とくに火山地域という特殊な環境で実施する実習であったので，単に地形・地質学的手法の基礎を学ぶだけでなく，学生個人が独自に，自然と人間が如何に共存していくかを考えて行く上での非常に貴重な機会を提供したと考える．とくにこの点は，短期的に目に見える技術的な学習と異なり，学生が将来社会に貢献する際の原動力となるなど長期的な効果が期待できる.

数理科学セミナー
（数理科学コース専門科目・数理情報科学専攻科目）

実施年月日

2009 年 8 月 4 日～8 月 6 日（2 泊 3 日）
2010 年 3 月 3 日～3 月 5 日（2 泊 3 日）

実施場所

伊豆大島

参加者

2009 年　学生 6 名、教員 1 名、TA1 名
2010 年　学生 2 名、教員 1 名、TA1 名

目的

２泊３日にわたって，参加者が共通して興味をもつテーマに関するセミナーや，教育プログラムの作成・実践にあたる．また高大連携の打ち合わせも行う．他コースの学生と同じ釜の飯を食べる交流の場を提供することで，学生同士の議論を促し知己を作り異なる分野から様々な刺激を得る．

実施概要

2009 年度は前身となるプロジェクトから数えて 4 回目の開催であり，テーマは「層切断とモノドロミー」であった．地層切断面等の印象的な題材を通じて具体的なイメージを与えつつセミナーを行うことで，層・モノドロミーといった抽象概念を理解させた．

本合宿は、数理科学コースの専門科目および数理情報科学専攻の科目をより効果的にするため従来から実施してきたが，今回，都立大島海洋国際高等学校との高大連携協定（2009 年 1 月締結）に基づいてその一部をさらに効果的に実施されるようになった。具体的には、2009 年度は大島海洋国際高等学校のご厚意により教室を使用させていただき，生命科学コース生理発生生物学実習を見学した．2010 年度は、都市教養プログラム「自然と社会と文化」が同時開講された．このように，出来るだけ他の実習、ゼミナールなどと同時期、同所的に開講することで、各分野の実習間の交流と議論の活性化を図った．

実施内容

2009 年度の例：

8 月 4 日　地層切断面を見学．昼食後，都立大島海洋国際高等学校を訪問し，9 月に行うインターンシップの打ち合わせを行った．さらに生命科学コースの実習を見学した．宿泊・食事について生命科学コースと合流した．

8 月 5 日　「数理科学セミナー」を，層切断とそのモノドロミーをテーマとして実施した．その後，火山灰台地見学等を行った．夕食は生命科学コースと合同の BBQ で親睦を深めた．

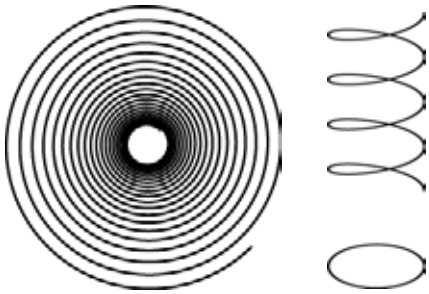
8 月 6 日　火山博物館で地層切断面の剥離標本等を見学し大島の地勢についての理解を深めた．

評価と展望

言うまでもなく，長時間静かに集中してセミナーをする手段として合宿は有効である．まず，普段と違う場所に行くことで日常の瑣末なことから切り離され，気持ちを切り替えることができる．また，リラックスして食事や入浴など日常の時間を共有することで，お互いの気持ちの垣根が低くなり，発言し易くなる．さらに，最近，大学では教員は結構忙しいが，ここでは随時アドバイスを与えることができる．大島は都内でありながら，好奇心を大いに刺激する自然環境や文化をもち，新鮮な気持ちでセミナーをすることができる．

数理科学の学生が生命科学の実習を見学したり，お互いの研究について質疑を行い，時間を気にせず語り合うといった交流の機会を持てるのは，合宿ならでは，である．その結果，2 コース間の学生同士で自発的に学術交流を行うことが決まり，後日実際に発表会等が行われたことは特筆に値する．

このように，単なるゼミ合宿にとどまらず，コースを越えた全学的な交流の場で，教員も学生も夜を徹して語り合えるような知的環境を大学として提供することは大切であろう．



大学院セミナー

分子物質化学専攻・学外セミナー

2009 年 10 月 9 日～10 月 11 日（2 泊 3 日）

社会学大学院ゼミ合宿（社会行動学専攻社会学教室）

2009 年　3 月 16～3 月 17 日
2010 年　9 月 10～9 月 11 日
2011 年　3 月 15 日～3 月 16 日（東北関東大震災のため中止）

言語学セミナー　八丈島

2010 年 3 月 22 日～25 日

言語学実習　伊豆大島

2010 年 9 月 6 日～8 日

歴史学セミナー（人文・社会系歴史・考古学教室日本近世史ゼミ）

2010 年 9 月 10 日～9 月 13 日（船中１泊＋２泊：３泊４日）

分子物質化学専攻・学外セミナー

実施年月日

2009 年 10 月 9 日～10 月 11 日（2 泊 3 日）

実施場所

伊豆大島　大島町開発総合センター大会議室、株式会社椿、他フィールドワーク

参加者

大学院生 21 名、学部四年生 11 名、教員 7 名

プログラムの目的、意義

学外において、十分な討議時間を設けて研究発表を行うとともに、化学の視点から大島の自然について理解を深める。

実施概要（スケジュール）:

10/9	11:00-15:00	研究発表会（大島町開発総合センター大会議室）
	15:00-15:30	株式会社椿・福井元気氏による学術講演会（大島町開発総合センター大会議室）
	15:30-18:00	株式会社椿・工場見学
10/10	9:00-12:00	研究発表会（大島町開発総合センター大会議室）
	13:30-18:00	大島火山の見学会・勉強会

実施内容

分子物質化学専攻では、平成 21 年 10 月 9 日～10 月 11 日の間、大島において学外セミナーを開催した。開催に当たっては、分子物質化学専攻内において、比較的研究テーマが似通っている四研究室（無機化学研究室、有機化学研究室、宇宙化学研究室、理論化学研究室）の 39 名が参加した。参加者の内訳は、上記の通りである。又、実施した事項は①研究発表会、および②化学の視点からみた大島の自然学習である。

①研究発表会においては、別紙 1 のプログラムに従って行い、13 名の学生が自身の研究について発表を行うとともに、参加者からの質疑応答に答える形で討議を行った。本学外セミナーを秋季に開催したこともあり、各学生の研究成果に進展が見られる時期であったため、発表時間と質疑応答時間を十分にとった。その結果、極めて密度の濃い研究討議を行えた。

②化学の視点からみた大島の自然学習では、㈱椿の大島工場長・福井元気氏による学術講演と工場見学、及び三原山において東京都立・大島高等学校・中林利郎教諭、および前

大島町議会議長・白井嘉則氏による火山の成り立ちに関する講義を内容に含む。福井氏による学術講演では、椿油に関する分子論的な説明が行われ、講演会後には工場見学が行われた。学術講演の内容は、まさに化学科で行われている講義の応用学習的な内容であり、参加した学生達の興味を大いにひきつけるとともに、多くの質問が福井氏に寄せられた。三原山におけるフィールドワークでは、岩石の組成研究を行っている学生も多かったため密度の濃い学習となった。

評価、今後の展望

大学院生・学部四年生らが各自の研究の発表を行い、それは卒業研究発表、修士論文発表会の中間報告会として位置付けられる。その成果は、半年後に行われた最終試験で発揮され、多くの学生が研究の完成形を発表することが出来た。又、大島の環境に関する学習では、現地の方の説明に対して学生が積極的に質問をしており、広い視野が養われたと思われる。

残念な点としては、開催時期にインフルエンザが流行していたため、罹患した学生４名が欠席したことである。

株式会社椿・工場長　福井元気氏による学術講演会

大島火山の見学会

株式会社椿・工場の見学会

別紙１　研究発表会プログラム

	１日目（船の到着時刻による）		
	前半(11:00～12:00)　　座長－奈良		
1	無機化学研究室	秋田康宏	鎖状及び環状ポルフィリン多量体の合成と分光学的特性
2	無機化学研究室	冨塚一仁	銅(Ⅰ)フェナントロリンの発光ダイナミクスと光励起状態の解明
	昼食(12:00～13:00)		
	後半(13:00～14:30)	座長－浦路	
3	宇宙化学研究室	田村　麻衣	Tafassasset 隕石の化学組成
4	宇宙化学研究室	日高　義浩	月隕石の化学的特徴
5	宇宙化学研究室	渡部　良	多重即発ガンマ線分析法の宇宙地球化学的試料への適用
	２日目		
	前半(9:00～10:00)　　座長－大井		
6	理論化学研究室	木村有輝	ナトリウムクラスター-水反応の理論的研究
7	理論化学研究室	剣持祐介	種々の L-アミノ酸の VUV-CD スペクトルに関する研究
	休憩(10:00～10:10)		
	後半(10:10～12:00)　　座長－田澤		
8	有機化学合成研究室	桑原淳亮	水酸基を有する飽和不飽和混合系チアクラウンエーテルの合成と性質
9	有機化学合成研究室	柴垣一輝	ルイス酸を用いたプロパルギルカルコゲニドとグリオキシル酸エチルとの反応
10	有機化学合成研究室	杉山尚秀	アリルカルコゲニドとアセタール類との反応
11	有機化学合成研究室	児玉拓也	チアクラウンエーテルによる金クラスターの安定化
12	有機化学合成研究室	林秀之	ジチオフェニルブタジインとチタノセンペンタスルフィドの反応
13	有機化学合成研究室	福川智之	三種混合系アリールカルコゲニドの合成と反応

社会学大学院ゼミ合宿（社会行動学専攻社会学教室）

実施年月日

2009 年　3 月 16~17 日

2010 年　9 月 10～11 日

2011 年　3 月 15 日~16 日（東北関東大震災のため中止）

実施場所

八王子セミナーハウス

参加者

2009 年　大学院生 14 名　教員 2 名：江原由美子（社会学）他

2010 年　大学院生　6 名　教員 1 名：江原由美子（社会学）

2011 年　大学院生　9 名　教員 1 名（東北関東大震災のため中止）

実施目的

通常ゼミ時間では、時間的制約が大きいため十分に時間がとれない、
各自の論文その他のための調査研究に対し、報告・議論を行うことを、目的とする。合宿することによって、時間をあまり気にせずに議論を行うことが出来、自分の研究に対する姿勢や研究目的など、通常のゼミ時間では考えることがむつかしい問題にまで議論を深めることも、目的のひとつである。

実施概要と評価

本ゼミ合宿は、江原が担当する社会学の大学院ゼミの一つの行事として行われており、基本的には、本学大学院の江原ゼミからの参加者によって行われている。ゼミ合宿担当委員が、ゼミ参加者に対して、報告の有無・合宿の時間割、その他部屋割りや合宿のための必要事項等を計画・連絡する。当日は、江原ゼミＯＢや他大学・他ゼミの院生が、院生の報告に対する議論に飛び入り参加することもあり、院生の報告に対して、かなり手厳しい議論が行われる。議論は、食事時間や休み時間等にも、継続することが多い。

発表した院生の多くは、通常のゼミの時間では得られないような多くのアドバイスや評価をもらえたと、合宿の意義を評価している。また合宿後、学年の違いや年齢の上下、大学の違い等を超えた人間関係やネットワークが形成され、大学間の垣根を越えた研究会の組織化や、共同の調査研究の組織化なども生じている。毎年、実施に際してはゼミ参加者の賛否を問うているが、ゼミ合宿実施の希望が非常に強く、実施に強い熱意と意欲を持つ院生が多い。宿泊型ゼミの意義は大きいと評価できる。

言語学セミナー八丈島

実施年月日

2010 年 3 月 22 日～3 月 25 日

実施場所

八丈島

参加者

大学院生５名　教員１名：ダニエル・ロング（日本語学）

実施目的

本プログラムは、次年度の八丈島における学部生向けの授業開講のための現地視察と、大学院生を TA として育成するためのフィールドワークを行った。

実施概要

様々な方言に関する資料の収集、現地住民への聞き取り調査、またそれに関わる文化の体験など、様々な形のフィールドワークを行った。できるだけ多くの知識・体験を得るために、博物館や工場、新聞社など多くの施設を訪れるように努めた。また、八丈方言における格助詞、形式名詞の「の」の体系の把握と、他方言との比較を一つの研究テーマとして挙げ、関係する資料の収集、または現地へのインタビューなどを通して理解を深めた。

実施内容

３月２２日夜、竹芝から大型船に乗って２３日朝到着して、マルダイ水産加工で伝統的なクサヤ加工法に関する説明を受けた(参考写真１)。その後、三原山に登り、自然ガイドの岩崎由美氏にその生態系に関する説明を受けた。午後に、八丈高校図書館で八丈語中之郷方言のネーティブスピーカーである小宮山淑子先生に方言に関してインタビューを行った。その後、八丈町教育委員会の林薫氏と茂手木清氏に、八丈島の方言、文化に関する資料を見せてもらった。２４日午前、服部屋敷跡で東京都指定無形文化財となっている「樫立の手踊」の解説と指導を受けた。午後は八丈島歴史民俗資料館で島の歴史に関する説明を受けてから、南海タイムスの菊池まり社長に江戸時代の漂着者や方言に関する文書を見せてもらった。２５日午前、八丈植物公園ビジターセンターの菊池健解説員に角鮫やちょんこめ（子牛）の解説を受けた。その後、東京都指定文化財である八重根のメットウ井戸（螺旋状井戸）を視察した。

評価と展望

普段機会がなかなか得られないフィールドワークを通して大学院生が多くの知識と経験を得た。結果として、参加した大学院生の数名は、その後行った学部生向けの学外授業の TA として活躍したことは高く評価できる。今後も実施により、大学院生への教育、さらにその下の学部生への教育につながることから、継続することに大変意義があるだろう。

参考写真１:伝統的なトビウオのクサヤ加工法の説明を受ける張守祥

参考写真２：東京都指定無形文化財「樫立の手踊」の指導を受ける
ロング、今村、張、田中、石坂

言語学実習伊豆大島

実施年月日

2010 年 9 月 6 日～9 月 8 日

実施場所

伊豆大島

参加者

大学院生８名　教員１名：ダニエル・ロング（日本語学）

実施目的

本プログラムは、大学院生にフィールドワークの機会を与えることで、学生が今後の研究活動を行う上で必要な広い視野を身につける、また、今後行うであろうフィールドワークの技法を教えることを目的とする。

実施概要

学際的な分野である日本語教育学を先行する大学院生に、フィールドワークを通して、文化接触、社会行動論、民族誌、日本外交史など幅広いテーマを考えさせた。多くの場所を訪れ、複数の現地住民へのインタビューから個々のテーマの理解の深化を図り、学生同士の個々の研究と絡めた議論を通して、より一層広い視野をもった研究ができるようになった。

実施内容

9 月 6 日（月）に高速ジェット船 1220 号で伊豆大島に渡り、「文化接触」というテーマをめぐり、江戸時代において日韓の文化接触の象徴となっている筆島を視察し、韓国人殉教者オタイネについて学んだ。9 月 7 日（火）には「社会行動論」のテーマをめぐって火山博物学を見学し、島民生活と火山との関係、および噴火によって緊急避難命令が出されたときに島民がどのような集団行動をとったかを学んだ。その後、大島町郷土資料館で柴山学芸員の話を聞いた（参考写真 2)。9 月 8 日（水）に「民俗誌」のテーマをめぐって、波浮の港を愛する会の金子勇氏が運営する金子写真館を訪れた。波浮港の歴史、オタイネの浦の岩（通称筆島）の命名や名称の変遷について聞きとりを行なった。また、「日本外交史」のテーマとして、黒舟来襲に備えて波浮の港の上に設置された鉄砲場を見学した。14:10 大島発の大型フェリー船で東京に戻った。

評価と展望

比較的得ることが難しいフィールドワークの機会を多くの学生に与えることができたのは高く評価できる。限られた日数で多くの場所を訪問し、複数の現地住民から話を聞くことができ、非常に意義のあるフィールドワークができた。学生同士もフィールドワークから得た知識から活発な議論を行っており、フィールドワークが彼らの研究に与える影響が大きいようであった。今後も継続して行うことに大きな意義があると見える。

大島町郷土資料館で柴山学芸員の話を聞く大学院生

歴史学セミナー（人文・社会系歴史・考古学教室日本近世史ゼミ）

実施年月日

２０１０年9月１０日～９月１３日（船中１泊＋２泊：３泊４日）

実施場所

八丈島

参加者

大学院生等２名・学部生５名・TA1 名、教員１名：谷口央（歴史学）

実施目的

第一に、机上による認識だけでなく、実際の現場・遺物に触れることにより、現在に至るまでの歴史、もしくは歴史遺物の実際に使用されていた際の具体的使用状況に直接触れることを目的とした。第二には、現地の専門家による解説を得ることにより、歴史遺物の現状、もしくはそれが生み出された社会事情についても直接触れることを目的とした。第三には、ゼミ生全員による報告会に、現地の方を招き、一般の方による感想・意見を得ることにより、自らの研究の客観的評価を得ることを目的とした。

実施概要

歴史民俗資料館及びその周辺に残される玉石垣、鉄壁山に残る陸軍司令本部など現地に残される近世から近現代にかけての史跡を訪れ、現地の専門家による解説を得た。また、ゼミ生全員による報告会を行ったが、そこにも現地の方々にご参加いただいた。

実施内容

１・２日目　竹芝桟橋－（船中泊）－八丈島（底土港）－底土回天基地跡（戦争遺跡）－歴史民俗資料館（江戸期資料）－（ふるさと村まで史跡巡り）－樫立公民館（報告）－八丈太鼓と樫立踊り見学－宿舎（ろっじふれんど）

３日目　末吉震洋基地跡・東光丸慰霊碑（戦争遺跡）－地熱発電所－ビクトリア銘洋鐘　餓死者冥福の碑（江戸期資料）－防衛道路から司令部跡（戦争遺跡）－近藤富蔵顕彰碑（江戸期資料）－宿舎

４日目　八丈興発（焼酎）－長田商店（くさや）－町役場表敬訪問－八丈富士散策－空港

評価と展望

歴史遺物に直接触れる機会は、歴史それ自体と対峙する中で考える機会を得ることになり、これまでにない歴史体験ができたと考えられる。また現地の専門家から具体的に現地での実情についてご教示いただくことにより、史跡をどのように保存し、どのように教育等に活用していくかを考えるなど、歴史学を学ぶ者、また今後も歴史学と直接かかわっていく者として重要な機会を得ることとなった。また一般の方に対し、自らの研究報告を行うことにより、自身の研究の整理・評価を知る経験を得ることともなった。加えて、現地での生活の実情（例えば、農作物・住居形態など）を知ることから、生活の知恵や風習などは、歴史的にはぐくまれ現在に至るということについても知ることができた。

以上のような経験は学内での講義・演習で得ることは難しく、参加学生にとって、まさに生きた歴史・研究に対する評価を得ることとなったと考える。知識については学内で得ることも可能であるが、このような経験は学外実習ならではと考えられ、また現地を見なければわからない事柄も多く、今後も同様な方法を続けていく意義は大きいと考える。

保健医療セミナーin 上牧

実施年月日

2011 年 2 月 10 日(木)～2 月 11（金）(1 泊 2 日)

実施場所

ホテルニュー上牧　　群馬県利根郡みなかみ町石倉２８０－５

参加者

大学院生 3 名、教員 2 名：福士政広（放射線学)、新田收（理学療法)、RA1 名

実施内容

1 日目（２／１０）は１５：００～１８：００より

放射線領域分野からみた他コ・メディカルとの連携とその教育について（福士　政広　教授（放射線学科))、理学療法分野からみた他コ・メディカルとの連携とその教育について（新田　收　教授　（理学療法学科)）より、講演をしていただき、外は雪が降りしきる寒い気候であったがセミナーでは活発な議論が交わされた。また、夜は医療法人高徳会理事長の入内島一崇氏との語らいの予定であったが急遽、翌日に変更となった。

２日目（２／１１）は９：００～１０：００まで「出身国・日本間の放射線学教育の相違について」張　維珊（人間健康学研究科 2 年)、「放射線学を学ぶ上での教育に対する今後の希望（1)」高畠　賢（人間健康学研究科１年)、「放射線学を学ぶ上での教育に対する今後の希望（2)」清水秀雄（人間健康学研究科１年）の発表、１１：００～１２：００まで医療法人高徳会理事長の入内島一崇氏との語らいと医療施設、特別老人介護施設およびディケアー施設等の見学を実施した。山間部での保健医療の現状と問題点についてお話しいただき、大変有意義なセミナーとなった。

社会人対象　野外講座

１：2009 年 5 月 22 日～5 月 24 日　（船中 1 泊、1 泊 2 日）八丈島

２：2009 年 5 月 30 日～5 月 31 日　（1 泊 2 日）　伊豆大島

３：2009 年 6 月 20 日～6 月 21 日　（1 泊 2 日）　青梅・奥多摩

４：2009 年 10 月 11 日～10 月 12 日（1 泊 2 日）　青梅・奥多摩

５：2009 年 12 月 11 日～12 月 13 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）八丈島

６：2010 年 2 月 26 日～2 月 28 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）　伊豆大島

７：2010 年 3 月 5 日～3 月 7 日　（船中 1 泊、1 泊 2 日）　伊豆大島

８：2010 年 5 月 28 日～5 月 30 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）　八丈島

９：2010 年 10 月 1 日～10 月 3 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）　神津島

10：2011 年 3 月 4 日～3 月 6 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）　伊豆大島

一般講演会

１：2009 年 9 月 11 日～9 月 12 日　公開講演会（八丈島民大学共催）（八丈島）

２：2009 年 10 月 11 日・10 月 18 日　首都大学と伊豆大島の連携フォーラム（伊豆大島）

３：2010 年 2 月 8 日～2 月 9 日　「公開体験講座」（八丈島）

４：2010 年 7 月 16 日　公開フォーラム（南大沢キャンパス）

５：2010 年 11 月 6 日～11 月 7 日　公開講演会（八丈島民大学共催）（八丈島）

社会人対象　野外講座

実施年月日と実施場所

伊豆大島・八丈島・神津島および青梅御岳山にて合計 10 講座開催した。

目的

本学の教育を特徴づける社会人対象の教育プログラムとして、教室を離れ伊豆大島、神津島、八丈島、青梅・奥多摩などをフィールドに、学外・宿泊型として実施する「野外講座」を企画、開講した。本学のオープンユニバーシティを含め大学が実施している社会人・生涯教育は、キャンパス内の教室での講義型式の授業が中心である。一方、前身の 2007 年度の全学プロジェクト以来、我々は東京都全体に広がる多様な自然と社会と文化、歴史を教育資源と捉え、それぞれの地域と強く連携しながら現場で実施する教育プログラムである「野外講座」の企画、試行を進め、多くの受講生のニーズとともに地域のニーズの存在を明らかにしてきた。2009 年度-2010 年度には合計 10 回開講し、受講生は合計 158 名であり、2007 年度のプロジェクト開始以来では合計 19 回開講し、合計 300 余名が受講した。「野外講座」の実施に当たっては、それぞれの市町村自治体はもとより、地域の様々な機関、組織の他、支庁、島嶼農林水産総合センターなどの東京都諸機関との連携協力関係とともに、地元の多くの方々との協力関係が基盤となっている。これらの連携を通して実施される「野外講座」は、魅力ある社会人教育の場であるとともに地域活性化につながる地域連携の場としても機能しており、本学が果たすべき社会貢献の重要な一翼を担うものと考える。

効果と評価

2009 年度-2010 年度に開講した合計 10 回の「野外講座」の受講生数の平均は 16 名であった。この人数は、現地での宿泊施設や移動手段（主にマイクロバス）の定員などを考えるとほぼ最大限度であり、宿泊型講座ならではの講師陣との距離感や受講生間の活発なコミュニケーションにとっても適切な人数であった。2010 年 2 月実施の伊豆大島野外講座では、受講希望人数が大幅に定員を上回り、急遽 3 月に追加開講を行った。また 2011 年 3 月の伊豆大島野外講座では定員を上回り、受講をお断りするケースが出てしまった。このように、首都大学東京「野外講座」は、多くの参加希望者を集める評価の高い講座となっている。その背景には、地域との様々な形の連携による円滑な講座運営とともに、地元の多くの講師の先生方の地域に密着し、人間味あふれた講義、説明、案内がある。受講後の受講生アンケートでは、毎回、内容や講師など個別事項に対する評価アンケートを実施しているが、いずれも高い評価を得

ており、とりわけ、「総合的にこの講座を何点に評価しますか」という問いに対して、全講座平均で 94.3 点という高評価を得ている。

それぞれの地元からは、地域活性化の一助になるとの期待も大きく「野外講座」を単発で終わらすことなく、首都大学東京が定常的に開講していくことを希望する声が表明されている。（資料１　公開フォーラム第二部のパネラーの発言記録　参照）

展望

様々な地域において、宿泊型で実施する「野外講座」は、社会人にとって非常に魅力的な講座であると受け止められており、本学の生涯教育部門を特徴付けるひとつの講座となると考えられる。一方、講座開講はそれぞれの地域社会から地域再発見や地域振興の実質的効果を生み出すものとしても高く評価され歓迎されており、その定常的開講が期待されている。

地域連携を通して本学が担うべき社会貢献に対して一定の評価を得るためにも、今後、内容や実施方法などに一層の改良が加えられるとともに、継続的に実施される体制が構築されることが強く望まれる。

伊豆大島野外講座

実施年月日

2009 年 5 月 30 日～5 月 31 日（1 泊 2 日）「自然と歴史と文化と」

2010 年 2 月 26 日～2 月 28 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）「人と自然のつながり」

2010 年 3 月 5 日～3 月 7 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）「人と自然のつながり」

2011 年 3 月 4 日～3 月 6 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）「人と自然のつながり」

参加者

2009 年 5 月　受講生 15 名、本学教員２名：黒川信・加藤英寿（生命科学）、地元講師 3 名

2010 年 2 月　受講生 16 名、本学教員１名：黒川信、TA1 名、地元講師 3 名

2010 年 3 月　受講生 11 名（4 名が当日キャンセル）、本学教員 1 名：黒川信、地元講師 2 名

2011 年 3 月　受講生 22 名、本学教員 1 名：黒川信、TA1 名、RA1 名、地元講師 5 名

地元講師

白井嘉則（前大島町議会議長、大島椿協会会員）

中林利郎（都立大島高校教員、伊豆大島ふれあい観光ガイド）

金子ひろこ（草木染研究家、「夢工房」主宰）

増山賀子（郷土料理研究家）

白井孝（潜水漁師）

概要

テーマは波浮の港と裏砂漠を訪ねて～自然と歴史と文学と～大島の植物について～など。

昼間はぱれ・らめーる（海の宮殿：貝の博物館）旧港屋旅館、椿資料館、裏砂漠、地層大切断面などを講師の話を伺いながら訪ね、夜はウニの卵の発生の様子を顕微鏡で追いながら「海と生命の誕生」の講義。温泉付き民宿大陣泊。

2009 年 5 月の講座日程

2009 年 5 月 30 日（土）

竹芝桟橋 7 時 30 分集合 8 時出航

ジェット船にて 10 時頃大島着

幻想的な裏砂漠を訪ねる

固有種も多い大島の植物について観察

夜は生物の多様性と生命の発生を生で観察し、また地元漁師が海の動物について熱く語った。

31 日（日）

伊豆大島の椿染め（体験）で自分で作品を創造した。また元町を散策しながら椿製油所、為朝神社、溶岩流などを訪ねながら講師から伊豆大島の歴史と社会の話を聞いた。

16 時ごろ出航のジェット船にて　18 時ごろ竹芝桟橋着。

椿油の高田製油所にて伝統の製造について聴く

（資料２　社会人野外講座募集案内　P. 111 参照）

八丈島野外講座　八丈学入門：自然と歴史・文化を訪ねて

実施年月日

2009 年 5 月 22 日～5 月 24 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）

2009 年 12 月 11 日～12 月 13 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）（一部産学公連携センター予算執行）

2010 年 5 月 28 日～5 月 30 日（船中 1 泊、1 泊 2 日）

参加者

2009 年 5 月　受講生 13 名　教員 4 名：谷口央（歴史学）、黒川信・加藤英寿・村上哲明（生命科学、TA1 名、地元講師 4 名

2009 年 12 月　受講生 18 名　教員 1 名：黒川信、地元講師 4 名

2010 年 5 月　受講生 11 名　教員 1 名：黒川信、地元講師 5 名

地元講師

伊藤宏（八丈歴史民俗資料館解説員）

林薫（八丈町教育委員会）

結城広枝（樫立踊り保存会）

山下誉（黄八丈、め由工房主宰）

菊池健（八丈ビジターセンター）

概要

東京から２８０Km、黒潮を越えて辿り着く亜熱帯の島、八丈島。八丈学入門では、八丈島を愛する地元各界の方々を講師として、この島にまつわる多くの魅惑的な歴史と文化をじかに触れながら学び、体験する。雄大な自然と食そして島酒を堪能しつつ講師交え語り合う。

2009 年の八丈島での野外講座は、地元の方々を対象にした公開講演会も兼ねた体験講座：「海藻おしばで海を学ぶ」も含めて開講した。

（資料２　社会人野外講座募集案内　P112 参照）

夜は八丈太鼓を習い東京都無形文化財の

樫立踊りも体験します。

2009 年 12 月の講座日程（案内冊子より）

2009 年 12 月 11 日（金）
竹芝桟橋 21 時半集合 22 時 20 分出航
黒瀬川を渡る大型客船の夜行船旅です。
１２日（土）朝 9 時半底土港入港
八丈島の自然その１公開体験教室「海藻おしばで海を学ぶ」
年賀状を作成します。
食文化その１　焼酎醸造元くさや工場など
八丈島の戦争史跡その１　底土・回天壕跡など
八丈島の歴史と民俗その１見学と散策
近藤富蔵墓・顕彰碑・宇喜多秀家墓など
八丈島の歴史と民俗
その２八丈太鼓と樫立踊り（体験）
１３日（日）
八丈島の戦争史跡その２　三原山鉄壁山・司令部跡など
八丈島の歴史と民俗その３見学と散策
歴史民俗資料館・陣屋跡・玉石垣など
その 4 黄八丈・染めと織り　染め元・め由工房
八丈島の戦争史跡その４
末吉・震洋基地壕跡と東光丸慰霊碑など
八丈島の自然その２南原千畳岩海岸
17 時 10 分発のジェット機にて 18 時羽田着解散

受講者アンケートより　　満足度平均点数 96.8 点　年齢平均 43.6 歳

・見所のおいしい所をつまみ食いできた。壕などは一般の人はいけないところで満足。

・講師とたっぷり行動を一緒にできたことがよかった。講師のプロフィール写真入がほしい。

・天候悪く、変更でマイナス10点。日程にゆとりがほしい。・観光では得られない貴重な体験。

・まだ新しい視点ができるはずでマイナス5点・夜空の美しい星を売り物に。

神津島　野外講座

実施年月日

2010 年 10 月 1 日～10 月 3 日　神集う伝説の島　神津島

参加者

受講生 19 名、教員 1 名：黒川信、RA1 名

講師：野田三千代（海藻おしば協会会長）、中村親夫（神津島ネイチャークラブ代表）

内容

10 月 1 日（金）22 時 00 分大型船　出航

10 月 2 日（土）朝 10 時 00 分神津島前浜港入港

神津島の自然 その１ 海藻おしば

海藻おしばの美しさと楽しさを知って頂くとともに、海中に広がる海藻の森と地球環境、生命との関わりについて知識を深めます。赤、褐色、緑の様々な海藻を素材にはがきを作成します。この体験講座はまっちゃーれセンターにて公開で実施され神津村民参加者とともに楽しみました。

神津島の歴史と民俗、食文化　見学と散策、解説

【水配り像】【流人墓地】【赤イカ入り塩辛製造所】【濤響寺】【ほうそう神様】【郷土資料館】【物忌奈命神社】などを地元の方のご案内で訪ねました。

〔夜の部〕神津島の人々と懇談会

10 月 3 日（日）

神津島の自然【天上山トレッキング】

白島登山道途中（白島トイレ）から登りはじめる4-5時間程度のコースです。神話の不入が沢を通り、最高地点の展望を望み、360度の絶景などを満喫しました。山頂に広がる砂漠、海と山と伊豆諸島の島々が見渡せる新東京百景展望地、裏砂漠展望地から御蔵島、八丈島を断崖絶壁から仰ぎ、白く幻想的に広がる裏砂漠を歩き、下山コースは前浜海岸、村落を一望できる絶景の黒島登山口までの標高差280mを一気に下る天上山完全制覇コースを歩きました。

【神津空港】15 時 30 分発　16 時 15 分調布飛行場到着

青梅・御岳山野外講座

実施年月日

2009 年 6 月 20 日～21 日（1 泊 2 日）

2009 年 10 月 11 日～12 日（1 泊 2 日）

参加者

2009 年 6 月　受講者 16 名　教員 1 名：菅又昌実（公衆衛生学）

2009 年 10 月　受講者 13 名　教員 2 名：菅又昌実（公衆衛生学）、菅原敬（生命科学）

概要

東京の都市近郊、及び東京の周囲の都市部に住む社会人の中には、東京の持つ歴史的遺産、海や山の魅力、食文化を含む社会の仕組みの変遷に興味を抱いている方々が少なからずいる。本講座では、東京の西部、青梅・奥多摩を講座の場として 1 泊 2 日の体験型講座を提供している。江戸の中心から近からず、遠からずに位置する霊峰御岳山が江戸幕府の認知と庇護のもとに繁栄してきた足跡を辿ることの興味は尽きない。東京の島と海とを場とした講座に並置して、東京の山と地域社会を体験として垣間見る本講座の意義は大きい。

御岳の多様な植物を学び、青梅の町並み、赤塚不二夫記念館、玉堂美術館、かんざし美術館、小澤酒蔵の酒蔵などにも地元の方々の解説を受けながら訪れる。

一般講演会：首都大学東京と島嶼の連携活動フォーラム@伊豆大島

日時・場所　2009 年 10 月 11 日（日）開発総合センター
2009 年 10 月 18 日（日）つばき小学校

首都大学東京が、伊豆諸島、小笠原諸島で地域との密接な連携協力に基づいて行なって来た様々な分野の研究活動、多様な教育活動の内容や大学と地域との結びつきについて、ポスター展示やパンフレット（資料２参照）などでわかりやすく紹介した。本フォーラムは「傾斜的配分研究：特徴ある教育プログラム開発プロジェクト」と「島嶼共生系学際研究環」（代表：生命科学　可知直毅）が主催し、大島町および首都大学東京産学公連携センターの共催で開催された。当初、10 月 11 日につばき小学校で開催される「町民体育レクレーション」に並行して開催する予定であったが、新型インフルエンザの影響で 1 週間順延になり、11 日は開発総合センターに会場を移して開催し、翌週改めてつばき小学校を会場として開催した。実施に当たっては、地元の白井嘉則前町議会議員などのご協力を頂いた。

参加された住民からは、これまでの活動に対する積極的な質問とともに、今後への期待や具体的な要望が多く寄せられた。以下に、当日実施した参加者へのアンケートで尋ねた「町と大学との連携活動について、今後大学にはどのようなことを期待されますか？」との問いに対する地域住民の生の声を掲載する（全回答、順不同）。これらのご意見を今後の活動の拡充に活かして行きたい。

・単発で終わらないように長く続けて頂けるとうれしく思います。多様な分野での連携は大切だと思いました。
・島の自然、文化についての研究、共同した活動、島の多様な機関との連携が広がれば良いと思います。
・町民の具体的ニーズをよく調べて取り組んでほしい。
・自治体と大学との連携は注目していましたが、これだけの分野で貴大学が取り組まれていることを知り、大変うれしく思いました。問題はむしろ大島町側の主体的姿勢と考えますので、可能な協力ができればと思います。ぜひ継続的でできれば拠点づくりを含めた本格的取組みを期待しています。
・伊豆諸島のなかの大島の自然、社会、文化をテーマに。
・伊豆大島名産物の研究；例、明日葉の有効成分、くさや汁の成分、椿油の微量成分等の研究。
・島の生活と密着した研究に期待する。
・子供対象のお話をして頂けると幸いです。特に体験的なもの。
・これからも伊豆大島をフィールドとして活動してください。また、町民とのふれ合いの場を設けていただければと思います。
・地方自治体の通弊で文化行政に対する意欲は今一歩で在等の有識者の個人的努力にのみ依存する傾向です。大学の本格的、組織的で各方面に対する連携は願ってもない事です。特に若い人たち（島内外の）を結集しさらに向上のため寄与される事を切望します。
・大島には世界の他の所には無い貴重な植物が自然の中に生育していてこれらの貴重な種の保存のための研究をして欲しい。
・掲示も大変素晴らしいが、さらに一歩進め、各種のショートレクチャーのような講演会形式による公開活動が出来ればと思います。
・町の発展のために、協力して頂ければ、島を訪れる人の数も少しは増加するのではと思います。この自然をもっと活用して欲しいです。

第 3 回首都大学東京教育開発プロジェクト公開フォーラム

『東京に学ぶ魅力−島・海・山−自然と歴史と文化と』

日時：平成 22 年 7 月 16 日（金）14 時より 17 時まで

場所：首都大学東京南大沢キャンパス　91 年館

主催：「特徴ある学外・体験型教育プログラム開発・実施のための全学的研究」研究班
共催：大島町・八丈町教育委員会、首都大学東京産学公連携センター・オープンユニバーシティ、都市科学連携機構、国際センター

プ ロ グ ラ ム

開会の辞　　研究代表者　福士政広
基調講演　　学長　原島文雄　東京−大都市・自然　そして科学技術

第 1 部　東京の島、海、山々を舞台とした学外・体験型教育

海に学ぶ－生命の誕生と環境　　黒川　信（生命科学専攻）
奥多摩・伊豆−小笠原諸島の豊かな植物　　菅原　敬（牧野標本館）
八丈島学のすすめ−学びの場としての八丈　　伊藤　宏（八丈島歴史民俗資料館）
島ことばと文化　　ダニエルロング（日本語教育学専攻）
奥多摩・日本酒の魅力・その伝統と文化　　小澤順一郎　（小澤酒造）
特徴ある学生・留学生・社会人教育をめざして　福士政広（健康福祉学部）

第 2 部：パネルディスカッション

社会貢献力・国際貢献力を持つ骨太な若者を育てるために
―地域と首都大学東京との連携―
（進行：可知直毅;生命科学専攻）

パネラー
菅又昌実（オープンユニバーシティー）　有為な若者育成のための本学の役割
白井嘉則（前大島町議会議長）迎える島の立場から：都市と離島の交流発展
中林利郎　（大島高校教諭）　　ボランティアガイドの立場から
増木米孝　（大島町教育委員会教育長）
金川育男　（八丈町教育委員会教育長）
三宅正彦　　（東京都議会議員）
中島義雄　　（東京都議会議員）
宇田川聡史　（東京都議会議員）
伊藤興一　　（東京都議会議員）
東村くにひろ（東京都議会議員）

おわりに：高橋　宏（首都大学東京理事長）

参加者：学内 83 名　（内訳：教員 28 名　職員 17 名　学生 38 名）
学外 46 名
合計 129 名

公開フォーラム開催に当たって（プログラムより）

研究代表者　福士政広（健康福祉学部放射線学科）

このフォーラムは本学の全学的共同研究プロジェクト「特徴ある教育プログラムを目指す研究」『社会貢献力・国際貢献力を持つ骨太な学生の育成を目指した多面的な学外教育プログラムの開発－その定常プログラム化を目指して－』（平成 21 年-22 年）の成果を発表する中間報告会です。この研究プロジェクトには、全学部に渡る 44 名（都市教養学部；人文・社会系 12 名、法学系 2 名、理工学系 11 名、都市環境学部 1 名、システムデザイン学部 1 名、健康福祉学部；看護学科 3 名、理学療法学科 4 名、作業療法学科 4 名、放射線学科 4 名、オープンユニバーシティ 2 名）が参画しています。本研究は首都大学東京開学当初の平成 18 年度より、３代の代表者（理工系西駕秀俊、人文社会学系渡邊欣雄、健康福祉学部福士政広）に渡って継続している一連のプロジェクトです。この中でこれまでに学部学生、大学院、留学生、社会人などを対象とした様々な「学外・体験・宿泊型」教育プログラムを開発し、試行、開講してきており、これらの受講生の総数は延べ 3000 名を越えています。

本プロジェクトの目的は、東京都が持つ広大で多様な特徴的フィールドをキャンパスに、学外に出て文字通り寝食を共にしながらの縦横なコミュニケーションを図りながら、分野横断的な学外体験型の本学ならではの教育プログラム群を構築し、それらを定常化させていくことです。社会人対象の野外講座や一般公開講座を通しての本学の社会貢献が、一定の評価を得るためにも、その継続性は必須です。

このフォーラムでは、学内の専門の枠を越えた教員組織と、それぞれの地域でご協力を頂いている各界の有識者の方々との連携により、そしてなによりこれらの講座に参加した学生諸君、社会人受講生の方々の積極的な参加意欲と評価を受けながら取組んできたプロジェクトの成果をご報告するとともに、東京の島と海と山に広がる特徴的で、魅力あふれた自然と社会と文化についてご紹介します。また、パネルディスカッションでは島嶼や山間部等の地域との連携を基盤に学外体験型教育を推進する上で本学が担うべき若者教育のありかたについて討論致します。皆様からの忌憚ないご意見を賜りたいと思います。

詳しくは、資料１　第３回首都大学東京教育開発プロジェクト公開フォーラム「東京に学ぶ魅力－島・海・山－自然と歴史と文化と」記録をご覧ください。

八丈島民大学講座との連携

実施年月日

①2009 年 9 月 11 日～12 日（第 57 回八丈島民大学講座）

宇喜田家中にみる豊臣政権の実態

演者　谷口　央（人文社会系）

もの忘れと痴呆症

演者　繁田雅弘（健康福祉学部）

②2010 年 11 月 6 日～7 日（第 59 回八丈島民大学講座）

八丈学の楽しみ方～自然ツーリズムの視点から～

演者　菊地俊夫（都市環境学部）

体操「ころばん体操」～高齢者の転倒予防に向けて～

演者　山田拓美（健康福祉学部）

実施場所

八丈島七島信用組合ホール、八丈町保健福祉センター

参加者

① ②の両日とも、八丈町民 40-60 名が参加。大学からは下記演者他が参加した。

実施風景

宇喜田家中にみる豊臣政権の実態

もの忘れと痴呆症

八丈学の楽しみ方～自然ツーリズムの視点から～

体操「ころばん体操」～高齢者の転倒予防に向けて～

評価と展望

本学は前身の都立大学の時代に十数年に渡って「島嶼講演会」などの地域住民の方々にむけた各種の公開講演会（公開講座）を様々なテーマで定期的に開催してきた。島嶼地域での公開講演会はこの島嶼講演会を復活させる形で、「八丈島民大学」と連携したこの講演会を含め、2007 年以来の一連のプロジェクトとして、伊豆大島で 5 回、八丈島で 5 回、小笠原で 1 回、計 11 回開催した。聴衆は毎回 30 名以上が必ず集まり、テーマによっては 100 名を越える住民が参加されている。公開講演会は、大学にとって貴重な社会への研究成果、情報発信の場であるとともに、重要な社会貢献の場であり、その継続性は大学が社会から一定の評価を受ける上でも大事な要素であると言える。また、この種の地域的活動は首都大学東京の認知度を高め、それぞれの地域で行われる本学の多様な研究教育活動に対する住民の理解と協力の礎ともなっている。

高大連携プログラム

本学理工学研究科は2009年1月に都立大島海洋国際高校との間で高大連携協定を締結した。この協定は連携活動の実績を背景に2011年1月に5年間延長されている。本プロジェクトではこの協定に基づいて、同校との間で「講演会、授業への講師派遣」（P47「大島海洋国際高校での進路説明会」参照）、「滞在型のインターンシップ」（P48「大島海洋国際高等学校インターンシップ」参照）、「本学野外実習での施設利用」（P10「学部専門実習」参照）、「高校生へのアウトリーチ活動（生物クラブ指導）」（P10「学部専門実習」参照）などの連携協力を実施した。

大島海洋国際高校での進路説明会

2009年6月22日

大島海洋国際高等学校インターンシップ

2009年9月7日～9月11日（4泊5日）

2010年9月6日～9月11日（5泊6日）

高大連携活動　大島海洋国際高校での進路説明会

実施年月日

2009 年 6 月 22 日

実施場所

伊豆大島　東京都立大島海洋国際高校

参加者

生命科学専攻准教授　春田伸

目的と概要

都立大島海洋国際高校と本学理工学研究科の間には高大連携協定が締結されており、それに基づいて施設設備の共同利用や教育、研究活動に関する協力が全学的に実施されている。高校で毎年開催される「進路説明会」には、本学から例年教員が１～２名派遣され、講演やセミナー、相談会などを実施している。2009 年度は春田准教授が出向き、同校の大学進学希望の 2 年生および 3 年生を対象に 45 分の講演を 2 回行った。講演では、大学で学ぶことの意義や首都大学東京の特徴や大学生活などについて説明し、生徒からは大学入試に向けた勉強や、進学することによって得られるものなどについて具体的で活発な質問があった。

大島海洋国際高等学校インターンシップ
（学部専門科目・大学院科目）

実施年月日

2009 年 9 月 7 日～9 月 11 日（4 泊 5 日）
2010 年 9 月 6 日～9 月 11 日（5 泊 6 日）

実施場所

伊豆大島

参加者

2009 年　学生 2 名（数理科学，生命科学）、院生 2 名（数理情報科学）
2010 年　学生 3 名（生命科学，地理環境）、院生 2 名（数理情報科学）

目的

中学・高校等の教員を志望する学生・院生に対し，研究授業はもちろん，課外学習の指導・生活指導など，教育実習とは異なる形での細やかな指導を実際に体験することで，将来の教員としての能力を高める．また，高校生への指導により，高校での学習内容を進んだ立場から改めて見直すことで，対象への理解を深める．中学校で教育実習を行った学生にとっては，高校での実習経験を積むことにもなる．授業以外での生活指導を行うことができるのも，他ではできない貴重な体験になる．

実施概要

大島海洋国際高等学校は，実際に船に乗り海洋実習を行うなど，独自のプログラムをもつ都立高校である．全寮制をとっており，授業が終わり，入浴・夕食のあと学生寮において「宅習」という自習時間が 3 時間（19:30-22:30）設けられている．参加学生は 1 週間にわたり寮に宿泊し，宅習時間にチューターを行う．昼は研究授業等を行う．その他，高校の指示に従う．

参加学生は，全員が教員免許を取得済あるいは取得見込である．

実施内容

2010 年度の場合：

【9 月 6 日（月）】

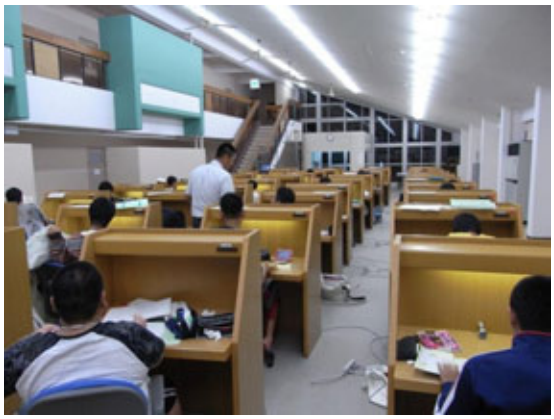
09 時 50 分　　大島出帆港到着　到着後路線バスで大島南高前下車

10 時 30 分頃　学校到着　図書室待機

11 時 05 分（休憩時間）　顔合わせ　企画調整会議後　校長室で校長に紹介

12 時 05 分　　職員室で学生紹介、　　昼食後ドミトリへ移動

13 時 30 分　　３・４棟の学生の居室へ荷物を置き、管理棟会議室で待機
15 時 00 分　　ドミトリオリエンテーション（舎監長・島田寄宿舎部主任）
16 時 30 分　　学生入浴
18 時 30 分　　食事
19 時 30 分　　ドミトリ生に学生紹介（多目的ホール）～島生も参加
19 時 45 分　　宅習開始
22 時 25 分　　宅習終了
23 時 00 分　　消灯
【9 月 7 日～10 日】
06 時 35 分　　起床
06 時 45 分　　点呼・朝食
07 時 40 分　　管理棟に移動
08 時 00 分　　スクールバスで学校に移動し授業補助や教材研究
16 時 30 分　　入浴
18 時 30 分　　夕食
19 時 30 分　　宅習開始
22 時 25 分　　宅習終了
23 時 00 分　　消灯
【9 月 11 日（土）】
06 時 35 分　　起床
06 時 45 分　　点呼・学生あいさつ・朝食
07 時 40 分　　登校指導
07 時 45 分　　スクールバスで学校へ移動
08 時 10 分　　職員室で学生あいさつ
09 時 00 分　　校長室で校長より認定書授与
15 時 30 分　　大島出帆港発


ドミトリーでの宅習の様子

評価と展望

近年，就業体験学習が広く行われているが，そのほとんどは官公庁・企業である．しかしながら，本学では毎年 100 人前後の学生が教育実習に行き，そのうち実際に教員を志望する者が多い．それらの学生に対する就業体験学習の場を提供することは意義があり，しかも実施大学は少ないことから大学の競争力を高めることに資するであろうと考えられる．高校生から，大学見学の際に教員インターンシップの有無を尋ねられたこともある．

昨今の複雑化した学校現場では，科目の実習以外にも様々な技術が要求される．そこで，生活指導も含めた技術向上および就職の可能性を高めるための場を作る意義は大きいと思われる．

高校に泊まり込みで密度の高い指導ができるのは全寮制の高校ならではである．生徒への責任がかかる実習だけに，高大連携協定が締結されており，高校側も大学側も全学でバックアップしていることで，初めて安定した実現ができている事業であるといえよう．

今回は初めての試みであり，参加者・高校とも好評であったので，今後も継続する予定である．高校からより多様な分野の学生の派遣を希望があり，文系を含めた多様なコースからの参加があることが望ましい．また，交通費等の援助が見込めると学生は行きやすい．

学生の実習報告書より抜粋：

「実習先の生徒たちは皆礼儀正しく，こちらに興味を示してくれる子もたくさんいた．また，教職員の方々も暖かく受け入れてくださったため，大変良い環境で過ごすことができた．実際に現場に出向く事で色々と学ぶことができた．特に，島で勤務されている教職員の方の話や，寮生活をしている生徒たちを間近に見られた事は，自分にとってよい経験になったと思う.」

「教育実習では中学校に派遣されたため，今回高校での授業見学や実際に授業をさせていただき（ママ），とても良い経験ができました．また，高校時代での恩師と再会出来，その先生とのつながりで教職員の方々，生徒のみなさんと親しく過ごせたので，実習環境も良好だったと思います.」

健康福祉プログラム　八丈島調査

実施年月日

2009 年 3 月 16 日～3 月 17 日（1 泊 2 日）

実施場所

八丈島

参加者

健康福祉学部教員３名(放射線：小倉、看護：齋藤・呉)

目的

健康福祉学部のプログラムを進めるに当たり、大学から八丈島に対して提供できるサービスの具体的内容の調査と、八丈島をフィールドとした教育プログラムの実施について、八丈島の関係各所と調整を行うことを目的とした。

実施概要

健康福祉プログラムの目的と今後の進め方について、八丈島の関係各所と２時間程度のディスカッションを行った。
また、第二老人ホームを訪問し、施設見学ならびに医療スタッフからの説明を受けた。さらに、教育プログラムについて説明し、実施を依頼した。

実施内容

当初は 3/15 の出発予定であったが、船が欠航したため 3/16 の飛行機便を利用した。さらに、強風のため飛行機も１，２便とも欠航し、夕方の最終便でようやく八丈島に到着した。このため、3/16 午後に予定していた町立八丈病院の訪問は中止となった。

3/17 は 10 時から保健福祉センターにて、保健センター課長の笹本氏、第二老人ホーム施設庁の笹本氏、八丈支庁庶務係長の伊勢崎氏、保健所副所長の岡本氏、保健所庶務係長の佐藤氏と、健康福祉学部教員の小倉・齋藤・呉で、教育プログラム等の進め方について打ち合わせを行った。冒頭に、今回の訪問目的と、今後の検討内容について説明し、質疑応答を行った。この中で、大学から提供できるサービスについては、今後時間を掛けて検討することとなった。また、教育プログラムについては、新年度の初めに具体案を検討し、再度訪問して予備調査を行った後、実行に移すこととした。なお、八丈町の窓口として、保健センター課長の笹本氏をお願いすることとした。

13 時から第二老人ホームを訪問し、施設長の笹本氏から施設内容の説明を受け、施設見

学を行った。この中で、医療スタッフと現地での問題点について説明を受けた。また、教育プログラムの実施について依頼し、承諾を得た。

評価と展望

以前、同様の打ち合わせを伊豆大島で行ったが、今回の訪問で島嶼によってかなり考え方が異なることがわかった。打ち合わせの結果、大学から提供できるサービスについては、今後時間を掛けて検討することとなった。

なお、教育プログラムを進めて行く上では、現地との会話を密にし、十分な調整を行う必要があることが明らかとなった。

添付参考資料

八丈島での教育プログラムの実施および調査実施に関する検討会議　議事録

日時：2010 年 3 月 17 日

場所：八丈島保健福祉センター

出席者：

（施設側）笹本、笹本、伊勢崎、岡本、佐藤

（大学側）小倉、斉藤、呉

議事進行：小倉　　（敬称略）―

1．訪問の目的と今後について（小倉教授）

前回、9 月に小倉教授が八丈島保健福祉センターを訪問した。今回の訪問目的である当大学の健康福祉学部が島しょに協力、提供できるサービスの内容の検討、また次年度にトライアルとして、健康福祉学部の学生を実習や研究のフィールドとして協力していただけるかについて説明がなされた。

2．当大学の健康福祉学部が協力または提供できるサービスについて

1)「島しょ保健医療圏地域保健医療推進プラン」について

現在、センターではプランの内容の検討や調査も含めて年度計画が立てられており、現段階で新たに大学側へ調査依頼等の要望はないことが確認された。今後は、中・長期的にとらえ、事例検討会や実態調査など八丈島に協力、提供できることを検討し、提案をしていくこととなった。

2）島しょの職員や非常勤職員の募集、高校での特別授業などについて

当大学の学生への広報活動は可能であること、また、八丈島での高校生への特別授業、大学紹介なども実施可能であることが大学側より説明がされた。

3．大学から依頼したい内容について

1）教育、研究について

学部生や大学院生の教育フィールドとしての受け入れを依頼した。今後は、次年度の早い段階で、具体的な学生の教育・研究内容の検討を学内で行い、再度依頼することの必要性が確認された。

センターの出席者からは、学生のボランティアや交流は今後重視していきたいとのことだった。また、第二八丈老人ホームの出席者からは、健康福祉学部の学生によるホームでの健康教育やホームをフィールドとした研究の実施などが提案された。

2）八丈島在住の外国人の健康にかかわる実態調査について

センターおよびホームの出席者より、八丈島在住の外国人について可能な範囲で現状を説明していただいた。今後は、調査内容をより具体化し、数名へのインタビューなど予備調査から実施していくことが確認された。

小笠原調査　および　小笠原公開講座

実施年月日

2010 年 2 月 11 日～2 月 16 日（5 泊 6 日）

実施場所

小笠原村　支庁、保健所、村役場、診療所　他

参加者

健康福祉学部教員６名(放射線：福士・小倉、理学：柳澤・池田・古川・来間)
オープンユニバーシティ教員１名(菅又)

目的

健康福祉学部のプログラムを進めるに当たり、大学から小笠原村に対して提供できるサービスの具体的内容の調査と、小笠原村をフィールドとした教育プログラムの実施について、小笠原村の関係各所と調整を行うことを目的とした。また、講演会を２回開催した。

実施概要

健康福祉プログラムの目的と今後の進め方について、小笠原村の関係各所を訪問しディスカッションを行った。
父島にて菅又教授と池田教授による講演会を２回開催した。

実施内容

2/12 は小笠原支庁を訪問し、支庁長の長谷川氏と面会した。この中で、島嶼である小笠原に対し、健康福祉学部として貢献可能な事項を検討している旨を説明し、了承を得た。次に村役場の村井福祉係長を訪問し、石田副村長と面談し、同様の説明を行い、了承を得た。また、保健所の杉下副所長とも面会した。この後、翌日の講演会場を下見し、会場設定と準備を行った。

2/13 は小笠原父島内の施設を村井福祉係長の案内で視察し、小笠原の文化および健康事業を中心とした質疑応答を行い、情報を収集した。14:00 と 19:00 の２回、菅又教授による「都民を健康危機から守れ―地震・食品感染症対策の最前線―」と、池田教授による「高齢者の転倒とその防止策」の講演会を行った。この講演はテレビ会議システムにより、母島へ中継された。また、講演会参加者と健康事業に対する意見交換を行った。

2/14 は母島に出張し、母島支庁長の長堀氏の案内で島内を視察し、母島の文化および健康事業を中心とした質疑応答を行い、情報を収集した。夕方から、島内の関係者９名と意見交換を行った。また、新たに参加した小笠原村診療所医師の高田氏と、島内医療の現状

および今後の対応について意見交換を行った。

評価と展望

小笠原村は伊豆大島に比べ遠方のため、旅程を最短でも 5 泊 6 日とする必要がある。また、健康福祉学部として教育プログラムを行うには、これに適した医療施設や対応するスタッフ等が少ないことがわかった。

そのため、健康福祉学部が提供できるプログラムとしては、当面は今回のような講演会を中心とした活動が適しているものと思われる。

健康福祉学部小笠原村講演会

2 月 13 日(土)昼の部　午後 2 時～4 時　夜の部　午後 7 時～9 時

場所:地域福祉センター2 階会議室(父島)、母島支所 2 階会議室(テレビ配信)

講師:菅又昌実教授、池田誠教授

演題:菅又「都民を健康危機から守れ―地震・食品・感染症対策の最前線―」

　　池田「高齢者の転倒予防」

参加人数　昼の部　父島 10 名、母島 4 名　夜の部　父島 6 名、母島 2 名

父島会場での参加者の様子

父島会場での講演者の様子

健康福祉学部プログラム　看護学科卒業研究プログラム

実施年月日

2010 年 9 月 6 日～9 月 14 日（9 泊 10 日）

9 月 11 日（土）～14 日（火）は都市教養プログラム「自然と社会と文化」に合流

実施場所

八丈島

八丈島八丈町健康課（保健福祉センター）、社会福祉法人養和会第二八丈老人ホーム、特定非営利活動法人八丈島ロベの会精神障害者共同作業所フェニックス・食工房やまんばハウス）

参加者

学生 3 名、教員 2 名：斉藤恵美子・呉珠響（健康福祉学部看護学科）

プログラムの目的

健康福祉学部看護学科の卒業研究の一環として、島しょに暮らす人々の健康と生活、環境、社会資源に関する学生の研究課題を明らかにすることを目的とした。

本プログラムは、健康福祉学部看護学科の卒業研究（地域看護学）の一部として実施したものである。

１．事前に町の既存の資料等から地域のアセスメントを行い、地域の特性を整理した。

２．それぞれの施設にかかわる人々に面接し、様々な場面の参加観察を行うことにより、データを収集した。

３．都市教養プログラム「自然と社会と文化」での他分野の学生や町民の方々との討論により、町の人々の生活や社会資源など、地域の特性についての理解を深めた。

なお、本プログラムを実施するに先立って、3 月に健康福祉プログラム「八丈島調査」として、放射線学科教員と八丈町の関係機関と調整し、第二八丈老人ホームを見学した。

実施内容

１．活動内容

9 月 6 日：各施設でのオリエンテーション、予定の確認等の打ち合わせ、データ収集

9 月 7 日：各施設でボランティア作業等を実施しながらデータ収集

9 月 8 日：各施設でボランティア作業等を実施しながらデータ収集

9 月 9 日：各施設でボランティア作業等を実施しながらデータ収集・地域診断
9 月 10 日：各施設でのまとめ、記録作成
9 月 11 日～9 月 14 日：都市教養プログラム「自然と社会と文化」
都市教養プログラム「自然と社会と文化」で、地域診断の成果を発表した。

２．学生の状況

学生は自己の研究目的にそって、各施設でボランティア作業等に従事しながらフィールドワークを実施した。また、都市教養プログラム「自然と社会と文化」でのプログラムに参加した。各施設、島内でのフィールドワークでの学びを整理し、都市教養プログラム「自然と社会と文化」の町民も参加した全体討論の場で発表し、活発な意見交換を行った。また、八丈町歴史民俗資料館や町の人々との交流などを取り入れた「自然と社会と文化」のプログラムから、八丈島の自然と歴史、文化と人々の暮らしなどを体験し、多様な専門分野の学生グループで討論することにより、学生は、自ら学び、考え、発言するという学習行動がより積極的に実施できていた。

評価と展望

学生は、個々の研究課題を明らかにするために、自主的にフィールドワークを実施できていた。また、学生から、「自然と社会と文化」のプログラムの中で、島で暮らす人々や多様な専門分野の教員、学生との関わりの機会を得て、個々の研究過程を充実させるだけでなく、自身を成長させる機会としても有効であったとの感想が得られた。

また、今回のプログラムの協力が得られた関係機関とは、今後も継続的に連携し、長期的な関係を構築することが重要である。また、今後は保健・医療・福祉の分野での教育や研究、社会貢献として、大学の役割を具体的に検討する必要があると考える。

添付参考資料

以下に、3 名の学生の卒業研究の抄録を掲載する。

１．研究課題：離島住民の健康を維持するための食習慣の特徴

本研究は、離島住民の健康を維持するための食習慣の特徴を明らかにすることを目的として、特別養護老人ホームのサービス提供者を含む A 町の住民 6 名への半構成的面接、7 場面の参加観察によりデータを収集した。エスノグラフィーでの分析の結果、離島住民の健康を維持するための食習慣の特徴として、島で取れた野菜・魚を食べる、焼酎を日常的に

飲む人が多い、食事はほとんど自分で作っている、塩分摂取量が多い、糖分摂取量が多い、世代間での相違がある、変化してきているものという 7 つのカテゴリーが抽出された。A 町の保健師や栄養士は、地域の特性を考慮し家族全体に対して保健指導を行う、町民との生活の場が近いという強みを活用し頻繁な情報交換を行う等、町民の個別性を尊重しながら、健康維持に向けた食習慣を支援していた。

２．研究課題：離島における小規模作業所の役割についての検討

本研究の目的は、離島における小規模作業所の役割について明らかにすることであり、離島の作業所の職員 1 名に面接し、参加観察 10 場面（12 名）で収集したデータを、エスノグラフィーの手法を用いて分析した。その結果、8 つのカテゴリーが抽出された。離島の作業所特有の役割として、長期的な視点で病状安定のためのサポートをする、通所につなげ、通所を途絶えさせないためのサポートをする、ニーズに応えるために通常の業務を超えたサポートをする、の 3 つのカテゴリーに整理できた。一方で、全ての精神障害者のニーズに応えることの困難さがあるという課題が示唆された。

３．研究課題：離島に暮らす施設利用高齢者の健康維持のとらえ方

本研究は、社会資源の少ない離島で施設を利用して生活している高齢者の健康維持についてのとらえ方を明らかにすることを目的として、施設利用者 9 名、訪問介護員 1 名に半構成的面接調査を実施し、施設利用の 9 場面の参加観察によりデータを収集した。エスノグラフィーによる分析の結果、身体の衰えと寄り添い生きる、食生活へのこだわり、自分の好きなことを自由にする、家族や知人のために健康でいたい、離島という環境で生きる、健康を意識しないで生活する、病気にならない、規則正しい生活をするという 8 つのカテゴリーが抽出された。これらを個人と環境の側面で整理すると、個人では食生活へのこだわり、積極的な身体の管理、生きがいを見つけることが健康維持に有用であった。環境では、本人を支える対人関係や、離島という環境が健康維持に有用であった。看護職の支援として、自分の身体への関心を高めること、生きがいづくりについて支えることが重要と考える。

留学生・国際交流プログラム

実施年月日

伊豆大島、青梅・御岳山にて合計３回実施。詳しくは、下記に実施場所別に記載。

目的

本学に学ぶ留学生は、ここ数年 200 名を僅かに超える数で推移している。留学生数は中国を筆頭に、東アジアから東南アジアまで広範にわたっている。これら留学生は本学で学問を究めた後には、母国での発展の中核を担うことが期待されている。滞在中に、本学キャンパスで学問に力を注ぐことはもちろんのことであるが、東京という大都市について人工都市部だけではなく、海、島、山等の豊かな自然が存在することを実体験として獲得することも極めて大事なことである。こうした体験的学習機会を提供することは本学の責務である。同時に、様々な困難な状況下で学問にいそしむ留学生と、本学の日本人学生との可能な限りディープな対話の機会を、寝食を共にする中での共有体験として提供することはアジアと日本との将来の豊かな相互協力に大きく役立つはずであると信ずる。野外の実体験と、激動する国際情勢を象徴するキーワードをもとに忌憚のない討論の場を提供することを目的として本講座は企画実施された。本プログラムは、東京都の掲げる“東京がアジアのヘッドクオーターに”ということにもつながる極めて重要なプログラムであるといえる。

留学生への野外講座参加者の募集は、ポスター掲示、説明会等により行った。また、国際センターの協力による周知も行った。募集ポスターの 1 例として 2010 年 12 月の御岳講座についてのものを示す。

留学生：野外体験授業@伊豆大島

実施年月日

2009 年 11 月 13 日～15 日（船中１泊、２泊３日）

参加者

留学生 17 名（国籍：中国、ドイツ、ベトナム、タイ、台湾、韓国、スペイン、バングラディッシュ他）、日本人学生５名、教員５名：黒川信・加藤英寿（生命科学）、菅又昌実（衛生学）、関根紀夫（放射線学）、小林正典（数理科学）、高橋宏理事長、職員１名（近藤）、

現地講師

白井嘉則：前大島町議会議長、中林利郎：大島高校教諭・ボランティア観光ガイド、白井孝：潜水漁師

内容

伊豆大島では活火山の三原山のカルデラから火口（お鉢）を巡り、1986 年の割れ目噴火で元町に迫った溶岩流跡で火山活動を実感した。また海に囲まれた豊かな自然に触れ、島の文化や風習を古民家で実地に学ぶなど沢山の体験をするとともに、伝統の椿油製油所、くさや工場、農産物直売所などを訪れ、大島の社会と歴史と文化に触れた。夜は、島の高齢化問題や経済の推移、今後の展望などをテーマに、本学教員は言語学、公衆衛生学及び生物学等の立場から、また、町長はじめ地元各界の方々は島から見た、社会的、経済的な特徴、他の東京の島々との繋がり等について講義、討論が行われた。参加した留学生からは、自国とも比較しながら活発な意見や質問、感想が述べられた。また、留学生から首都大学内では日常的にそれほど横の繋がりがないことが報告され、これを解消する機会としてもこの学外講座のように寝食を共にしながら話す機会は貴重であるとの意見が述べられた。

実施内容

11 月 13 日(金)22:00 出航竹芝発大型夜行船
11 月 14 日(土) 6:00 大島入港　民宿にて
休憩・風呂・朝食
郷土資料館、高田製油所、
元町溶岩流、地層大切断面、
貝の博物館:パレラメール、
くさや工場などの見学
夜は「海と生命」の講義
討論会
11 月 15 日(日)　討論会の続き
三原山へ。カルデラ、お鉢（火口）めぐり
ぶらっとハウス:地産品販売所、買い物
14:30　大型客船出航　18：30 横浜港入港　解散

大島への交通手段は様々なルートがあるのが特徴的だ。ちなみに高橋理事長は、14 日朝羽田からの ANA 便で大島に渡る予定であったが、天候不順で欠航になってしまい、急遽、竹芝客船ターミナルへ向かうもジェット船も全便欠航。最終的に調布飛行場へ向かいセスナ機にて、大島へ無事到着した。到着後、理事長は留学生相手に英語で、日本および東京にとって留学生がいかに重要な存在か、首都大学東京では留学生教育をいかに重視しているか、留学生が教員、日本人学生らとともに現場体験的に泊まりがけで学ぶことが如何に意義深いかなどを 15 分以上に亘って話された。留学生にとっては、理事長や町長などをはじめとして、異分野の教員、日本人学生らと直接話す貴重なチャンスとなったが、一方日本人学生にとっても、各国の外国人と接する絶好の機会であり、初めての体験となる学生であっても帰路の船上ともなると、身振り手振りとともに、自然に英語で話そうとする姿勢が身についていた。

大型客船船上にて

奥多摩霊峰御岳山の体験講座

実施年月日

2009 年 12 月 5 日～6 日　　青梅・御岳山荘討論会
2010 年 11 月 13 日～14 日　留学生：青梅・御岳山荘討論会

参加者

2009 年：留学生 13 名（国籍：中国、台湾、バングラディシュ、ベトナム、ドイツ、スペイン）、日本人学生 24 名、教員 8 名：何（社会人類学）、黒川・朝野・菅原（生命科学）、菅又（衛生学）、福士・小倉・眞正（放射線学）、社会人 2 名（小澤順一郎：小澤酒造社長、白井嘉則：前大島町議会議長）
2010 年：留学生 7 名（国籍：中国、フィリピン）、日本人学生 8 名、教員 4 名：黒川・可知・菅原（生命科学）、菅又（衛生学）、TA1 名

実施内容

日本人学生、留学生の枠を越えて、御岳山の宿坊の大広間で討論し、大自然を体験しようという企画。2009 年 12 月および 2010 年 11 月に 1 泊 2 日で実施された。

様々な学部・コースの日本人学生、留学生、教員が一同に秩父多摩甲斐国立公園の御岳山、関東一の霊場御嶽神社を中心とした信仰の場を訪ね、宿坊「御岳山荘」に泊まって大広間で大討論会を実施した。翌日は、牧野標本館や植物生態学の教員の案内で御岳山の自然を散策。異分野、国籍、学生-教員の壁を超えた自由な交流を楽しんだ。

2009 年行程

12 月 5 日（土）14:00　現地集合、御岳神社宮司より、御岳山宗教文化について講義
　　19:30　討論会
12 月 6 日（日）　8:00　朝食
　　9:30　御岳山ウォーキング開始（菅原先生の植物の話を聞きながら）
　　自然の中で昼食
　　14:00　御岳山頂駅到着　解散

今後の展望

尖閣諸島、北方 4 島等の領有権に関する国際的軋轢、中国富裕層による北海道における土地の買い占め、石油を保有するイスラム圏における政治的不安定さの増長、地球の温暖化、感染症の生態学的変化、インドネシアからの看護師の受け入れ、少子高齢化等の年齢別人口構成の変化、社会福祉の基本システムの揺らぎなど、枚挙にいとまがないほど今世界は様々な課題を抱え揺れている。新たな価値基準を打ち立て、地球号の新たなかじ取りはその多くを若者に委ねなければならない。日本オリジナルの気構えを持ちながら、国際社会で毅然と主張し、具現を可能とする強い意志と持続力を持った若者を育てるということを目標に、研究代表者 3 代に渡って継続してきた本プロジェクトでは、本学の教育の根幹に繋げるべきものの一つとして、留学生と本学学生との教育プログラムの体系化とその全学的実施の必要性を示したと考えている。

本学の全教員が変革を必要とするという強い意志のもとに新たなカリキュラムを構築し、早急に実施する。そういう最終決断の時期にあるものと考える。

本プログラムの実施の目的は、本学日本人学生と各国留学生とのホットな討論を行うことにより、両者の距離を縮めると共に大学内における国際交流の端緒となることである。どのようなことをテーマに討論するのかを個々の参加学生からあらかじめメールで募集し、それらの中からテーマを絞って討論を進めた。この学生討論会についてコメントが参加した法律学コースの日本人学生より寄せられたので以下に掲載する。

日本人参加学生のコメント

今回行われた、御岳山野外講座のプログラムにおいて討論会があり、テーマを大別すると五つに分類することができた。順に挙げていくと、①国別間のカルチャーショック、②表現に関する制限、③日中関係、④留学、⑤留学生の日本における環境の五つである。この内、私が聞いた、あるいは議論に少々参加した①、②、③について参加者の視点からコメントを加えていきたい。

一、国別間のカルチャーショック

まず、一つ目に出てきたものは、カルチャーショックである。留学生にとって自国と違う他国での生活では、やはり文化の違いから戸惑うことなどが多いようである。討論会の中でも出てきた例をあげると、例えば、中国では電車などに乗っているときに、自分が座っている席を他の人に譲ることは考えられないそうである。しかし、日本に来てから日本では席に座っている人が、高齢者などに席を譲ることもあることを見て、なぜそのようなことをするのかが、最初は理解できなかったそうである。私はこれを聞いて、中国人の方々が、このような考えをもっていたことに違和感をもった。日本でもよく聞かれる「お年寄

りを敬いなさい。(あるいは大事にしなさい)」という言葉や考えは、本来中国の思想家である孔子の考えた「長幼の序」などに基づいたものであったはずで、日本はその考えを中国から伝えられたに過ぎなかったはずである。それがいつの間にか、思想の本国である中国では少なくとも電車の中では考慮されなくなり、日本では少なくなりつつあるものの、現代でも考慮されているということに、私は違和感をもったのだろう。詳しくは述べないが、中国がこのような状態になった原因の一つに、文化大革命による知識人弾圧の後遺症によるある種の文化的断絶のようなものがあると、私は考える。

二、表現に関する制限

二つ目に上がったテーマが、表現に関する制限である。中国国内では、現在政府によって情報の統制がなされており、インターネットやテレビ番組なども当局のコントロール下にある。最近の事例では、ノーベル平和賞の受賞者に中国人の民主主義活動家が決定した際に、受賞発表の番組が突然視聴不可能な状態になった例が挙げられる。留学生の方々によれば、表現に関する制限によって、国内での意見がまとまっているという見方もできるという意見があり、他方で日本などのように表現の自由が認められている国々は、逆に国内の意見(世論とも言えるかもしれない)がまとまっていない、という見方ができるとのことである。

確かに、私たち日本人にとっては、表現の自由が憲法によって保障され、検閲などもない(これについては分野によっては賛否両論があるかもしれない)という状況は当たり前のものである。しかし、一方で、このような見方もできるということに関して賛否は分かれるであろうが、私には興味深いことである。確かに、意見が自由に言えるということは、現在の日本の国会を見ても分かるように様々な主張をするグループができてまとまりにくいという側面もあることは間違いない。しかし、現在の中国は一党独裁で政治がおこなわれており、政府に都合の悪い意見は封殺されやすいという点を忘れてはいけない。これは、中国と日本の政治体制の違いは当たり前のことであるが、一つは文化面の違いも理由の一つにはあるかもしれない。中国では、古来より本や漢詩というものは各王朝の文官や科挙の受験者等の知識階級によって成長してきた面が大きい。他方日本では平安時代ごろまでは、貴族文化中心の中国と似たような状況であったが、室町時代以降から、初期のころは豪商などの商人文化が、江戸時代のころには寺子屋などの成立により、町人文化が発達し、小説では「南総里見八犬伝」や「雨月物語」等が滝沢馬琴らによって書かれて貸本屋を通して、町人たちに読まれ、俳句は松尾芭蕉ら、やはり町人らの担い手によって発展した。また、歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」のように当時の大事件が風刺的に演じられ、限定的ではあったかもしれないが、封建制度の末期からは、町人などの特権階級ではない階級の人々でも、意見を表明できた。大日本帝国が成立していた間も表現の自由は制限がされていたものの、太平洋戦争中や直前はともかく大正期の護憲運動などからも分かるように、政治を動かすような表現活動が存在した。

以上のように、政治体制の違いや文化的側面などから、表現活動の制限に対する認識の違いが生じたと思われる。

三、日中関係

本講座は、中国人留学生の方々の参加や尖閣諸島中国漁船衝突事件の約 2 ヶ月後ということもあり、日中関係についての意見も出された。これに関して、最も言及が多かったことは、中国における反日デモであった。ある中国人留学生の考えでは、中国で反日デモが頻発している理由は、中国の国力の低下であるらしい。つまり、中国共産党の中国国民に対する統制力が低下しているからこそ、デモが頻発し、またデモの参加者が暴徒化しているのだ、ということであるらしい。これに対して、日本人の学生からは、中国の国力が上昇しているからこのようなデモが発生するのだ、という意見も出された。こちらの意見としては、中国のデモは届け出制(日本も同様に届け出制ではある)なので、政府などによる統制はなされている。また、中国国民が中国の国力に自信をもっているからこそ、日本からの反論など歯牙にもかけず、このような反日デモを起こすのだ、と主張する。

私としては、どちらも一理あるように思えるが、中国人留学生の意見の方に理があると考える。つまり、対外的には中国の国力は、国内総生産(GDP)が今年中に日本を抜いて世界 2 位になることが予想されるなど上昇しているものの、反日デモを許容し、経済格差などに起因する国民の不満のガス抜きを行わなければならないほど、中国の国民に対する統制力が衰えていると考えられる。以前の中国であるなら、文化大革命や天安門事件等でもわかるように、反発するものに対しては徹底的な弾圧を加えてきた。しかし、GDP の上昇などが示す中国の経済的発展は、上海を代表とする発展する沿海地域と今回反日デモが多発した武漢などの内陸地帯との経済格差が大きくなるという事態も引き起こし、内陸地域の国民の政府に対する経済への不満は大きくなっていたと推測される。このような政府に対する不満の矛先を変えるために、歴史問題や領土問題といった数々のナショナリズムを高揚させることのできる材料をもつ日本との間で今回の事件が発生したことにより、中国政府は政府に対する不満から日本への反感へ不満のはけ口を転換させてと考えられよう。ただし、デモも後になってくると反日を掲げながらも経済への不満を記した横断幕などが見られるようになったことがマスコミ各社の報道により、明らかになっていることから、やはり留学生の方の言うとおり、統制力の低下がみられると思われる。

以上のように、私としては意外であったが、この問題に関しては中国人留学生の方が中国の国力低下を、日本人学生の方が中国の国力強化を論じ、大変興味深いものであった。

四、まとめ

以上のように、様々な意見が出た討論会であったが、私としては考えもつかなかった発想の主張も存在し、物事を多面的にとらえることの難しさや外国の方と話すことの醍醐味を改めて感じることのできる会であった。欲を言うならば、全ての参加者の意見を聞いてみたかったというところであるが、時間の関係ややり方の問題から、次回の改善点と言うにとどめておく。最後にはなるが、このような講座に参加する機会を与えて下さった方々に御礼申し上げて、以上をコメントとする。

第3回首都大学東京教育開発プロジェクト公開フォーラム

東京に学ぶ魅力-島・海・山-
自然と歴史と文化と

主催：首都大学東京『特徴ある学外・体験型教育プログラム開発・実施のための全学的研究』PT
共催：大島町・八丈町教育委員会　首都大学東京産学公連携センター・オープンユニバーシティ・
都市科学連携機構・国際センター

会場：首都大学東京　南大沢キャンパス91年館

日時：平成２２年7月16日（金）

14:00～17:00

プログラム

開会の辞　研究代表者 福士政広
基調講演　学長 原島文雄　東京 - 大都市・自然 そして科学技術

第1部 東京の島、海、山々を舞台とした学外・体験型教育

特徴ある学生・留学生・社会人教育をめざして　福士政広（健康福祉学部）
海に学ぶ－生命の誕生と環境　黒川 信（生命科学専攻）
奥多摩・伊豆－小笠原諸島の豊かな植物　菅原 敬（牧野標本館）
八丈島学のすすめ-学びの場としての八丈島-　伊藤 宏（八丈島歴史民俗資料館）
島ことばと文化　ダニエルロング（日本語教育学専攻）
奥多摩・日本酒の魅力・その伝統と文化　小澤順一郎（小澤酒造）

第2部 パネルディスカッション

社会貢献力・国際貢献力を持つ骨太な若者を育てるために ―地域と首都大学東京との連携―

パネラー

菅又 昌実	（オープンユニバーシティー）	有為な若者育成のための本学の役割
白井 嘉則	（前大島町議会議長）	迎える島の立場から：都市と離島の交流発展
中林 利郎	（大島高校教諭）	ボランティアガイドの立場から
増木 米孝	（大島町教育委員会教育長）	
金川 育男	（八丈町教育委員会教育長）	
三宅 正彦	（東京都議会議員）	
中島 義雄	（東京都議会議員）	
宇田川聡史	（東京都議会議員）	
東村くにひろ	（東京都議会議員）	
高橋 宏	（首都大学東京理事長）	

おわりに：高橋 宏

問い合わせ：『特徴ある学外・体験型教育プログラム開発・実施のための全学的研究』PT
報告会事務局　担当（近藤日名子）　首都大学東京　理工学研究科
TEL042-677-2578（直通）　kondou-hinako@jmj.tmu.ac.jp

第 3 回首都大学東京教育開発プロジェクト公開フォーラム

東京に学ぶ魅力―島・海・山―自然と歴史と文化と
会場：首都大学東京南大沢キャンパス 91 年館
日時：平成 22 年 7 月 16 日（金）14:00～17:00

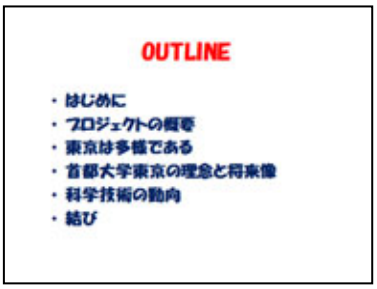
第 1 部　東京の島、海、山々を舞台とした学外・体験型教育

基調講演

演題：東京：大都市・自然 そして 科学技術
講師：原島　文雄（首都大学東京　学長）

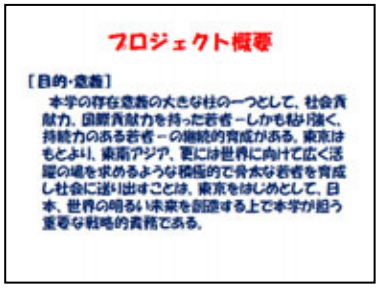
暑い中、第 3 回首都大学東京「教育開発プロジェクト公開フォーラム」に多数お集まりいただき、本当にありがとうございます。

首都大学東京は高等教育機関として「教育と研究」が車の両輪で、常に教育の質をいかに上げていくかということに対して大変努力しています。教育のクオリティを上げるためのプロジェクトやグループを常に幾つか用意し、次の時代に向けての新しい教育を模索している、その中の一つがこのグループです。



今日のフォーラムのテーマは「東京に学ぶ魅力―島・海・山―自然と歴史と文化と」と大変大層ですが、首都大学東京なので非常にぴったりした名前になっています。その中で今日私がお話しするのは、東京を中心にして、大都市・自然、そして科学技術と、三題噺のようですが、雑多な話です。雑多であることは非常に重要で、大都市の最大の特徴は、多様な文化をすべて受け入れることです。そして、その多様性こそが都市を形成し、それによって次の文化が必ず出てきます。すべての人間の歴史はそこから始まっています。

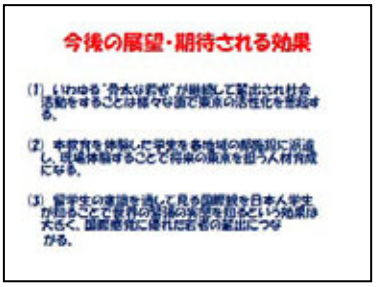
そして、都市というのは、必ず自然の恩恵を受けて発展していくものです。過去、環境破壊をして周りの自然を壊し、都市が消滅して移転せざるを得なかった都市がいくらでもあるわけで、それはいかに都市が自然に抱かれて存在しているかということを意味しています。それに加えてなぜ「科学技術」かというと、私は何十年と科学技術に携わってきたので、必ず科学技術の話と関連して話したくなるからで、これは付け足しだと思っていただければ結構です。プロジェクトの特徴については先ほども話がありましたので簡単にしますが、東京は多様であるということ、首都大学東京はその中でどんな役割をするのか、科学技術の動向はどうかということについてお話しします。



1. プロジェクトの概要

本プロジェクトの目的・意義は、本学の存在意義の大きな柱の一つである、社会貢献力、国際貢献力を持った若者―しかも粘り強く、持続力のある、心身ともにたくましい、そして国際的な人間を育てようという目的のために、一貫して都下全域、特に島や山の中で学んでいくことです。

それによって期待される効果は、骨太のたくましい若者が継続して輩出されること、東京という大都市の将来を担う人材が育成されること、かつ国際感覚に優れた人が育つことで、それがこのプロジェクトの理念です。



2. 首都大学東京の理念と将来像

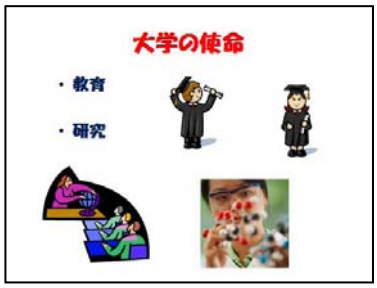
首都大学東京は、自然の環境に恵まれたキャンパスを有しています。「大都市における人間社会の理想像を追求」するという理念を掲げていますが、これを作った人が東京の自然を認識していたかどうかは、はっきり分かりません。皆さんの感想は後ほど聞かせていただきますが、必ずしも認識していなかった可能性もあります。

東京都のタックスペイヤーに対する義務として、「都市環境の向上」「高度な知的社会の構築」「活力ある長寿社会の実現」をキーワードにしています。もう少しブレークダウンすると、都市環境というと少し自然のにおいもしてきますが、従来の意味の環境では、東京は世界で最もきれいな都市なのです。水も空気もきれいで結構緑も多く、街もごみがなくてきれいです。大変いい環境なのですが、一方で東京が地球環境に与えている負荷は、また世界最大です。自分の環境はいいけれども人の環境を悪くしているということで、それ自体を改善しなければいけません。

また「高度な知的社会の構築」、東京は恐らく世界で最も高い教育水準の人たちが住んでいるところで、新しい文化を創造しつつあります。

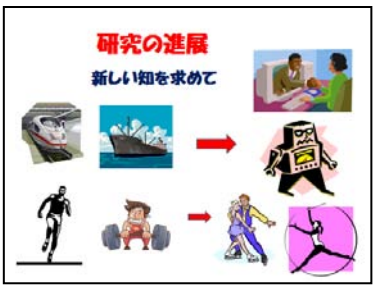
かつ、現在は長寿社会です。今の平均寿命は八十何歳で、最終的に今世紀末には 90 歳ぐらいまでいくようですが、日本人の平均寿命が 50 歳を超えたのは、まだ 60 年ほど前の第二次大戦後です。江戸時代の平均寿命は 40 歳と少しで、奈良時代で三十何歳です。さらに、縄文時代には 20 歳にいかない程度で、人生観も全く違っていただろうと思います。

ご存じのとおり、大学の使命は教育と研究です。教育と研究が明らかにミッションとして一緒になっているのは、大学だけです。小学校から高校のミッションは教育が中心で、教育と研究を並べて書くことはほとんどありません。また、大学の外には企業あるいは国や自治体の研究所がたくさんありますが、これは教育とかなり分かれています。なぜ大学は教育と研究が一緒なのかと言われると、これはもう歴史的にそうなのだと言うしかないのですが、主としてヨーロッパで発達した大学は、人間の最高の知をつくり出すとともに、次の知をつくり出すと同時に育てるという正の循環の中で発達しました。これは高等教育機関としての大学の非常に重要な特徴です。



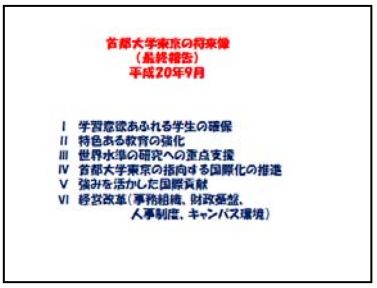
システムとして教育を持っている生物は人間だけです。ライオンなどもある程度、子供にえさの捕り方、狩りの仕方などを教育するのですが、社会システムとして教育を持っているのは人間だけです。このおかげで、人類は 1 万年前にはアフリカの草原にいるライオンのえさにすぎなかったのですが、今はライオンどころではない、立派な文明を持っ

ています。この 1 万年の間に、DNA はそんなに変わっているわけではないのです。ライオンの進歩は DNA の進歩ぐらいなのですが、人間の進歩はそれどころではありません。教育によって知識を蓄積してきたことが、人間と動物の最大の違いです。ライオンは人間をどう見ているか分かりませんが、われわれからライオンを見るとそういう感想になるわけです。



教育と同様、もう一つのミッションである研究も、随分変わっています。つい最近まで大学の研究は、理工系の話をしますと、数値を追い求めていました。例えば、新幹線がいかに速く走ったかを競ってきたのです。あるいは、100 万トンのマンモスタンカーを造った、3 ミクロンのデザインルールで半導体を作ったなどと、数で威張っていたわけですが、最近はそんなことはありません。

スポーツも、つい最近までは何 kg のものを持ち上げた、100m を何秒で走ったという数値で争うものが人気種目でしたが、最近はもともと数値化できないフィギュアスケートやシンクロナイズドスイミング、体操などに人気があります。競争して順位を決めるという文化を人類は持っていたのですが、今は数値化できないもので争うという競技に人気が移っています。本来、数値化して順位を決めることは、ほとんど意味のない話なのかもしれません。



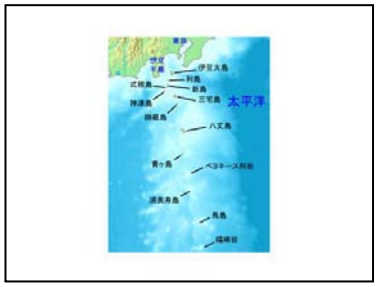
そして、科学技術も変わっています。いかにかわいいロボットを作るかということは数値化のしようがありません。それから、昔は最大トルクや空燃比など、カタログに記載されている数値ばかりを見て車を買ったものですが、今はそんなものを見る人は誰もいません。いかに乗り心地がよいか、ドライバビリティがよいか、環境にやさしいかといった、あまり数値と関係のないことで買うのです。

科学技術とスポーツが相談したわけでも何でもなくて、多分、これは人間の文明の進歩だろうと思われます。人間というのは同時にいろいろなところで進歩していくもので、科学技術も感性の世界に入りつつあるわけです。

3. 東京都は多様である

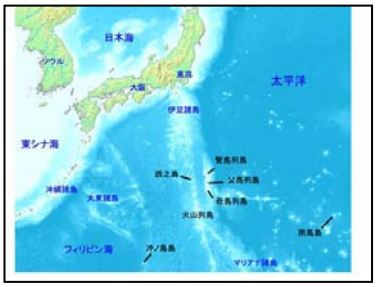
今日お話しする前に、東京都のことを知らないかを考えてインターネットで探してみたら、まず最初に出てきたのがこれです。今皆さんがいる八王子は東京都のちょうど真ん中で、東側が 23 区、今日話題になるのは山間部の多摩地域や伊豆七島など島嶼地域です。

次に「伊豆七島」と検索すると、地図が出てきました。七つではないのです。こんなにたくさんあってなぜ「伊豆七島」なのか。伊豆諸島の中には読めない名前の島も結構あります。「須美寿島」は「すみす」でしょうか。「孀婦岩」は「そうふいわ」ですか。これは小笠原諸島とその他の諸島ですが、とんでもない広さで、読める字があまりありません。「聟島」は「むこじま」ですか。



島嶼部は 1200km にわたって続くそうです。東京から福岡までの切符を買うと 1200km と書いてあって、大体その

くらいらしいです。「南方500kmには北マリアナ諸島があり」「太平洋とフィリピン海が分けられている」。ものすごい話です。今われわれがいる都市部などはものすごく小さく思えてきます。



島のリストも出てきました。「1」と書いてあるのは人が住んでいる島、「2」は昔住んでいたけれども今は住んでいない島、「3」が無人島です。私の行ったことのある島はほとんどなくて、伊豆大島と父島と、八丈島にも昔行きましたがその程度で、こんなにたくさんある島に、東京都に半世紀以上住んでいながらほとんど行っていないことに気が付きました。「原島」と私の名前が付いているのかと思ってびっくりしたら、「大野原島」でした。

いずれにしろ、これほど東京都は広いのです。この広さは世界地図の上でちゃんと面積として分かるぐらいで、多分、一つの自治体でこんなに大きいところは、世界の中でもあまりないでしょう。シベリアのどこかの自治区で、もっと大きいところがあるかもしれませんけれども、領海を含めた一つの自治体としては東京が世界最大級です。それほど東京都は多様であり、その東京都がオペレーションしている唯一の大学が首都大学東京です。

4. 科学技術の動向

関連して、科学技術の最近の進歩の話をします。どんなことを考えるときにも、科学技術のことを頭に入れておいていただけるとありがたいです。科学技術というのは、過去においては戦争と経済発展の道具としか認知されていませんでした。過去数千年の人類の歴史の中で、ナポレオンまでは科学技術は戦争の道具として使われてきました。その後、産業革命があって経済発展の道具になり、あまり文化とは関係なかったのです。

現在は、やりすぎて環境を壊して、人類の生存が怪しくなっています。今のままの発展を続けると、地球がなくなるのではなくて必ず人類がなくなります。地球はずっと残ります。われわれはそれに気が付いて、恐らくあと 50 年ぐらいかければ、科学技術によって地球環境問題を解決してしまうだろうと思います。少なくとも人類の生存を確信するぐらいのところまではいくと思います。

ただ問題は、今はちょうど人の入れ替わり期で、地球を壊した科学技術を使ってきた人がまだ生きていることです。大変失礼ですが、その人たちがいなくなって次の世代が出てこないと、新しい、本当の意味での地球を救う科学技術は、本格的には使われないと思います。あと 50 年ぐらいたてば完全にそういう時代が来るでしょう。

そのときに、例えば今世紀の半ば、2050 年まで生きておられる方がこの中にどれくらいいるかは分かりません。前の方に座っておられる方は無理だと思いますが（笑）、多分、環境問題はかなり解決されるでしょう。食料も、今の日本人のようにあまりぜいたくをしたり、毎日大宴会をするような話でなければ、恐らく不足はない。それからエネルギー問題も解決して、かなり知的な人生、クオリティ・オブ・ライフが知性でサポートされる時代が来ると、われわれは考えています。

100 年前の人類は、90%は体を使い、10%は頭を使って収入を得ていましたが、今はちょ

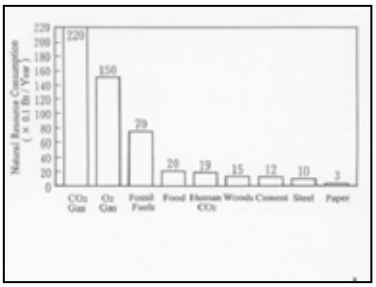
うど逆になって、先進国の 90%以上の人が頭脳労働、10%以下の人が肉体労働で収入を得ています。今はスポーツ選手のように体を使ってお金を稼ぐことは、かえって難しいです。先日、サッカーの試合を見ていたら、ずっと頭を使っていて、サッカー選手も知能労働者だと見直したのですが、そのような状態です。

われわれは科学技術によって、過去 100 年間で肉体的苦痛を伴う労働からはほとんど解放されました。それによって人間はどのくらい幸せになったか分かりませんが、まだかなりメンタルにストレスを感じる人は多くいます。恐らくこれからの約 50 年の間に、科学技術や心理学、脳科学その他によって、メンタルな苦痛を伴う労働からも人間は解放されるでしょう。そのときにどういう人生を送るのか。非常に多様な社会になろうかと思います。一人一人が個人の価値観を自分で決めていく社会です。私から言うとちょうど孫の世代には、孫もそのときにはもう結構な年になっていますが、そういう時代が来るだろうと思われています。

5. われわれの目標

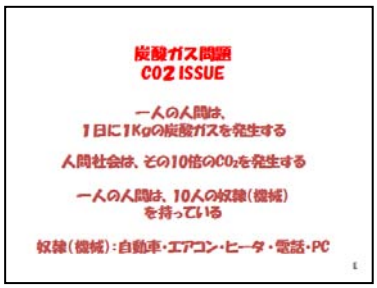
5-1. 快適な環境

われわれの目標は、まずは環境です。人類は 1 年間に 220 億トンの CO_2 を排出して、150 億トンの酸素を消費しています。人類が発生する CO_2 の 10 分の 1 は呼吸によるものだといわれていますから、この部屋に 100 人いるとすると、1000 人分の呼吸量に当たる CO_2 を、われわれは排出しているわけです。



最近はスマートグリッドからハイブリッドカーに至るまで、随分努力しています。燃費はリッター当たり三十数 km、最近は 40km を超え始めました。将来の燃料電池車ではゼロエミッションで、排気中の CO_2 はゼロになり、出てくるのは水だけという状態に 2050 年ごろにはなるでしょう。

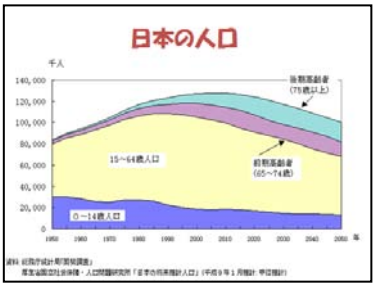
一人の人間は 1 日 1kg の炭酸ガスを発生させますが、人類社会はその 10 倍の CO_2 を発生させています。一人の人間が 10 人の機械の奴隷を持っているのと同じです。奴隷というのは、自動車、エアコン、ヒーター、電話、PC などです。2000 年ほど前、ギリシャかローマの時代には、一人の市民が 10 人の奴隷を持って生活をしていたので、今の人間と同じぐらいの生活レベルだったのです。今、少なくとも先進国にいるほとんどすべての人は、その当時の市民の最高の生活レベルをエンジョイできるようになっています。それは科学技術と、もう一つは民主主義の発展によるものです。



今、日本人は平均して 25 人の奴隷を持っている計算になります。つまり、一人一人が鼻から発生させる CO_2 の 25 倍

を出していて、アメリカ人は 55 倍出しています。日本とアメリカの生活レベルはほとんど違わないのに、なぜこんなにアメリカ人は奴隷をたくさん持っているのかというと、アメリカの奴隷は性能が悪いからです。炭酸ガスばかり出してちっとも働かない。例えば、国会に行くのにキャデラックに乗っていくと、こういう生活になるわけです。

最終的に一人の人間が奴隷の数を 10 人まで下げれば、地球は持ちます。100 億人で 10 人、1000 億人分のところで、平衡を保てるような時代が来るでしょう。そこまでは、われわれは生活レベルを下げずに、あるいはクオリティ・オブ・ライフを上げながら、CO_2 の排出を減らしていくことになります。

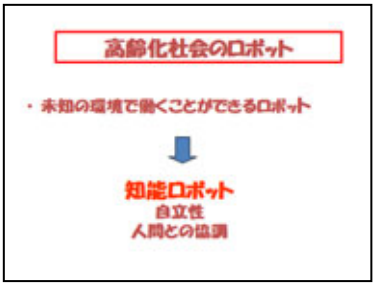


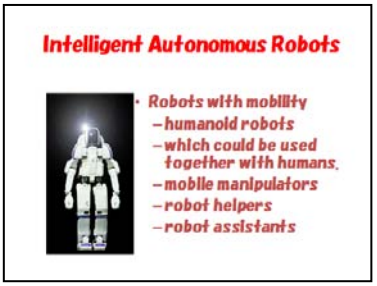
5-2. 幸福な長寿社会

2010 年現在、日本の総人口のピークは既に過ぎていて、50 年後になると 1 億人になります。さらに、2100 年には日本の人口は今の半分、6000 万人強になるだろうといわれています。100 年で半分になるとすると、2700 年ぐらいになると日本人は二人になってしまいます。その両方が男性、両方が女性だったら、日本人はいなくなります。多分、そういうことにはならないと思いますが、単純な計算をしていけばそうなります。

日本の場合は江戸時代の 4000～5000 万人ぐらいのところが、国土としても一番いいのです。今は急に減るので困っていますが、定常状態としてはそのぐらいになる方がハッピーだろうと思われます。その分、ロボットが労働をしてくれます。これは私どもの専門分野です。

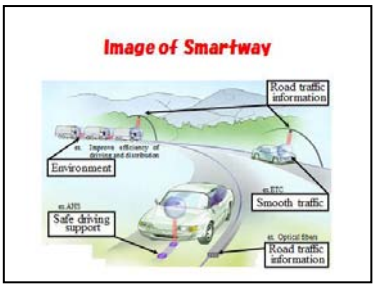
今の科学技術でできることは、ほとんど終わっています。何が欲しいか言っていただければ大体のものは作れますし、今の科学技術でできないものは「それはできません」とすぐに言えます。先ほど言ったように、つい前世紀までの数値の争いは、何ができるかを争おうとしたのですが、今は感性で科学技術を使う時代で、理工系や文系という区別とはほとんど無関係なところがあります。何が欲しいかをディスカッションして、実際に何ができるかやってくれるのはコンピューターです。



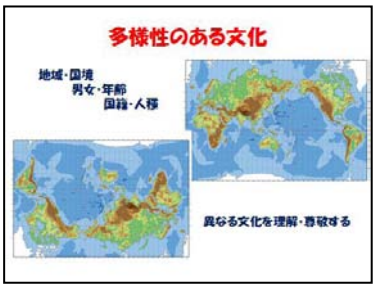


5-3. 知的な人生

多分、2050 年には交通その他の環境が完全に整います。恐ろしく多様化した、科学技術によってサポートされた、美しくて知的な人生が送れるようになっているだろうと思います。



6. 多様性のある文化



右の地図はわれわれが普段持っている世界地図ですが、この上で面積が分かるぐらい東京都は広いのです。日本が真ん中にある世界地図は世界的に非常に珍しく、東アジアでしか使われていません。左はオーストラリアで使われている地図で、オーストラリアが真ん中にあって、上下がひっくり返っています。これを見ると皆さんは変だと思われるかもしれませんが、オーストラリアではこれが当たり前の世界です。これほど価値観というのは違うものであり、すべての異なる価値観・文化を理解して尊敬すること、われわれ大学の教育もそこから始めようと思います。地域・国境、男女・年齢、国籍・人種、これらの違いを理解した上でお互いに尊敬し合う、多様な文化をつくっていくことが、われわれの最終の目標です。

世界中の地図の九十数パーセントは、グリニッジ天文台の経度がゼロなので、イギリスがど真ん中に描いてあります。日本では当たり前の日本が真ん中にある世界地図をヨーロッパ人、アメリカ人が日本に来て見ると、「これは一体何だ」と、われわれがオーストラリアの地図を見るのとほとんど同じ違和感を持つのです。日本が極東などとはとんでもない、日本はセンターで、ニューヨークが Far East（極東）です。イギリスに至っては Far West（極西）です。中東は Middle East ですが、これだと Middle West になるわけです。言葉もいろいろです。つまり、文化の一つの表現なのです。このような地域・国境、男女・年齢、国籍・人種を乗り越えて、お互いに尊敬しつつ、新しい文化をつくっていきたいものです。

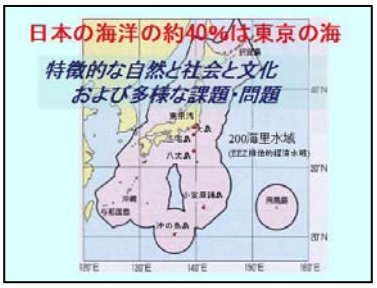
ぜひ皆さんにはさまざまな形で大学をサポートしていただければ幸いです。本日のこのフォーラム、プロジェクトを推進してこられた先生方、そして学外の非常に多くの方々のサポートに対して、心からお礼を申し上げます。簡単ですが私の話はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

第1部 東京の島、海、山々を舞台とした学外・体験型教育

演題：海に学ぶ―生命の誕生と環境

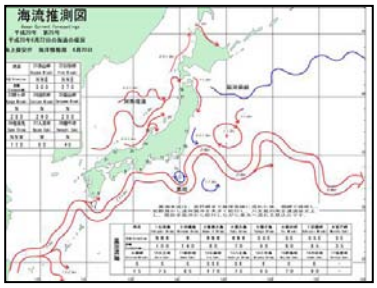
演者：黒川　信（首都大学東京大学院理工学研究科生命科学専攻　准教授）

原島学長の講演にありました通り東京は、非常に大きな海を持っています。その面積は日本全国の海の何と 40%を占め、一番大きい海を持つ都道府県が東京都です。そして、そこには多様な自然があり、独特な歴史、文化、社会があります。せっかく東京都にあるのだから、東京都唯一の公立大学として是非それを学びたい、そこをフィールドに研究を行い、そこから新しいことを見つけていきたいということで、この全学プロジェクトが動いています。私は生物学、生命科学という立場からご紹介します。

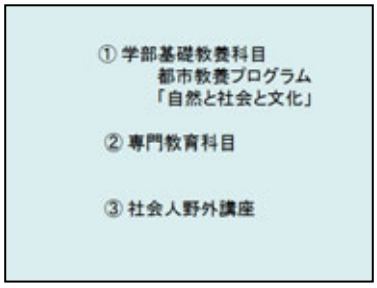


1. 本プロジェクトの構成

東京都の海は黒潮の影響で非常に特徴的な二つの領域に分かれていて、東京都でありながらほとんど亜熱帯の海があり、黒潮の流れ黒瀬川が流れ、そして冷たい海があります。さらに、黒潮はしょっちゅう蛇行して、いろいろなことが起こります。もともと海にはさまざまな多様性がある中で、この潮の蛇行のおかげでまたいろいろなことが起こります。



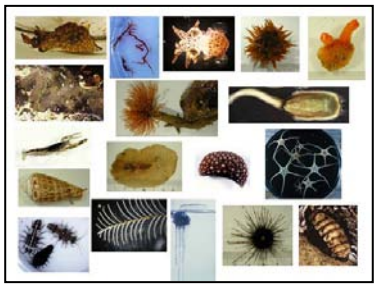
こうした東京都の持つ魅力的なフィールドで、われわれは例えば学部学生の教育では「自然と社会と文化」というプログラムを作り、学生たちが様々な分野の教員と一緒に現地に赴き学びます。また、現場の様々な専門的な問題を学び、研究する専門教育科目、あるいは社会人の方々を対象にした野外講座も設けています。



2. 海は最大の遺伝子バンク

2-1. 海の動物

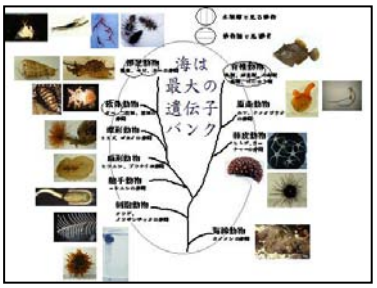
まずは生物に関してご紹介します。私たちは、海に行くと必ず磯に行きます。磯というのは、潮の干満に従って姿を変え、大潮のときには先ほどまで海の底だったところが数時間後には歩けけるようになります。そこで動物を探すことを磯採集といいますが、ほんの 1 時間探しただけで、非常にさまざまな動物が出てきます。皆さんは動物というと、まず四つ足の動物、動物園で見るような動物を思い浮かべるかと思いますが、磯に棲むこうした生き物ももちろん動物であり、じつは地球上の動物の種類の大半はこのような動物たちです。



あるいは、朝 6 時に学生を起こして、岸壁に行ってプランクトンネットを引きます。泊まりがけの授業では簡単に

そういうことができるのがまたいいところなのですが、そこで採取されたものを顕微鏡でちょっとのぞくと、これは何だというものがたくさん出てきます。私たちが見ていてもそういうものがしょっちゅう出てきて困ってしまうのですが、とにかくたくさんの種類の動物が出てくるわけです。

進化ということを考えると、基本的に生物はみんな、37億年前に生命が海に誕生して以来、系統的につながっています。私たちは結果的に陸に住んでいますが、動物園で見ることができる動物、あるいは昆虫等をいれても陸に棲んでいる動物は、動物界全体のうちのごく一部です。たったの１時間で磯採集した動物たちをこの系統樹に入れてみると、殆どすべての分類グループが見つかった事になります。



生命、はじめは一つの細胞ですがもともと海で誕生し育ったのです。海の水の中で細胞が生まれ、海水中の成分のやりとりで細胞は生きているわけです。やがて多くの細胞が集まり海の水を囲って体液、血液としてきました。「海水は天然のリンゲル液」というのはそういう意味で、その証拠に、あらゆる動物の体液、リンゲル液は塩、塩化ナトリウムが主成分であり、それにその他の塩類が入っていますが、それは海水と基本的に同じです。私たちの体液は海水より少し薄いですがそれはたまたま陸に上がったのが少し早かっただけの話で、当時の海の水は薄かった、その歴史が残っているだけです。

大島沿岸には、ウニだけでもいろいろな種類がいます。八丈に行けば八丈の、小笠原に行けば小笠原独特のウニがいるわけですが、ウニというのは、先ほどの進化の系統関係で言うと人間にずっと近い方にいます。あるいは、ホヤという得体の知れない形をしたものは、酒のつまみでお好きな方がいらっしゃると思いますが、実は僕たちにもっと近い仲間です。この動物が卵からどう育っていくのかを見ることは、母親の腹の中で子供がどう育っていくのか見るのと同じで、結局はその繰り返しなのです。

学生たちに、まずは卵を産むところを現場で見せます。そして、それを受精させて顕微鏡で見せたときの感激する姿を見る方が私には印象的なのですが、彼らはそこで非常に大きな印象を受けます。社会人対象の場合は夜になると飲みながら話を弾ませます。生き物としての形はどのようにできてくるのか、翌朝、目をこすりながらまたそれを見ることになります。そうしたことが生命とは何か、そして人間とはどうやってできてくるのか、人間とは何なのかを考えるきっかけになればと思っています。

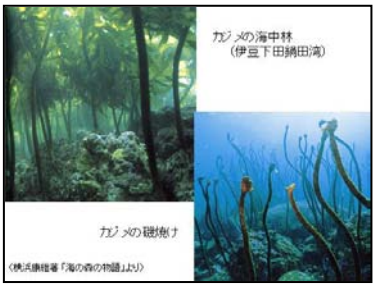
一方、アメフラシはナメクジやカタツムリの仲間です。海に行くと非常に大きいものがいます。実はアメフラシは私の研究材料で、写真はアメフラシの脳です。脳の研究と

いうとネズミやラットでやると確かに面白いかもしれませんが、何せ細かすぎて分からない。でも、海の中にはいろいろな動物がいます。彼らだって生きる上で、環境からいろいろなことを学習し、いろいろなことを記憶していて、それは脳の中に必ず痕跡として残っているはずです。その原理はヒトもアメフラシも基本的に同じで、アメフラシなら神経細胞の一つ一つの回路がどうつながっているのかを追いながら、その仕組みを解明することができます。アメフラシは現在、欧米を中心に脳研究の中心材料でもあります。

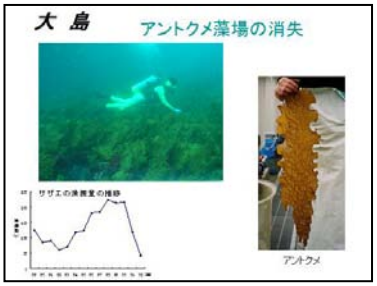
2-2. 海の森

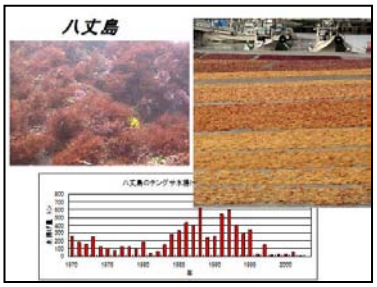
海には、動物だけがすんでいるわけではありません。植物があってそこにすめる。海藻があって、森があって、そこに卵を産んで、すみかにして生きているわけです。それは陸上の草原や森と同じです。

それを海中林と呼びますが、下田の沖、大島のすぐ先にも海の中の森があります。ところが、それが枯れてしまう磯焼けという現象が、ここのところ頻発しています。陸上の砂漠化がよくいわれますが、もっと深刻な海の砂漠化が進行しています。しかし海の中の話となると我々はなかなかそれに気が付かず、アワビやサザエ、魚が獲れなくなって初めて気付くわけです。そういう深刻な問題が、実は日本全国、世界中で起こっています。40%の海を持つ東京がそれをその原因を解明し、予測し、対策を考えることは当然の義務であって、それを教育の場で伝えていくことも重要です。



例えば伊豆大島では、アントクメという大きなコンブ科の海藻が森のようになっていて、潜るとその上を飛ぶ鳥のように泳ぐことができたのですが、そのアントクメの藻場が 2000 年以降消失して、いろいろ深刻な問題が起きています。僕たちはサザエが採れなくなって初めて気付くわけですが、それでは遅いのです。なぜアントクメがなくなるのか、その原因からきちんと調べて、どうしたら戻せるのかを考えることが求められています。





また、八丈島はテングサの一番の産地で漁期になると一面赤や黄色の干場の素晴らしい景色が生まれるところなのですが、残念ながらここのところテングサが全く採れない状態が続いています。それはなぜか。当たり前のことですが、そういうことを調べて明らかにしていく。そして、その知識をみんなが共有することが大切です。

例えば、若い学生たちを授業で連れていき、あらゆる場面で多角的に現実を捉え、体験しつつ話し合い、また大島や八丈の町長に時間を取っていただいていろいろな話をし、

あるいは現場でいろいろなことを教えられ皆で考える。われわれは今、若者たち、社会の方たち、いろいろなつながりを通して有意義な教育ができるよう取り組んでいます。どうもありがとうございました。

演題：奥多摩・伊豆・小笠原諸島の豊かな植物
演者：菅原　敬（首都大学東京　牧野標本館）

今日、私は「奥多摩・伊豆・小笠原諸島の豊かな植物」という大層な題を付けてしまいました。この題を付けたあと、ではどう説明しようかと考えたのですが、先ほど学長が「東京都は非常に多様である。文化的にも多様で、その多様な文化を尊重し、理解することが非常に大切である」とおっしゃっていたので、今日の私の話は皆さんにとっては少し異文化かもしれませんが、その多様な文化を理解していただこうと思います。

東京都は地理的にも南北に非常に長く、環境が多様であることから、そこにはさまざまな植物が生えています。そういう植物の多様性を理解していくことが、われわれの知的な財産、知的な好奇心を満たしていくために、非常に重要なことなのではないかと思います。

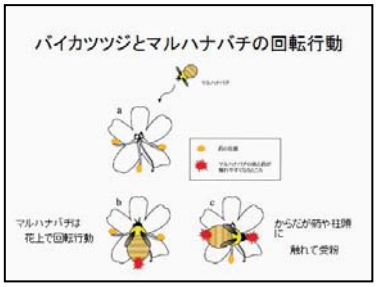
実際、オープンユニバーシティの野外講座に参加してくださって、例えば奥多摩の植物を見ながら、個々の植物が実際にどのような生活をしているか、あるいは他の生物とどのようなかかわりを持ちながら生活しているかというようなことに興味を持って、小さな植物の花を精密に見ている人たちがたくさんいます。そのように、知的好奇心を満たしながら自然を理解していくことも重要ではないかと思います。

今日は幾つかの植物の話を例に出しながら、自然の不思議をある程度理解してもらって、皆さんの知的好奇心を少し満たしてもらえればと思います。

1. バイカツツジとマルハナバチ

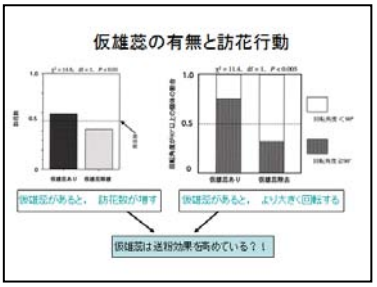
まず最初にツツジです。皆さんはツツジというと、普通の形のツツジを思い浮かべられると思いますが、中にはちょっと変わった、非常に特殊な形をした花もあるのです。雄しべがある部分では退化してなくなってしまっているのだけれども、実はそれがある部分では非常に重要な役割をしているということが少しずつ見えてきます。

この植物は、非常に小さなマルハナバチに送粉を依存して生きています。多くの植物は多かれ少なかれ虫に依存しながら繁殖していくのですが、この小さなハチとの間に非常に巧妙なからくりのあることが、実際に見ていると分かってくるわけです。花に虫が蜜を吸いに来ると、蜜を吸うためにハチがここで回転運動という一種のダンスをします。それによって受粉を助けてくれるのです。



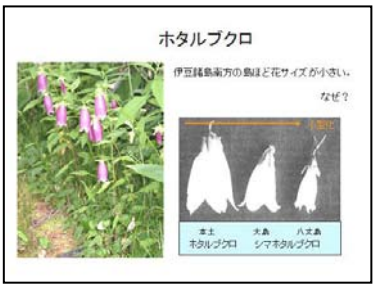
この植物には、退化してしまった雄しべがあると言いましたが、それが仮雄蕊（かゆうずい）といわれるものです。

その仮雄蕊を人為的に取り除いた場合と残した場合とで虫の訪花の回数がどうなるかを調べると、仮雄蕊のあった方が訪花頻度が多く、なおかつ仮雄蕊があることによって、その回転の角度がより増すことが分かります。回転の角度が増すことが、取りも直さず受粉の効率を高めるのに大きくかかわっていることが見えてきます。

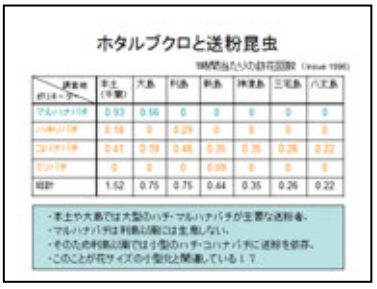


2. ホタルブクロと送粉昆虫

もう一つ、今ちょうど花の時期を迎えている、なじみの深い植物であるホタルブクロがあります。伊豆諸島などに行くと本土と比べて花が非常に小さくて、同じ種の中でシマホタルブクロと名前がつけられていますが、どちらも非常にきれいです。本土産は大きな花を持っていますが、こちらは小さな花です。どうして形やサイズが違ってくるのか。ここにもやはり虫とのかかわりがあることが分かってきています。



大島より南へ行ったことがある方ならご存じかもしれませんが、本土と大島には先ほど述べたマルハナバチという非常に大型のハチが生息していますが、大島以南の島には生息していないのです。その代わりコハナバチという小さなハチが生息していて、ホタルブクロの仲間の送粉者を見ていくと、本土や大島ではマルハナバチが主体として働いているのですが、利島以南ではコハナバチが花粉媒介者になります。つまり、小型のハチが入っていくことで、花自体も適応して小型化するのです。花のサイズの違いはそれによるものではないかと考えられるわけです。

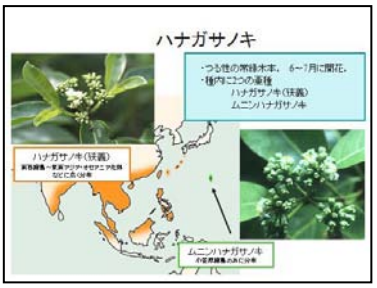


	本土	大島	利島	新島	神津島	三宅島	八丈島
マルハナバチ	0.93	0.56	0	0	0	0	0
ハルゼミバチ	0.18	0	0.24	0	0	0	0
コハナバチ	0.41	0.19	0.46	0.36	0.36	0.26	0.22
ミツバチ	0	0	0	0.09	0	0	0
総計	1.52	0.75	0.75	0.44	0.36	0.26	0.22

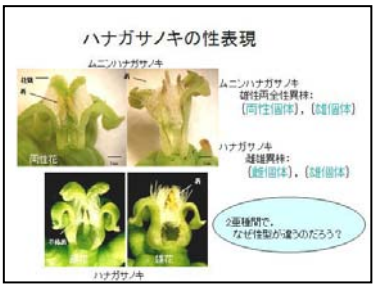
・本土や大島では大型のハチ・マルハナバチが主要な送粉者。
・マルハナバチは利島以南には生息しない。
・そのため利島以南では小型のハチ・コハナバチに送粉を依存。
・このことが花サイズの小型化と関連している！？

3. ハナガサノキの性表現

もう一つ、小笠原の植物で挙げておかなければならないものがあります。実は小笠原というのは、伊豆諸島などとはかなり植物相的に違って、どちらかというと南西諸島の植物と非常に関連性のあるものが多いのです。その一つにハナガサノキがあります。あまり目立たない、小さな花を付ける植物なのですが、非常に面白い特性を持っています。



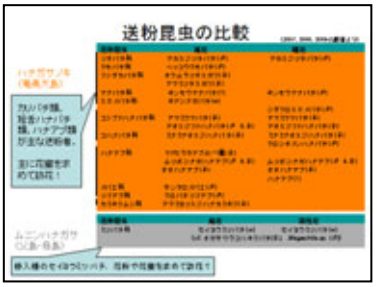
それはこの植物の性の在り方、性表現という言い方をしますが、そこに違いがあるのです。どう違うかというと、小笠原諸島に生えているムニンハナガサノキの花を見ると、雌しべと雄しべがあります。実はこれは両性の花なのです。ところが、ほかのものを見ると、雄しべはあるけれども雌しべがありません。これは完全に雄花です。すなわち、小笠原に生えているムニンハナガサノキは、両性の花を付ける両性の個体と、オスになってしまった雄個体の二つがセットになって、一つのムニンハナガサノキという種を維持しているのです。このような性の在り方は、普通、進化的には維持されにくいということで、植物では非常に珍しいのです。



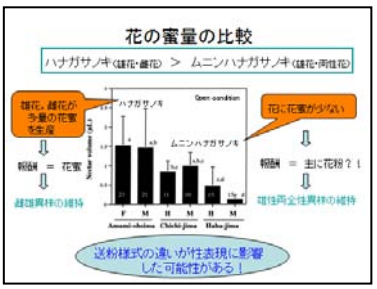
一方、南西諸島に生えているハナガサノキを見ると、こちらは完全に雄花と雌花というように雌雄異株化しています。雌雄異株の植物があるというのは普通なのです。そうすると、小笠原の方ではどうしてこのように両性花と雄花があって、一方の南西諸島には雌花と雄花があるのだろうという一つの疑問が出てくるわけですが、その背景にも、それぞれの島に生息する虫とのかかわりがあるのではないかと考えられます。

小笠原と南西諸島の植物は、系統的にも非常に近いことが、実際に探っていくと明らかになります。ですから、系統的に近い二つの植物の中で性が分かれてくる背景には、花粉媒介者としての虫の生態とのかかわりが潜んでいるのではないかと思われるわけです。

実際に二つの植物を比較してみると、南西諸島ではとにかくいろいろな種類のハチが来ているのですが、主に短舌のハナバチ、あるいはカリバチ、ハナアブが主要な送粉者になっています。一方、小笠原ではどうかと見ていくと、悲しいことなのですがセイヨウミツバチしかいないのです。セイヨウミツバチというのは人間が入れたもので、本来は在来のハチがいたはずなのですが、今のところどういうわけかセイヨウミツバチしかいなくて、わずかに隔離された無人島のようなところでハキリバチのようなものが見られるのみです。



花が生産する蜜量を比べると、小笠原に生えているムニンハナガサノキの仲間は蜜量が少なく、一方の南西諸島のハナガサノキは蜜量が非常に多いのです。ということは、南西諸島では雌雄異株化していて、雌花には花粉がありません。花粉を求めてくる虫がいないとすれば、その花粉の代わりをするのは蜜になってしまいます。ですから、南西諸島では蜜を虫に報酬として与える。雌雄異株化したとしても、うまく雄花と雌花のそれぞれにたくさんの蜜を残していれば虫が来てくれます。



ところが、小笠原諸島では蜜が非常に少ない。その代わりに報酬として使われるのが花粉なのです。ですから、花粉をどうしても残しておく必要がある。だから両性の花とオス化した花がそれぞれ花粉を生産する。そのような形でうまく、ちょっと変わった性の在り方が維持されているのではないかということが見えてくるわけです。

それぞれの島には独特の植物が生えていますが、それぞれの植物が置かれた環境の中で、それぞれがうまく適応しながら、植物という非常に小さな世界が維持されている、出来上がっているという側面が見えてきます。簡単ですが、今日はここまでにしたいと思います。

演題：「八丈学」のすすめ　−学びの場としての八丈島 −
演者：伊藤　宏（八丈島歴史民俗資料館）

■黒潮に浮かぶ火山の島　「……喧噪を極める東京から南に３００km、本州沖を東流する黒潮の湯気のなかに浮かんで八丈島がある。人口約１万人、四季緑と花を絶やさぬ平和な島である。」（團伊玖磨『八丈多与里』冒頭から）。八丈島で作曲・執筆活動を行った團さんが書いたように、梅雨の八丈島は、低く垂れこめた雲に覆われ、まさに「黒潮の湯気のなか」にあります。毎日３往復するジェット機も欠航が多いく、新聞が２・３日分まとまって届くこともたびたびです。

八丈島は、北緯３３°０５’東経１３９°５０’にある火山島です。年平均気温は１８．３℃で、東京（１５．９℃）より２．４℃高く、最も寒い２月の平均気温が１０．３℃で、１月の東京（５．８℃）と比べると、４。５℃高くなっています。年間降雨量は３，１２９．６㎜（東京１，４６６．７㎜）ですから、冬暖かく雨が多いところといえます。風が強く、快晴日が少ないことも付け加えておきます。

八丈島は、形が似ているところから「ひょうたん」にたとえられ、井上ひさしさんの「ひょっこりひょうたん島」のモデルとも言われます。南北軸に対して東側にある三原山は海抜７００m、１０数万年前に誕生した比較的古い火山で、火山灰の上に茂った照葉樹林が島の水源になっています。５つの集落は、この水を頼って営まれてきました。

もう一方は、１万年前に誕生した八丈富士で海抜８５４m。海上にそびえる秀麗な姿は、古くから信仰の対象になってきました。最も新しい噴火の記録は、江戸時代初期１６０５年です。

■縄文人の活動と始祖伝説　１９６２年までは、「黒潮の向こうに先史時代はない」とされてきましたが、偶然発見された厚手無紋土器や磨製石器は、７千年前には人が渡ってきたことを証明しました。５千年前に来た人々は、北陸地方で作られた精巧な石のアクセサリーを遺しています。相当数持ち込まれた縄文土器の生産地は、関西から北陸、東北南部に及び、その交流の広さは何を意味するのか…、研究者の関心を集めています。

無人の火山島に人が住むようになった経緯を語る「始祖伝説」が３つあります。大津波で全滅した島にたった一人残されたタナをグレート・マザーとする「タナ婆伝説」、秦の始皇帝のために不老不死の妙薬を求めて、徐福と一緒に熊野にやってきた若者たちが徐福の死後漂流して、女性だけが住むことになったという「女護ヶ島伝説」、そして男女同居を説いた保元の乱の英雄「為朝伝説」です。いずれも八丈島の人と文化のルーツを考える上で、貴重な資料になっています。

■海のシルクロード　八丈島の歴史時代は、室町中期に始まります。上質の絹を織り出す島があるという情報を入手した神奈川の奥山氏、三浦氏、小田原の北條氏が、島の支配権をめぐって争いました。以来、江戸時代から明治４２年まで、八丈島が負担する税は絹織物でした。生活必需品を購入するために織られたものを含め、相当な量の絹織物が江戸に運ばれたはずで、その意味では、八丈島と江戸を結ぶ航路は、まさに「海のシルクロード」でした。

航海に海難事故はつきものです。多くの命が海の藻屑と消えましたが、幸運にもフィリピンや中国に漂着し、異文化体験を経て島に戻ってきた人たちがいます。江戸と上方を往来する商船が、時化にあって漂着する例も少なくありませんでした。八丈島で助かり、迎えの船を待つ間の数ヶ月に、島の人びとに与えた影響は、決して無視できないでしょう。

■流刑地から近世社会を見る　八丈島の歴史を特徴づけるのは、流刑地としての過去です。関ヶ原の敗将宇喜多秀家から明治４年まで、２６５年間に１９００人近い人びとが、何らかの罪を問われて八丈島に送られて来ました。流罪は、死刑に次ぐ重罪でしたが、島に着くと「当人渡世勝手次第（本人の能力で自由に生きよ）」でしたから、産業・教育・医療など文化全般にわたって及ぼした影響は計り知れません。例えば、八丈島の地酒になっている焼酎は、幕末の流人丹宗庄右衛門が伝えたものですが、彼は薩摩藩のために密貿易品を江戸に運んだところで「御用」になりました。

流人史をひもとくと、封建社会の掟により不条理な人生を送ることになった人間がいか

に多いかを知ることになります。兵庫県の但馬地方で、今なお「義民」として慕われている「松岡新右衛門」の場合も、村の窮状を救おうと吉宗将軍の「目安箱」に投書した責任を問われ、３７年を島で過ごし、赦免の知らせを聞くことなく世を去ったのです。流人史をたどることで、近世の都市や農村社会を知るという方法は、もっと採用されてよいと思います。文芸の世界で作られた流人全体に対する負のイメージは、まだ完全に払拭されていないからです。

東日本全体を戦渦に巻き込んだ戊辰戦争があった慶応４年、八丈島では、鹿島宮司・鹿島則文の提唱で「八丈詩会」が開かれていました。島の有力者、流人の僧侶・武士・町人などが集い、「八丈八景」をテーマに詠んだ漢詩・短歌・発句を、近藤富蔵が『八丈実記』に記録しています。

■近代化への歩み　徳川幕府が倒れると、八丈島は、韮山県から足柄県、静岡県と所属を換え、明治１１年になって東京府に移管されました。この間、明治２年から３年にかけて、明治政府の役人や、淡路島稲田家の独立問題をめぐる事件に連座した旧徳島藩士が寺子屋を始めました。明治９年には静岡県から今井信郎という役人が出張してきて、旧弊の打破、産業振興を提言し、教育制度の整備に力を尽くしました。大賀郷小学校の沿革史は、初代校長に今井の名を載せています。今井信郎と言えば、幕臣時代に京都見廻組の一員として、近江屋に坂本龍馬を襲った人物の一人です。

サツマイモの普及とともに人口が増え始めた島では、「出百姓」といって、現在の茨城県方面へ開拓に出る人たちが現れました。 明治になると、国の後押しもあり、小笠原や鳥島に進出、南大東島の開拓にも出て行きました。

第一次世界大戦以後、南洋諸島が日本の委任統治領になると、グアム・サイパン・テニアン・ロタ島などにたくさんの人びとが出て行き、中には太平洋戦争末期の悲劇に会った人たちもいました。

■本土防衛の拠点として　太平洋戦争中の八丈島は、本土防衛の最後の拠点として、全島の要塞化が進められました。子どもや女性など、戦争遂行の足手まといになると考えられた人たちは、積極的に疎開が進められました。島に残った働き手の男性は「特別警備隊」に編成され、訓練の合間には農作業や漁労など食糧の確保が大きな任務でした。

空港・防衛道路・司令部壕などの軍事施設は、軍の工兵隊と軍の仕事を請け負った業者とで進められました。朝鮮人労働と特攻機出撃の記憶を留める八丈島空港は、現在では島と羽田を４５分で結ぶ空の玄関です。海軍が特攻作戦に使った人間魚隊「回天」とベニヤ板製モーターボート「震洋」の基地壕や、「鉄壁山」と呼ばれた司令部壕などは、終戦から６５年を経た現在でもなお、訪れる人びとに平和の重みを語りかけてきます。

■エコ・ミュージアムとして　八丈島には、黒潮に隔てられた離島ゆえの「個性」がたくさんあります。これまでは、おもに歴史分野について述べましたが、温暖な環境を活かした産業の中でも、伝統産業は島の歴史文化を受け継いでいます。経済を支えた「黄八丈」は、今も伝統工芸として数１０人が関わっています。焼酎の蔵元も５軒が味を競い合っています。「くさい」と敬遠されがちなくさやも、香りとうまみの関係の科学的な解明が待たれています。農業と漁業を基盤に、観光業で立っていこうとする八丈島には、産業経済の視点からも多くのテーマを見出すことができるはずです。現に、東京都農林水産総合技術センターが、園芸と水産の研究拠点になっています。八丈島全体をひとつのエコ・ミュージアムと想定すると、「八丈学」の豊かな可能性が見えてくるように思われます。

■現在の課題と向き合う　３６年前には４５０人近くいた高校生が、いまは２２０人程度（全・定）です。４校あった中学校は３校に、５校あった小学校は４校になりました。冒頭で引いた團伊玖磨さんの文章では「人口約１万人」とありましたが、近ごろでは、毎年１００人のペースで人口減少が進んでいて、現在は８千３百人ほどになりました。豊かな自然に恵まれた八丈島でも、最大の課題は「少子・高齢化」です。こうした社会環境も、教育研究の重要な課題であることを、すでに一昨年首都大学の社会人類学教室の方々が示してくださいました。また、健康福祉学部では、町立病院や老人福祉施設と連携した活動を計画しているとうかがっています。

こうして進められる教育研究活動の成果が、いつの日か地域に還元され、地域を元気づける新たなエネルギーとなってゆくことを切に願っています。

演題：島ことばと文化
演者：ダニエル･ロング（日本語教育学）

はじめに

首都大学東京の都市教養プログラムの一環として行なっている伊豆・小笠原諸島野外集中講義で「自然と社会と文化」をテーマに言語学の実習を行なっています。

現地調査（フィールド・ワーク）

野外講座における言語学フィールドワーク（現地調査）に参加する学生には次の教育効果が期待されます。(1)島の人と協力関係を築く。(2)島ことばの採集方法を学ぶ。(3)聞き取り調査を通じて、自分と違う世代の人、自分と違う生活環境の人との接し方を磨き上げる。(4)地域社会の年配者から貴重な体験談が聞けます。

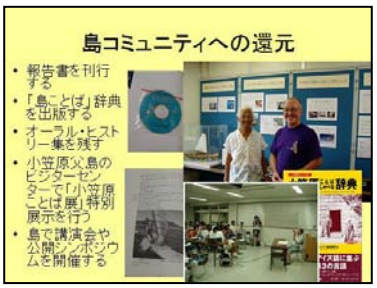
言語科学の理論を学ぶ

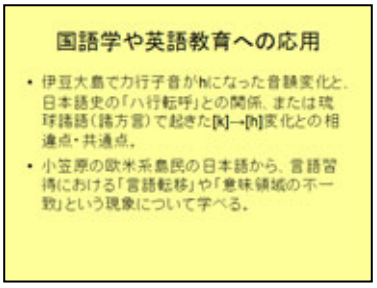
東京の島嶼で行なわれる実践的言語学を通じて、専門外の学部生が次のような言語学理論の概念を理解するようになります。

例えば、伊豆大島にカ行子音が[h]に変わった現象が見られます。菊がキフ、中柱がナハバシラ、軒下がヌヒバになるなどの変化が見られます。一方「掛硯」という箪笥の一種がカヘスズリになるのであり、ハヘスズリにはなりません。[k]が[h]に変わるという変化は語中のみで起きるものであり、伊豆大島では語頭で起こりません。なぜならば日本語の場合、語頭に[h]が来る単語が多く、語頭の[k]が[h]に変わると、同音衝突が起こりコミュニケーションに混乱が生じるからです。例えば、釜がハマになったら「あの街は釜（浜？）で有名」の意味が誤解されます。同じように、影・剥げ、聞いて・引いて、書いた・吐いた、居る数・居る筈など同音衝突することに混乱する日本語は数え切れないほどあります。一方、日本の和語の語中に[h]が来る単語は少ないです。昔、川（かは）、鯛（たひ）、会（ふ）う、会（は）わない、顔（かほ）、数（へ）えるといった単語は日本語にたくさんがあったが、ハ行転呼音という大規模な音変化が日本語に起こりました。その結果、現在の日本語の和語の真ん中に[h]が来ること自体が少ないので、語中で[k]が[h]に変わってもあまり影響（同音衝突）がありません。一方、語頭で同じ音変化が起きれば、日本語で上で述べたような大混乱が置きかねません。伊豆大島で語中の[k]→[h]の変化が起きたときに、同音衝突の危険性が歯止めとなり、その変化が語頭まで広がらなかったというわけです。

ちなみに、学生に「軟口蓋破裂音の声門摩擦音化」と言えば、「単に難しい専門用語が並んでいるだけだ」という印象を与えるでしょうが、実際に起きた[k]→[h]の変化を調音音声学で説明するこうなる、と教えれば用語はリアリティを持つでしょう。同じように、「音韻変化」と「音声変化」といった専門用語の使い分けも習えます。

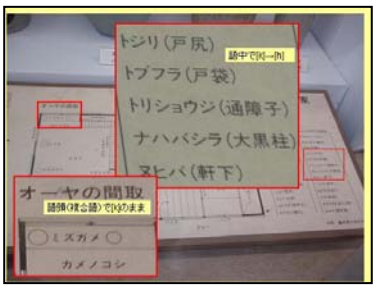
または、「言語転移」や「言語干渉」といった言語習得と関係する用語（現象）を教科書で勉強するのではなく、小笠原諸島の欧米系島民が日本語を聞いて理解できるようになります。欧米系が使っている別れの挨拶「またみるよ」（つまり「また会おうね」という意味）の背景には、英語の挨拶see you againの存在があります。彼らが日本語を習得したさいに、「アウ」という言語形式を獲得したが、その意味領域は英語から転移されたのです。彼らが言う「薬を飲む」や「シャワーを取る」も英語の干渉による特徴です。言語習得論で言う「言語転移」と「言語干渉」に当たる現象ですが、対照言語学という分野から見れば＜日本語の「見る・会う」と英語の「see・meet」との間に「意味領域の不一致」が見られる＞という見方ができます。





島コミュニティへの還元

地元の人から島の言語について色々と聞かせてもらった恩返しに、(a)「島ことば」辞典を出版することや、(b)オーラル・ヒストリー集を残すこと、(c)学生のレポートを集めて報告書として刊行すること、(d)島の公民館のような公的施設で特別展示を企画すること、(e)島で講演会や公開シンポジウムを開催する、などの活動ができます。



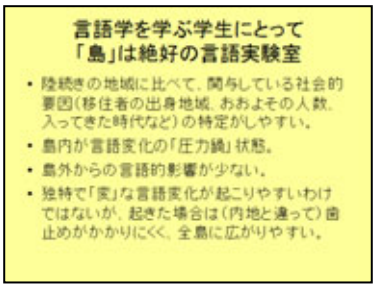
国語学や英語教育への応用

野外講座で学ぶことはけっして「学問のための学問」ではありません。国語の先生を目指している学生にとっては国語史を考える絶好の材料です。それは例えば、上で述べた伊豆大島に見られる音変化と日本語史の大きなできごとであった「ハ行転呼」との関係を考えるときです。あるは、琉球諸語（諸方言）で起きた似たような変化との相違点と共通点を考える材料となります。

また以上で述べた言語習得の知識は英語教員になる場合にも、外国人の日本語の先生を目指す場合にも役立つ。

「島」は絶好の言語実験室

言語学を学ぶ学生にとって東京都の島々は絶好の言語実験室です。次の理由が挙げられます。(a)陸続きの地域と違って、関与している社会的要因（移住者など）の特定がしやすい。(b)島内が言語変化の「圧力鍋」状態になっています。内地で一世紀かかる言語変化は島で数世代の間に起きることがあります。(c)島外からの言語的影響が少ないく、関わっている要因を特定しやすいと思われます。(d)島嶼社会では、独特で「変」な言語変化が起こりやすいわけではないが、起きた場合は（内地と違って）歯止めがかかりにくく、全島に広がりやすい。



演題：奥多摩・日本酒の魅力 その伝統と文化
演者：小澤　順一郎（小澤酒造株式会社）

私は青梅で澤乃井という酒を造っています。東京で酒なんか造っているのかと言われることもよくありますが、実は東京には9軒ほど造り酒屋があるので、うちとは限らず、見つけたら飲んでいただけると大変ありがたいと思います。

さて、どうすれば皆さんにお酒を飲んでいただけるのか、私なりに考えました。今、われわれは酒を飲みながら21世紀を生きるに至ったので､その辺の皆さんのDNAをもう一回刺激させていただこうと思って、今日は考えてきました。皆さんにお渡しした「参考」をご覧になりながら聞いていただければと思います。

1.日本人の神観

日本人が混血の民であることはもうお分かりだと思いますが、大変大きい勢力として南方系、北方系があります。中国の揚子江下流の越族という部族が今の越前クラゲの海流に乗って、日本の越前・越中・越後に流れ着いたのが南方系です。日本のお米（ジャポニカ米）のDNAは揚子江下流で取れる米のDNAと一致するそうなので、稲作はあの辺りから来たと思われます。

海を渡ってくると、最初に見えてくるのが山の頂です。それに向かって船を進めてくると陸地へ到達します。山の上に神様がいて、われわれをお導きくださったと考える、これが山岳信仰の起こりです。山の上に神様が住んで、ふもとに人間が住むということです。

ここで外国の神様を思い浮かべると、外国の神様は基本的に人間を超越した存在として生まれ、人間と同じ顔をしていて、人間と同じ名前を持っています。でも、日本人は本当に罰当たりな国民で、神様の名前を言えません。顔も姿もイメージできません。でも、それがおかしいかというと、おかしくないのです。日本の神様というのは人間を超越した存在ではなくて、自然をつかさどるものとしてわれわれはイメージしてきたからです。山の上におられるのは人間を超えた神様ではなく自然界をつかさどる方で、それを神様と認識したわけで､名前を知らなくても､姿かたちがイメージできなくても当然のことなのです。

2.神社の起こり

基本的に法律が不備だった昔、外国では社会が混乱しないように、秩序を維持するために神というものをつくって、神の教えに沿って生きることで社会が安定しました。それに対して日本の神様は、今で言い換えると市役所のようなものです。つまり、基本的に神事という神様にかかわる行事があり､冠婚葬祭が一般的ですが､その中の婚儀を例に取ると、今われわれは結婚をするときには役所へ行って婚姻届を出すと結婚が成立します。それを出した途端にほかの女の人と付き合うと浮気になって、裁判をすると負けますが、その前であれば別に問題にはならないわけです。つまり、婚姻をどこかで既成事実にしなければいけないのですが、昔は役所がないので、神前へ行って「私はこの人と結婚することにします」と誓うと神様が「分かった」とおっしゃって、それによって婚姻が成立しました。

これは非常に重要なことで必要だったわけですが、山の上に神様をつくってしまったので誠に具合が悪かったのです。神事のたびにいちいちそこまで行かなければなりません。そこで､日本人はなかなか調子がよくて､部落､つまり自分の家のそばに神社を建てます。この神社には神様は住んでおられませんが、神様を呼ぶことができます。つまり、神事ができるホールのようなものを造ったわけで、それが神社です。

そして神主は呪文を唱える係で､「神様、神様、どうぞ来てください。これから神事をし

ますのでお願いします」と言うと、神様が降りてきます。皆さんも機会がおありだと思いますが、神事では最初に「降神の儀」という、神様が降りてくる儀式をします。それによって神様が降りてきて、その神様の前で結婚して、終わったので帰ってくださいと言うと神様はお帰りになる。このようなシステムが完成して、われわれはホテルの地下で結婚式ができるようになったわけで、そうでないと神様がおられないホテルの地下で結婚式ができるはずがありません。これをデリバリー神様といいます。このシステムは大変便利なので、どんどん盛んになりました。

3. 直来（なおらい）と宴会

神様をお呼びするときに必要なのが、お酒とごちそうでした。祭壇の上にお酒とごちそうを置いて、神主が呪文を唱えると神様が来てくださいます。神様がお帰りになった後、つまり儀式終了後にそこにいる関係者でお酒とごちそうを飲み食いすることを「直来」といいます。神様をお呼びするためのお酒なので、神事以外に飲むことは基本的に許されませんが、神事のときはいくら飲んでもいいのです。

今われわれがそのDNAを受け継いで、大勢で飲むときは「もっと飲めよ」と、これ以上飲むかというほど飲ませます。神代の昔からそういうことをしていたのです。晴れの日には飲めるけれど普段は飲めないので、そのときばかりはいくら飲んでもいい、吐くまで飲んでしまうということをいまだにしています。それを宴会といいます。これは神事以外でも直来をやってしまう非常に罰当たりな行事ですが、やっていただかないとうちの商売は成り立たないので、ぜひお願いします。

それによって日本酒は非常にたくさん造られるようになり、いろいろな人がいろいろな形で飲むようになって、社会に広がっていきました。しかしながら、今言ったのは神様とのかかわりがあるお酒です。

4. 平安時代の公家の楽しむ酒

もう一つ、神様とは別にお酒を飲んでもいいことがあります。平安時代にはお公家さまが自分の楽しみのためにお酒を飲み始めています。公家は当時の特権階級で、大変なぜいたくをしていました。今われわれは料理人が作る料理を食べていますが、昔、専門の料理人は考えられない時代に、お公家さんは専門の料理人を雇って作らせて、それを食べていました。その和食の専門料理人が作った日本の味の文化が出汁（だし）です。これは非常に微妙なものです。あれを口の中に残した状態でお酒を飲んで「おいしいな、口の中がひれ酒のようだ」というのが日本酒の一つのおいしい飲み方なのですが、当時は体温より少し高いぬる燗で飲みました。脳に熱い・冷たいという温度の信号が行かないような温度です。

そのときに使われたのが「平ちょこ」といい、最近はあまり見ませんが、薄っぺらなおちょこです。なぜあのような小さいおちょこで飲むのか、「もっと大きいので飲めばいいのに、非合理的だな」とお思いになるでしょうが、あれはぬる燗で口中1杯分の酒を飲むためです。大きくすると温度が変わってしまうので、小さいおちょこで1回で飲んだのです。この欠点は、自分で酌をしていると右手が非常に疲れて、やりすぎると腱鞘炎になってしまうことで、横にお姉さんを一人置いて、そのお姉さんが注いでくれるものを飲んでまた出して、注いでくれたのを飲んでということをしたわけです。つまり、平安時代のお公家さんの酒の楽しみ方というのは、料理人が作った料理と、ぬる燗の酒と平ちょことお姉さんだったわけです。

これも今われわれは時々やることができます。嫁さんの機嫌が悪くなるのですが、これ

は非常に連綿と続いてきた日本の伝統の飲酒文化なので、奥さんなど気にせず、皆さんもやっていただいたらいいと思います。

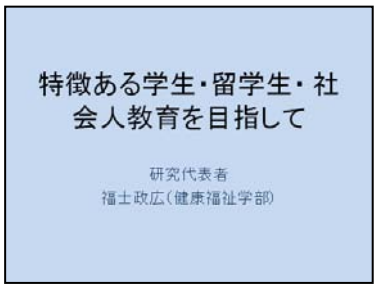
5. 江戸の庶民はお酒好き

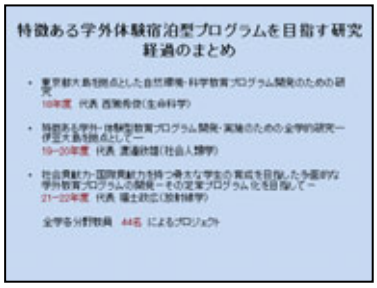
最後は江戸時代の話をします。江戸時代になると徳川家康が米づくりを推奨して、余った米で酒を盛んに造らせて、一般庶民が酒をいくらでも飲める時代になります。

当時の江戸は今の東京とは比較にならない、本当に小さい下町の浅草や神田の辺りだけでしたが、そこに何と 100 万人住んでいたという人口密集地でした。100 万人というのは、女、子供、じいさん、ばあさん全部入れてですが、当時の文献から拾ってきた江戸時代の酒の消費量を見ると、この人たちが 1 日 1 合ずつ飲んだという計算になります。信じられないと思いますが、事実です。でも、今われわれが造っている酒は 15 度ぐらいですが、恐らく当時は 7～8 度ぐらいのものを飲んでいただろうということで、半分計算でいいと思います。女性やお子さんが全く飲まなかっただろうと考えると、一人 1 合ずつ毎日飲んでいたということは、大の大人は 1 日 4～5 合平気で飲み続けていたことが想像され、江戸は大変な酔っ払い都市だったのかと思います。もう一度そういう時代が、あるいはそういう東京が来てくれないものかと祈っています。皆さんにもご協力いただけたら大変ありがたいです。お話の機会を頂きまして、ありがとうございました。

演題：特徴ある学生・留学生・社会人教育を目指して
講師：福士政広（首都大学東京健康福祉学部）

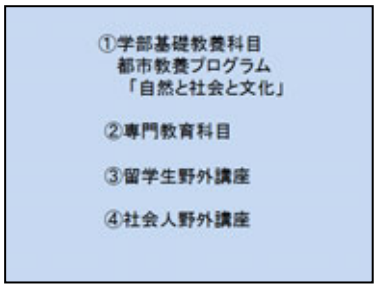
本日はお暑い中、このように沢山の皆様にお集まり頂き、プロジェクト代表者として心よりよりお礼申し上げます。お話を頂くために遠くは海を越えた八丈島、伊豆大島から、また西の奥多摩から来て頂きました本プロジェクト推進のために日頃からお力添えを頂いている皆様方、教育長、ご多忙のところをお時間を作って来て頂いた都議会議員の先生方、学長、理事長はじめ、教職員、学生の方々、このようにご参加頂き大変ありがたく思います。

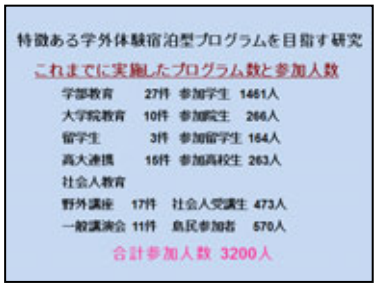




プロジェクトの概要

平成 18 年度からスタートしたこのプロジェクトですが、生命科学の西駕先生以来、社会人類の渡辺先生、私と代表者３代、５年に渡って続けられている全学的プロジェクトで、現在全学から 44 名の教員が関わっています。すでにこれまでのお話で紹介されましたが、東京の魅力的なフィールドを使って、大きく分けてこの４つのプログラムを実施してきました。それは①基礎教養科目「自然と社会と文化」②健康福祉や自然・社会科学など新規の学外専門教育科目③留学生野外講座④社会人野外講座の開発と確立が主な活動です。これらの講座を含め、プロジェクト発足以来の 4 年半で、学部、大学院生、留学生対象の科目のプログラムは計 40 回開講され、合計延べ 1900 余名が受講し、また社会人科目は 17 回で約 500 近くが受講され、合計で 83 プログラム　参加人数はのべ 3200 名にのぼります。





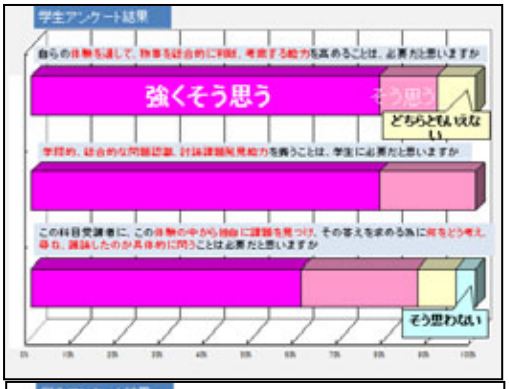
これらのプログラムを伊豆大島や八丈島、小笠原、青梅・奥多摩などで実施するに当たっては、地域の各界の方々のご理解とご協力の下での強固な連携関係が必須である事は言に及びません。ここではプログラムの概要と参加者、実施担当者による評価アンケート結果をご報告しながら、「学外体験型教育」の真価と意義、定常化の重要性について述べたいと思います。

「自然と社会と文化」

先ず　基礎教養科目、首都大では「都市教養プログラム」といいますが、その中に「自然と社会と文化」を 2 年前に開講しました。学生たちは、大学のキャンパスを離れ、現場で実物を見ながら、また常に質問し、討論しながら学びます。伊豆大島では、今日は増木教育長にお越し頂いますが、必ず町役場をたずねて、町長に話を伺いながら討論する時間を頂いています。今日来て頂いている白井さん、中

林さんにも様々な現場をご案内頂くなど朝から晩まで大変なご協力をいただいています。

この科目をこれまで担当してきた 20 名近くの教員からこの科目に対する評価アンケートをとりましたが、全員が「自然と社会と文化」が目的としている「実体験から判断、考察する能力」「総合的な課題発見能力」「質問し、討論する力」をつけさせることは、「大学教育にとって必要だ」と「強く思う」「思う」と答え、この「自然と社会と文化」のような「学外体験宿泊」スタイルの教育でそれらは可能となると答えています。ちなみに、アンケートの回答は「強くおもう」「思う」から「どちらともいえない」「思わない」「強く思わない」の五者択一で、否定的な「どちらともいえない」以下の答えは全くありませんでした。



一方参加した学生たちも、同じ質問に対して同様に、ほとんどの学生が、これらの目的をもったこの「自然と社会と文化」が自分たちにとって「必要である」と答えました。

さらに実際に参加した結果、学生達の過半数が、目的とする到達点に達したことを自分自身で実感し、ほとんどすべての学生達が「自然と社会と文化」を受講して「満足し」、「後輩に勧めたいと感じ」さらに「今後も科目が継続、発展する必要性」があると答えました。

参加した学生たちに「自分か変わったと感じたところ」を尋ねたところ、ここにあるように

・学部を超えた学生とそれぞれの見地からの意見を交わせて、多様な考え方で見るよう心がけるようになった。

・実際に大学の授業活動に取り組んでいくきっかけになり、その他の活動も含めて積極的に取り組むようになりました。

・実際に授業で話を聞くだけでなく自分で足を運び行動することを実感した。例えば民法を学んだときには、裁判所へ傍聴に行って現場を見るようにした。など、沢山の回答が寄せられました。

専門教育科目

専門教育では、これまでも地学や生物学、考古学などで学外体験型実習科目は学外で実施されていますが、新たに社会人類学野外演習や、言語学調査演習などが開講されました。また、わたしの健康福祉学部でも島嶼地域の特別養護老人ホームや保健所などと連携した地域の現場体験的プログラムを進めています。研究室のゼミを宿泊型で始めたり、異分野を交流型で実施したりというのも非常に面白い取組みです。

留学生・交流型科目

留学生、本学には 200 人以上いますが、彼ら自身に日本を知って理解してもらう、あるいは日本人学生との交流型のプログラムを実施しています。これは御岳山の宿坊で「国際大討論会」をしているところです。あるいはこれは伊豆大島で開講したときですが、留学生らは日本人学生とともに東京の一側面を学び、地域の特産物を肴に、理事長、町長、地元の方、漁師なども交えてみんなで討論し、日本の理解と交流を深めました。

社会人野外講座

さて社会人対象の「野外講座」は伊藤先生の八丈島、小澤社長の青梅御岳山講座、小笠原、そして伊豆大島などで 17 回開講し、今秋は神津島で開講予定です。パネラーとして第 2 部に登場していただく伊豆大島の白井先生や中林先生など、地元を愛する講師の先生方と、知的好奇心に満ちあふれた受講生のおかげで、毎回大変に好評で、受講生アンケートの満足度の平均点は 94 点をいただいています。

概略ではありますが、このプロジェクトが進めてきたことをご紹介しました。
第二部では、今後の展開のあり方を含め、皆様の貴重なるご意見を賜りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

第一部の最後ではございますが、休憩の前に、中島先生よりお言葉をいただきました。

中島義雄（東京都議会議員、都議会公明党幹事長、都立大学 23 期経済学部出身）

はじめて参加をさせていただきまして、驚きました。今日は、自民党の宇田川さん、三宅さん、東村さんで参加をさせていただきました。本日は所用のため途中で失礼いたしますが、是非ですね、この活動を、続けていただきたいと思います。私は、八雲のころの都立大学出身でございまして、当時の公立の大学は、東京では、東大と教育大学とお茶の水大学と、理事長の出身校の一橋。そのなかで総合大学というのが東大と都立大学だったのです。だけども「小東大」になってしまったら、都立大学は、意味がない。首都東京が保有する大学の特色をきちんと現そうということをよく議論したことをよく覚えておりますし、今、私は都議会議員ですので、法人化になりましても、基本的な予算というのは東京都がにぎっておりますので、その東京都に対して予算を出せと、強烈に言えるのは議会でありますので、ぜひ都議会ともっと接点を多くしていただいて、自治体、とりわけ日本の首都東京が保有する大学として、他ではできない成果をぜひあげていただきたいと思いますし、大学出身者の一員として、ぜひ応援をさせていただきたいと思っております。

島嶼部に関しては、本日はじめの原島学長の話は聞けなかったのですが、ずっと今話を聞いておりました。どこかで出ていましたけれども、小笠原まで約１０００キロ。東京都が所管する海域は、日本海よりも広い。文字通り東京は世界有数の海洋都市であることは間違いないのです。しかし、例えば都市の活力の発揮ですとか、新しい街づくりとか、都市の発展というなかで、海洋都市東京の視点が結構抜けていたのですね。いろいろ話しても、ではいったいどうするんだと逆に問われると答えに窮し困ったのですが、例えば、かつて産業労働局の農水部長、本学出身の農水部長がいたのですが、彼と連携をとりまして、小笠原の父島でアカハタの本当に小さな稚魚を養殖しまして、それを三宅島の海に放流して、大きくなったらそれを収穫して、素晴らしい高級魚、旬の魚をインターネットで契約すると夕方には食卓に届く、というような事業もやったことがあるんですね。ですから、１０００キロに及ぶ広大な海域を利用した漁業、島嶼の農業、観光さまざまなことを思慮して、海洋都市東京として世界に類のない、そういう東京の側面をぜひこれから開拓してみたいと議会でも考えております。そこで是非このようなシンポジウムを活用して、首都大学東京の底力を都政のなかでもぜひ発揮していただきたいことをお願い致しまして、ひとことのご挨拶とさせていただきます。本日は参加させていただき、誠にありがとうございました。

第 2 部　パネルディスカッション
社会貢献力・国際貢献力を持つ骨太な若者を育てるために
—地域と首都大学東京との連携—

進行

可知　直毅（首都大学東京大学院理工学研究科植物生態学研究室教授）

パネラー

菅又　昌実（オープンユニバーシティ／首都大学東京大学院人間健康科学研究科教授）
白井　嘉則（前大島町議会議長）
中林　利郎（大島高校教諭）
増木　米孝（大島町教育委員会教育長）
金川　育男（八丈町教育委員会教育長）
三宅　正彦（東京都議会議員）
中島　義雄（東京都議会議員）
宇田川　聡史（東京都議会議員）
東村くにひろ（東京都議会議員）
高橋　　宏（首都大学東京理事長）

（可知）　首都大学東京の小笠原研究員長をしている可知です。パネルディスカッションの司会を務めさせていただきます。パネラーとして前に並んでいただいていますが、これから 1 時間ほど議論していきます。プログラムにパネラーのお名前が並んでいる中で、若者教育に大変熱心な都議会議員の伊藤興一さんが別の急な用事が入り、残念ですが急きょご欠席になりました。残りの皆さんは全員おそろいです。

パネルディスカッションでは、最初に 3 名の方に指名討論者としてお話しいただいて、その後、パネラーの皆さんに発言していただきます。その 3 名の方の最初が、本学の人間健康科学研究科教授の菅又先生です。指名討論の最初の発言者です。どうぞよろしくお願いします。

1. 指名討論

1-1. 有為な若者育成のための本学の役割

（菅又）　私からは、集約して 1 点だけお話しさせていただきます。私たちの学外教育は、元気で社会貢献・国際貢献を持続的にやれる人間を育てるにはどうしたらいいかということで活動しています。

今、世界には国が 200 弱ありますが、日本は世界で一番平和な国と言っていいと思います。まず一つは、戦争をしません。兵役もありません。私は専門として人口学にもかかわっていますが、アメリカには今、3 億 1000 万人います。つまり、日本の 2 倍の人口と言ってよかった 15 年ぐらい前から、あっという間にそれだけ人が増えました。その中でアフガニスタンで死んでいる若者が 1 万 1000 人を超えています。私が学生によく言うのは、日本は世界の中で一番平和を達成して維持している国だということを、誇りに思うべきだということです。

しかし、そのことを維持する上では問題があります。それは、今の若い人たちがそれを継続させるような若者になっていこうとしているのかということで、私はそこに不安を感じています。けれども、うちの学生たちも非常にいい素質を持っていますし、いい方向に持っていけば積極的に話もするし、素材としては非常にいいものがあります。しかし、機会がない。

本学には、毎年210～220名の留学生が来ます。その方たちと一緒に伊豆大島や御岳へ行って寝食を共にすると、はっと気付くのは、例えば私のところにいるマレーシアの学生はひと月5万円、家賃3万5000円、残り1万5000円で暮らしています。それでも希望に燃えて「マレーシアへ帰って日本に追いつきたい」と言います。そのような人たちと一緒に日本の学生を連れていくと、日本の学生は「今日もあるから明日もある」という感じで、非常にのんびりしていて、世界ではまれな部類に属するということを意識します。そのような意味で、1～2日ですが、日本の学生と留学生を一緒にして同じ釜の飯を食べるということをしています。日本のすごさは識字率と一般の人の教養の高さだと思います。日本人と留学生が大島へ行き、現地の方たちとふれあうことが、いかに私たち首都大の学生にいい意味の刺激を与えているかということを実感しています。

後ほど議員の方、現場の方からもご発言があろうかと思いますが、東京にはほかにもいいところがたくさんあるので、そのようなところを活用して、連携していい若者を育てる活動を進めていきたいと思っています。これが学校側として発言させていただいた要旨です。

（可知）　ありがとうございます。

個別の質問を受け付けていると時間が進まないので、初めに3人の方にお話しいただいて、それから補足の説明をしていただきます。

それでは、2番目の発言は伊豆大島の白井嘉則さんにお願いします。白井さんは大島町の前町議会議員で、実は伊豆大島で学部基礎教養科目の「自然と社会と文化」、あるいは社会人の野外講座を何回も開催していて、その際に大変お世話になっていて、白井さんがいなかったらとてもできなかったことがたくさんあります。あらためてお礼を申し上げます。今日は地元からの発言をお願いします。

1-2. 迎える島の立場から：都市と離島の交流発展

（白井）　こんにちは。発言の機会を頂き、ありがとうございます。

私が首都大学東京とかかわりを持ったのは、大島であった第2回社会人野外講座が最初です。当時、私はちょうど議員を辞める寸前でしたが、野外講座に参加させていただいて、その素晴らしさを自分自身で体感したことが、以降の私自身のかかわりの出発点です。

伊豆諸島すべてにおいて、島という特質性を持った生活では、いろいろな交流があって、その中で独自に島の文化がはぐくまれてきたと考えられます。今日、八丈の伊藤先生が言われたことも含めて、私はそうだと思っています。この講座の素晴らしさは、一般人、学生、留学生が私の住んでいる伊豆大島に来て、いろいろな質問を私にぶつけてくるところです。私ももともと議員を20年間務め、議長を8年経験した中でも、大島の歴史をすべて知っているわけではありません。島に生まれ、島で育っていますから、生活についてはかなり話せても、受講生、学生の質問にすべて答えられる状況だったわけではありません。質問を受ける中で、島の在り方、私たちがうろ覚えに知っていることをもう一度掘り下げていく必要があると、私自身の考えが変わっていきました。私の知っている人たちにもそういうことを話しながら、本当のところ、この講座の中で私自身が育っていったというのが今日の状況です。

その一例を言うと、先ほど伊豆七島のお話がありました。どうも行政の中では、八丈の属島として青ヶ島、八丈小島があります。今、石原知事は「東京諸島」と言っていて、そこには青ヶ島も小笠原も入ります。ところが伊豆七島というと、多くのところで青ヶ島は入っていません。それを調べていく中で、実は歴史的に韮山県も含めて「伊豆の国」が既に日本書紀の中にあって、役行者が大島に流されています。既にそのころ「伊豆大島」という表現があるのです。そのような歴史と同時に、昭和 29 年に伊豆諸島が七島になり、国定公園化されました。ところが今は国立公園です。それは昭和 39 年に、富士箱根伊豆国立公園に伊豆諸島が編入されたからです。ところが「伊豆」の名前の中には青ヶ島がありませんから、今日でも青ヶ島は国立公園としての規制がなく、開発が簡単なのです。そういう歴史をひもとくことができました。

もう 1 点は、徳川の時代に名字帯刀が許されました。私と一緒に岡田という村で、黒川先生と大変懇意になって私より前にお手伝いしている漁師さんがいます。テングサや貝を採っている船長で、その方の名字も白井です。なぜ名字が同じなのに親せきではないのかという話が出て、これも調べたところ、名字帯刀が許されたときに、六つの姓が許されたのです。私が住んでいるところは元町といいますが、昔は新島といいました。今の新島と同じ名前で、新島、本村、元町だったのですが、その時代に白井、藤井、下村、阿部などの六つの姓が許されたときに、岡田と新島では白井姓を使ったのです。

このように、今回のこの勉学は、私を含めて島の多くの方たちに、自分の歴史をひもといて、自分の島の魅力をもう一度検索してみる機会を与えてくれました。多くの人たちがいろいろなところで質問を受けるので、またその人たちがいろいろなことを調べてきてくれるのです。そういうことで再発見しながら、観光的にも有意義な形で今日まで進んでいることが、この間、私自身がお手伝いした感想として大変ありがたく思っていることです。その意味では、今後ともぜひ積極的にこのようなことをしていただくことが、伊豆大島だけでなく、伊豆諸島、小笠原を含めて大変いいことなのではないかと感じている次第です。

（可知）　白井さん、ありがとうございました。

続いて、伊豆大島からお越しいただいた都立大島高校主任教諭、中林利郎さんにご発言いただきます。中林さんは、大島ふれあい観光ガイドの中心メンバーのお一人で、白井さんと同じく、伊豆大島で開催しているいろいろな講座で中心的にご協力いただいている方です。中林先生、どうぞよろしくお願いします。

1-3. 観光ボランティアガイドの活動を通して

（中林）　皆さん、こんにちは。中林です。ただ今紹介がありましたように、伊豆大島ふれあい観光ガイド、それから都立大島高等学校農林科の教員をしています。

首都大学とのかかわりは、2006 年度 11 月のオープンユニバーシティ（OU）の講座に、受講生として参加させていただいたことから始まりました。本土を離れたところでの講座をたまたま大島でするというので関心があって参加し、黒川先生や菅又先生と知り合うことができました。第 2 回目のときに、先生方からで何かお手伝いしてもらえませんかとお声をかけていただいて以来、ずっとボランティアという形でかかわらせていただいています。

今日の私に与えられた表題には「観光ボランティアガイド」と書いてあって、どういうことを説明しなければいけないのか難しいところです。普通に観光ガイドの話をすればいいのですが、ボランティアと書いてあるので、その辺のところをお話しします。

私は大島に来て 15 年目で、八丈の伊藤先生の三十何年のまだ半分にもいきません。それでももう 15 年たちますが、島では子供を地域が育てます。野球、柔道、剣道、バレーボールと、大島はスポーツが非常に盛んなのですが、それを支えているのは、私の目から見るとボランティアのコーチです。先生方も地域にいます。今日は大島の教育長さんがみえていますが、自分も何かできるのではないかということで町が主催する文学的な講座に受講生として入り、それが生かせればいい、さらに深めたいと首都大学の講座を受けて、2 回目からはお手伝いをいするようになりました。ボランティアでも観光ガイドでも、一般の社会人、学生、大学院生などが来たときには自分の好きなところで火山の話、それから農林科の教員なので植生、それから白井先生と町の中の歩いて、文学的な話のお手伝いをしています。

ボランティアの話をしなければいけません。まず、ボランティアと普通のガイドの違いは、簡単に言うと意識の問題で、責任感があるかないかだと思います。ですから、僕はボランティアなので、プロにはなりきれません。何かのためにお役に立てればいいので、それで満足してボランティアをしています。

ボランティアを長く続けるには、自分自身が苦痛であってはいけません。義務だと思うとボランティアはできません。それから、無理はいけません。そして、「〇〇がしたい」「〇〇が欲しい」と思ってはいけません。当たり前のことです。それから、自分の行いが人の喜びでなければいけません。これも重要なことです。それから、やっていて自分が楽しくなければいけません。やったことが社会に貢献できるのがボランティアだと思います。これもあくまで自己満足ですが、それでいいのです。いいからボランティアで続けられるのではないかと思います。

ボランティア活動をして自分が得たものはたくさんあります。この首都大学のボランティアにしても、一番うれしいのはまずこういう席に立てることです。地域の一ボランティアの会員がこのような席に立って皆さまの前でお話しできるチャンスは、なかなかないと思います。そういう機会を得られたことは非常にうれしく、誇りに思います。ボランティアをしていたから、このような席に立てたのだと思っています。

ボランティア活動を介して得たものは、今言ったように、このような席に出られること、それから人との会話を楽しめるのも幸せなことです。それから、私は今、大島にいますが、大島の一島民になれたという認識が持てることも非常にうれしいです。それから、プロでなくても人に話をするときには、いいかげんなことは話せませんから、調べなければいけません。特に首都大学は教育と研究が基盤なのでいいかげんなことは言えませんから、それなりに調べなければいけません。そういう意味においては、白井先生と同じです。自分を磨くことができるチャンスを与えられて、非常にうれしいと思います。それから、現役の教員なので、自分が調べたことが現場の高校生に還元できればこんなに幸せなことはないと思って、ボランティアという形で頑張っています。

それから、首都大学とは直接関係はなく、今はお休み中ですが、島内のボランティア活動として伊豆大島ふれあい観光ガイドを月に 3 回ぐらいずつ、三原の山頂や、ぱれ・らめーる、火山博物館などで活動しています。それから大島観光振興実行委員会の「ツバキ花数え運動」という、大島の観光振興で、どうすればお客さんが来てくれるかということで、ツバキの花を数える運動をボランティアでやっています。

あと、一番僕が大切にしているのは、自分がしていることを島民が見ることによって、

「あいつがああいうことをやっている」「あいつでもあれができるのだ」という意識を島民が持ってくれれば、島自体が栄えるのではないかという思いで、それが一番大きなボランティア活動の原点です。

（可知）　中林さん、ありがとうございます。
今、3 名の方に、最初は大学の立場から、白井さんには迎える島の立場から、中林さんにはボランティアガイドの立場から、それぞれご発言いただきました。この三つの発言に対してコメントをいただきます。大島町の教育長の増木さん、よろしくお願いします。

2. コメント

2-1. これからの大島に見えた希望

（増木）　私はコメントするような大それたものは持っていないのですが、立場上、発言させていただきます。私は自分でも 4 人の子供を育て、3 人が島外、1 人が島に戻っています。目の前にいる子供たちがこの大島でどのように成長し、どのように生活してくれるのかという思いを種々めぐらせています。
ところが、少し後ろめいた発言にもなりますが、私がよく話す与論島の教育長が、酒を飲むと声高らかに「教育をすると、将来を託す島の若者たちはみんな外へ出てしまう。これでよいのか。何かおかしくないか」という話をします。でも、先ほど学長の話を聞いて、「大丈夫だ、明るい灯が見えてきた」という思いです。それをカバーするだけの知的な社会が、今後、島にも生まれるでしょう。そう思う根底には、首都大学の学生さんたちがあらためて島の良さを見ている。そして、これまでなぜこのような文化が根付いたのか、このような歴史があるのかというところから、今後の島の若者の暮らしがどうなっていくかという方向付けができるのではないかという期待を、今日お話を聞いていて持ったということがあります。
学長と特に黒川先生が言われた磯焼けと砂漠化の話は、まさに私が今住んでいる村の状態です。生まれてこの方、六十有余年を過ごしていますが、こんなひどい村の状態はあまり見たことがありません。私たちが小中学生のころ、親父は半農半漁で洋服屋をしていました。いさぎ網や棒受網など、村中の若い人たちが出て漁をしました。あるいは農繁期になると、どこの家の人でも忙しいうちの畑の稲を刈ったり、ツバキの実を背負ったりという助け合いの光景がたくさんあって、人と人のつながりが本当に濃かったのです。
先ほど素晴らしいお酒の話を聞きました。まさに酒がとてもおいしかったのだろうと思います。今、私は少々苦い酒を飲む機会が多くなってきています。もっと肝胆相照らして共に生き、思いをぶつけ合う社会をつくろうではありませんか。足を引っ張るのではない、歴史をけなすのではないという甘ったれた思いを持っています。
その根源として、私はぜひ、金に結び付く経済発展のための観光化よりも、古い文化や歴史をもう少し大事にして、第一次産業の農業や漁業に若い人たちがもう一度取り組めるようにして、島の魅力や島に住む良さをぜひ伝えていきたい。私は若い衆と祭りをし、冠婚葬祭があれば手伝いますが、「いや、私は仕事があるから出られません」という声が最近非常に多くなっています。それが今の生き方だというのも、その裏にはお金を稼ぐという経済を大事にする話がある。でも、そういう悲観的な思いではなくて、私たちがツバキの実を採ると、今年は実のつきが悪いけれど来年はもっといっぱい実がなるという輪廻というか回転が必ず自然の中にはあって、自然は復活してくれるという思いを持っています。

学長からも、将来、肉体労働から頭脳労働に移っていっても希望がある知的な人生が送れるという話や、磯焼け・砂漠化も必ず復活するのだという話をお聞きして、あるいは黒川先生のいろいろなお話が勉強になって、少し期待を膨らませて島へ帰れるなという思いです。ありがとうございました。

（可知）　増木さん、ありがとうございました。
　それでは八丈町の教育長、金川育男さんにコメントをお願いします。

2-2. 八丈の魅力

（金川）　皆さん、こんにちは。私からは島の宣伝をさせていただきたいと思います。首都大学で何回もうちの方に来ていただいていますが、われわれ行政マンの要望は、もっと学生も一般の方も大勢連れてきていただいて、島の活性化を図りたいということです。今日は町長に、「もっと島のことを宣伝してこい」と言われて来ています。
　先ほど日本酒の話が出ましたが、八丈には焼酎があります。日本酒と焼酎ではどちらがおいしいかというと、私は焼酎の方がおいしいと思います。今日の夜、宴会などがあるのなら、私が焼酎を持ってくれば一番よかったのですが、残念ながら持ってこられませんでした。島酒も魚もくさやもおいしいです。
　それから、人間がすごくいいです。私が言うのはおかしいのですが、私を含めて、いい人間が大勢いるので、ぜひとも八丈に来ていただいて、島の人と交流してもらいたいです。
　大島も含めて、離島ではなかなかこういう機会がありません。われわれがこうして人前で話すことも、なかなかありません。特に子供たちは表現することが苦手な子が多いです。私などはこうして人前でしゃべっていると心臓がばくばく鳴って、昨年は心臓の手術をしました。そういういろいろなことがあるのですが、やはり来てみなければ分かりません。縄文時代のことや黄八丈の話、八丈にはいろいろなことがいっぱいありますので、ぜひ来ていただきたいと思います。
　先ほど伊藤先生が言われたように、伊藤先生は 34～35 年前に流されてきました。2000 人近くの流人が流されてきたのですが、その中にはもちろん政治犯や火付けもいます。近ごろ、うちの嫁が CS 放送で「暴れん坊将軍」を見ています。そこに必ず出てくるのが「八丈島に遠島」です。「こんな人ばかり流されてきているのか」と思われるのもしゃくなので、その辺もわれわれもまだ PR 不足ではないかと思います。
　大学にお願いしたいのは、流人が八丈へ来てどのような生活をしたのか、われわれもよく分からないのです。一般の人と同じ生活はしていました。けれども、それを絵に描いて文章にすることが必要ではないかと思いますので、首都大学の優秀な先生や学生が大勢いるかと思いますので、一生懸命勉強していただいてわれわれの島に還元していただければありがたいです。くだらない話でしたが、以上です。

（可知）　金川さん、大変面白い話をありがとうございました。今お二人にコメントをいただきました。
　東京都議会から 3 名の議員が来られていますので、一言ずついただきたいと思います。最初に宇田川聡史さんです。実は宇田川さんは都立大の 38 期、法学部のご出身です。

2-3. 島嶼部のインフラ・アクセス整備の強化

（宇田川）　皆さん、こんにちは。まずは非常に貴重な、楽しいお話をお伺いする機会を頂いて、誠に勉強になりました。感謝を申し上げます。

今ご紹介いただいたとおり、私は都立大の出身で、最後の八雲の卒業生です。ですから、一番汚い校舎で過ごしたのですが、1 年浪人するとこの大沢へ来なければいけなかったという立場でした。石原都知事が先頭に立たれて首都大学東京になりましたが、石原知事がご勇退されるようなら、東京都立大学に名前を戻そうという運動を始めたいと思っているので、ご理解いただける方はよろしくお願いします。

大変素晴らしい話をお伺いしました。やはり現場を見ることは非常に大切です。現場を見なければ分からないし、現場に行くと見えてくるものがあるのは事実です。われわれも現場を預かっている議員として、なるべく現地に足を運ぼうという思いでいますが、なかなか時間の融通が利かない部分もあって、思うとおりにいかないこともあります。

そうした中で、今年 8 月に八丈島に行ってきました。実は学習や地域の視察ではなく、選挙の手伝いで行ったものですから、大して現場を見ることができなかったのですが、やはり行けば島の人たちの生活や島に必要なものが何なのか、必然的に見えてくると思っています。本学でこうした現場を見る学習を非常に熱心にやっていただいていることは大変ありがたいことで、なぜ私のときにはこのような科目がなかったのかと今さら思います。ぜひ、先生方の研究もそうですし、学生の皆さんも、これからこうした現場を学習機会として生かして、より良い方向性を見いだしていただければありがたいと思います。われわれも、首都大の応援をしっかりさせていただきます。

また一方で、多摩も島もそうですが、そこで生活する住民の皆さんをまず一番に考えるのがわれわれの立場です。まずは人と自然との共存です。ここのところ集中豪雨で大変大きな被害を出していますが、この自然としっかり向き合った中で、人間が生活できる土台・空間をつくっていくのもわれわれの仕事の一つです。経済や産業の部分もあります。島は農業・漁業を中心にしていますが、一方で観光があり、公共事業で支えられているという事実もありますので、インフラ整備をしっかりやり、港の整備をしたい。

あと、小笠原で今大変大きな問題になっているのはアクセスです。早期に空港を整備してほしいという島民の皆さんのご意向の中で、自然破壊につながるという話もありますが、私は島民の生活を第一に考えるべきで、週に 1 回しか船が来ないのは異常な現象だと思います。何とか自然と共存する形で滑走路の整備等々をして、アクセスの強化もしていかなければいけないと思っています。

そうした部分は、いろいろなものにかかわってきます。例えば医療です。ちゃんとした病院がないわけではないのですが、大きな病になった方のための高度な医療機器のある病院は島にはありません。こうした問題も含めて、トータルで考えていかなければいけません。東京はもはや 1300 万都民が生活する大都市ですが、島は島で一つの業態、圧縮・凝縮されたものがあると思います。今申し上げたインフラ整備もしかり、経済発展もしかり、産業を支えなければいけません。医療もそうです。そのような部分についても一つ一つ現場に足を運んでいけば必ず見えてくるものがあるので、それをとらまえた中で、われわれは議員としての立場で、皆さんの支援を精いっぱいしていきたいと思います。

実は行政が一番下手くそなのが広報です。せっかくこのように素晴らしいことをなさっている皆さんの教育研究を知らしめる部分にも、力を入れるべきだと今日、感じました。

これからも皆さんからいただいた貴重なご意見を糧に、都議会の中で一つ一つ取り組んでいきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。ありがとうございました。

（可知）　宇田川さん、ありがとうございました。
　続いて、地元八王子選出の東村くにひろさんにご発言いただきます。

2-4. 三宅島の復興と地元八王子の活用

（東村）　こんにちは。ご紹介ありがとうございます。新型インフルエンザ問題が東京都で起きたとき、この対策に一番詳しいのは首都大学東京の菅又先生だと言われまして、菅又先生にお話を聞きに来ました。正直な話、東京都の新型インフルエンザ対策は、菅又先生にいろいろアドバイスをいただいてやりました。先生とはそれ以来のお付き合いです。

　なぜ今日私が来たかというと、私は八王子で、しかも南大沢駅のすぐそばの高いのっぽのマンションに住んでいて、とても近いので、島に住んでいたわけでもないのですが、せっかくこのような機会なので、しっかり勉強して東京都の政策の中に入れてくれといわれたからです。先ほど中島幹事長が来ましたが、私は今、都議会公明党の政調会長で、政策全般を預かっている公明党の責任者なので、勉強に来ました。

　私が島の人たちと交流を持ったきっかけは、三宅島の噴火です。私が三宅島に視察に行った二日後に噴火したので、みんなから「東村のせいだ」と言われたのです。噴火して、多くの人が江戸川に行かれましたが、八王子に来られた方も多かったのです。特に別所の都民住宅にたくさんいらっしゃいました。私は八王子だったので、「直接票に関係ないかもしれないが、三宅島の人が大変な思いをしているのだから、東村は一人一人話を聞いてあげなさい」と言われて、お話を聞きました。

　住むところが落ち着いて次は何が不安かと思ったら、三宅島の特に年齢の高い、農業を営んでいた人から「農業をやりたい」と言われたのです。こちらで農業をして働きたいという話があったので、東京都の産業労働局と相談して、小宮公園の横にあった東京都の土地を「三宅島元気農場」にして、この高齢者の方に働いてもらいました。本当に喜んでくれて、作ったのがアシタバや赤芽イモ、ウコンです。私は「これを飲んだら二日酔いにいいから飲みなさい」と、よくウコンを頂きました。言われたのが、非常に土地がいいということです。三宅島もいいですが、八王子はアシタバを作るのに適しているそうです。一生懸命働いて、いいものがたくさんできました。

　すると今度は、「せっかく働いたから、少しはお給料が欲しい」と言われたのです。せっかく作ったものを自分たちで持って帰るのもいいけれど、売れればいい。売ったお金から少しでも給料をもらえればいいと言われたので、東京都に「販売していいか」と聞いたら「駄目だ」と言われました。それはそうです。皆さんの税金で造った土地を勝手に耕して、物を作って売るのは駄目でしょう。でも、賢いなと思ったのは、東京都が農産物を全部買い取ってくれて、復興のための展示会などでみんなに配ったのです。1 日 4000 円ぐらいでしたが、皆さん、お金をもらえるようになって元気になりました。そうこうしているうちに島に帰れることになって、残念ですが、交流が途切れてしまいました。

　今日は大学生の体験学習という話がありましたが、その間、近くの小学生が来ていました。アシタバなど見たことがありませんから、アシタバが実際にどうできるのか、どうやって食べるのか、てんぷらやおひたしがおいしいと、実際に作って食べさせてくれました。

赤芽イモもふかして食べさせてくれました。このようなことを小学生に教えると、非常に喜んでいました。なかなかアシタバを作る経験などないので、これはよかったなと思いました。こんなことを言ってはいけないのでしょうが、善意でたまに三宅島で採れた魚やアシタバ、赤芽イモを送ってくれます。そうやって今でも交流しています。

そして、せっかく耕したいい土地がもったいないので、東京都と相談して、本格的にこれから農業を始める人が、いきなり農家から土地を借りて失敗したら大変なことになるので、そういう人が試験的に耕す場所に変えました。噴火という一つの機会にわれわれは交流できるようになりましたが、このような、なかなかできないことを首都大学東京は現地に行ってやられているのはすごいと思います。

ただ、私は多摩の人間ですから、多摩ももっと活用してもらいたいと思います。灯台下暗しで、あまり行ったことがないと思いますが、八王子には滝山城があります。東京都の都立公園で、これまで八王子の人も見向きもしませんでしたが、最近になって突然クローズアップされました。それはなぜかというと、小学館の『日本名城百選』の中に東京都で三つの城が選ばれました。一つ目が江戸城で、二つ目が実は滝山城だったのです。なぜ滝山城が選ばれたかというと、鉄砲ではなく中世の弓矢の時代に、三の丸まで攻められても、二の丸、中の丸、本丸が攻められなかった唯一の城なのです。武田信玄の息子の勝頼に攻められました。上杉の武将の直江景孝にも攻められました。主は北条氏照です。何がすごいかというと、中世のかぎ型くるわといって、弓鉄砲で射れるように、くるわが全部かぎ型に造られているのです。

名城百選に選ばれたことで地域の人が立ち上がって、滝山城を発掘復元しようとNPOを立ち上げました。どこがすごいのか、今は行っても全然分かりません。私もかなり言われたので、議会でようやくこれを取り上げて、10年かかってもいいから滝山城を復元しよう。でも、自然公園なので山を取り崩してはいけないので、できるところを復元して、来た人がすごい城だと分かるようにしようということになって、ようやく東京都が予算付けするようになりました。

まず第1段目は、民地も入っていて放っておくと残土捨て場になってしまうので、民地部分を買うのではなく借りて借地公園にして、将来、相続税の軽減をしようという作業を順番にしています。もし今日この話を聞いてぜひとも行ってみたいという人がいたら、NPOが立ち上がってホームページもありますので、連絡してみてください。電話をすれば案内してくれます。2 時間ぐらい案内してくれるので、覚悟して回っていただきたいと思います。本当に勉強になるので、ぜひとも今度一度、首都大学の地域の歴史と文化の中で、滝山城のNPOの先生を呼んでいただきたいです。小冊子もできて、歴史読本にもとうとう載りました。市長も知らなかったのですが、本に出た瞬間、「よし、頑張ろう」と一生懸命応援してくれています。その後、北条氏照氏は、鉄砲の時代には滝山城は持たないということで八王子に移って鉄砲に備えたのですが、鉄砲に撃たれて落城しました。滝山城に残っていればよかったのです。

本当に身近にもこのようなものがさまざまあり、私も住んでいてなかなか分からない部分があるので、いろいろな方から教えてもらっています。合鴨農法の高月の米も、本当においしい米です。これが道の駅で売れることになって、多くの人が高月の米を知るようになってきたので、このような場だけではなくて、われわれは政治行政の立場から後押しできる機会があれば、どんどんこれからも進めていきたいと思います。

今日付で、首都大学東京の経営企画室長が内藤さんから村松さんという人に替わります。この人は産業労働局にいて、商業や農業に詳しい方です。私と同じ年なので大いに活用していただいて、本当にこれからどんどんこのようなことを通じて首都大の情報発信をして

いただきたいです。皆さんは中にいて首都大学東京はすごいと思われているかもしれませんが、まだまだ都民の中では「首都大学東京とは何ぞや」という発想の人が圧倒的に多いので、一生懸命このようなこともアピールしながら、東京の中で唯一の公立大学法人を後押しして、どんどん地域の人と出会う機会をつくりたいと思います。

今日はお招きいただきまして、本当にありがとうございました。

（可知）　東村さん、ありがとうございました。

それでは最後になりますが、三宅正彦さんです。実は三宅さんは伊豆大島のご出身だそうで、島嶼選出ということで、島には一番かかわり合いのある方です。

2-5. 各島の特色と魅力を再発見してほしい

（三宅）　島嶼選出の都議会議員の三宅です。私は白井前議長からお誘いを受けて、今回このような会に参加しました。また、増木先生は実は自分は中学の教え子です。島の人間で、また今年1月に補欠選挙で当選したばかりでしゃべるのが苦手なのですが、手短にお話しします。

私は伊豆大島出身ですが、名字は三宅です。うちは90歳の祖母がまだ元気に生きていますので、いろいろ聞いてみたところ、江戸時代初めごろに三宅島から大島へ移り住んで三宅という名前を付けたと言っていました。実際に5代将軍綱吉のころの江島生島事件のときに流された画家の懐月堂安度の屏風が、火事で焼ける前まであったそうです。それには江戸の町並みが描いてありました。当時、島にはいい墨があまりなくて本当に簡単な絵だったけれども、江戸の町の様子が分かる絵が描いてあったと祖母が言っていました。その後、いろいろ家のことを調べますと、文化文政のころには名主（なぬし）もやっていたようですが、持っていた廻船が沈没し、没落して今現在に至っています。

今回、補欠選挙があっていろいろな島を回った中で、三宅島に行きました。神着という地区に、親せきだと名乗ってくれる浅沼さんという方がいて、その流れで私はそこと縁ができて、その辺は恐らく票がたくさん出たのではないかと想像しています。実際、三宅島で浅沼というと、浅沼稲次郎さんが神着の出身です。体型だけは似ているのですが、血のつながりがあるかどうかは分かりません。

私は伊豆諸島・小笠原諸島がすべて選挙区なので、人が住んでいる11島すべて回っています。本当に各島の特色があり、島の中でも地域によって相違があります。先ほどダニエル・ロング先生が島の言葉でいろいろおっしゃっていました。大島の中でも元町では「あなた」のことを「ぬしゃ」といいますが、岡田では「われ」というなど、地域によって若干言葉も違います。また、地質の面では、新島は南北約9kmの島ですが、北部は黒い砂、南部は白い砂で、本当に違いがあります。

ぜひ本講座で各島に行っていただいて、各島の特色を見ていただき、また、各島の方々は言葉も習慣も違うので、ぜひ交流を持って、島の魅力の再発見・再認識につながるような活動をしていただきたいと思います。簡単で雑ぱくな話ですが、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（可知）　三宅さん、大変ありがとうございます。

時間がだいぶ押していますが、せっかくなので会場から何か短くご発言ください。

3. 質疑応答

（Q1）　私も卒業生の一人ですが、二つだけお願いしたいことがあります。私も大島、三宅島、式根島へ行ったことがあります。今、岡山県の玉造で高速艇が建造されて、そのまま眠っているのです。燃料などいろいろな問題があるかもしれませんが高速艇なので、ぜひあれを就航させていただいて、子供たちに島めぐりを。25億円もかけてせっかく造ってそのまま置いてあるのは大変もったいない話なので、復活させていただきたい。

それから、私が地方公務員として勤めていた武蔵野市では、セカンドスクールがあって、小学生や中学生が1週間ぐらい、各地で先生ごと移動教室をやっています。それをぜひ東京都から、島に行くようにと。他府県に行かなくてもこんなに豊かな自然が東京にあるので、この2点をぜひお考えいただいて実現していただければ、交流が非常に活発になる気がしますので、お願いします。

（可知）　ありがとうございます。では、もう一つぐらいいきましょう。

（Q2）　大島と八丈島の方には非常に労力を使って受け入れていただいていて、とてもうれしいのですが、もしかしたらもう一段階いけると思うのは、われわれが行ったときの小学生や中学生、高校生の若い人たちとの交流です。つまり、私たちが現地に行っていろいろ知るように、私たちが学術のことなどを持っていけると思うのです。大島や八丈島の若い方がそれを聞いて、「もっと島のことを知らなければいけない」、または「島の問題を考えるためには一回本土へ出て、また戻ればいいのだ」という思うきっかけになるかもしれません。もっともっと双方向の交流の機会を広げていけたらお互いに多いに刺激になると考えています。

（可知）　ありがとうございます。今、発言したのは本学の教員です。

（白井）　私は、うちのすぐそばの第一中学校の校長先生と、よくいろいろな話をします。私が「今、首都大学のこんなお手伝いをしています」と言ったら、首都大学の学生さんたちが来たときに、ぜひいろいろな形で交流の機会を作ってもらえるような工夫ができないかと言われていたので、実は菅又先生と「まずは何とかそんな機会を作れるような相談の機会を作りたいね」という話をしているところです。

ただ、常時先生たちがいるわけではないので現実的にまだできませんが、私も、島の子供たちにとって、自分たちがどういう大学へ行ったらいいのか、大学の勉強の在り方も含めて考える、一つのとてもいい機会だと思うので、ぜひその辺は大学で少し工夫をしていただければ、現実、可能なことだろうと思います。

（可知）　ありがとうございました。
最後に、首都大学東京の高橋理事長に答弁をよろしくお願いします。

おわりに
高橋　宏（首都大学東京理事長）

それでは、最後に一言ご挨拶します。今日は大変に盛り上がった、いいシンポジウムでした。はるばる大島からは白井さん、中林先生、八丈からは伊藤先生、ほかみなさんにおいでいただき、ありがとうございます。また、先生方もありがとうございます。

このシンポジウムは今日で3回目ですが、こんなに盛り上がった内容の濃いシンポジウムは初めてです。皆さんに同感していただけると思いますが、今、日本は元気がありません。はっきり言うと、日本人の芯が腐ってきています。もっとはっきり言うと、一番駄目なのは政治家です。ただ、今日ここに来ている都議会議員さんは大丈夫です。熱心にお話を聞いていただいて、日本も捨てたものではありません。

実は私は、過去5年間ほど、次世代人財育成研究会をやってきました。それには、文部科学省・経済産業省・内閣府の役人、経団連の会長クラス、100 人ぐらいが入れ替わり立ち替わり入って、私は終始一貫、最高顧問としてずっと付き合ってきました。文部科学省の役人に大学の使命とは何かと言わせると、ちょうど今から12年ほど前に、大学審議会で二つの大方針を出しました。一つは「競争的環境の中で個性輝く大学をつくれ」ということです。今、日本には750も大学がありますが、ろくな大学がない。みんなが同じことをやろうとして、みんなが東京大学や慶応大学のまねをしようとする。冗談ではない、そんなことをやる必要はない。みんなそれぞれ独自の個性を発揮しようという意味です。それを美しい言葉で言っていますが、どうもお経のようで分かりません。

二つ目のドクトリンは、「課題追求型の人間をつくれ」ということです。要するに、自分は何に向いていて、何を研究したいのかということを自分の頭で考えて、テーマを決めて自分で問題解決できる人間をつくれということです。それが文科省の役人の頭で考えるとこのような表現になるわけですが、うちの大学の理念は簡単です。先ほど先生からご説明がありましたが、これも事務局がひねって少し抽象的なので、私なりにずばり一言で言うと、「21世紀の日本に役に立つ人材をつくれ」ということです。

これには、ただひたすら勉強ばかりしていても駄目なのです。本当に人間と人間がぶつかり合って、もみ合って、たたき合って、議論し合って、時には腕力を使ってもいいです。そのようなせめぎ合いの中で、人間が鍛えられなければ駄目です。そういう人材がどういうやり方でつくれるかというと、運動部もそうですが、一番いいのは、これまでやってきた野外教室のようなところへ行って、大人と子供がぶつかり合うことです。

私も去年の春、伊豆大島の野外教室に参加しました。それには外国人留学生たちもたくさん来ました。全部で3日間あるので、揺れる船の中で車座になって酒を飲む。向こうの宿屋に着くと白井さんや中林さんにも一緒に入っていただいて、あのときは大島の町長さんなどがたくさん来られて、学生を激励してお酒を差し入れてくれて、おいしい魚もどんどん焼いて持ってきてくれて、学生も喜んですごく盛り上がりました。帰りも、夕方4時ごろに出帆したのですが、白井さんなどみんな見送ってくれました。漁師の白井さんはくさやを焼いて持ってきてくれたので、船の上で一杯飲みながら帰ってきました。横浜に着

いたときには、みんなよれよれのぐでんぐでんになっていました。その過程で学生とわれわれが話し合って、すっかり打ち解けました。

彼らはやはり大人と話したいのです。はっきり言うと、学生というのは、これまで自分の親と学校の先生以外の大人には接触したことがありません。全くの他人の生身の大人、ここにいる諸先生方や白井さん、中林先生のような人には会ったこともないので、何を言われるのか、大人が何を考えているのか分からない。でも、彼らはみんな、自分たちの生き方や、将来何をすべきか教えてくれる人を求めています。そういう意味で、このようなプロジェクトはとてもよかったです。

私は御岳山のプロジェクトにも行きましたが、そのときも一般社会人がたくさん来てくれて、学生といろいろ話し合いました。このような企画を大いにやるべきだと思います。

皆さん、これからもよろしくお願いします。ありがとうございます。

（可知）　高橋理事長、ありがとうございました。

これで今日予定していたプログラムはひととおり終了しましたが、このあと、懇親会の用意をしてあります。くさやをつまみに澤乃井と八丈の焼酎と、両方飲み比べることができるそうですので、ぜひそちらの方にもご参加いただければと思います。

本日は長時間にわたり、公開フォーラム「東京に学ぶ魅力」にご参加いただき、ありがとうございました。

新聞掲載記事

地域 多摩 13 S　2008年(平成20年)6月25日(水曜日)　読売新聞

東京の自然・文化 研究報告

27日 首都大公開フォーラム

首都大学東京は27日、八王子市南大沢の同大南大沢キャンパスで、公開フォーラム「東京に学ぶ魅力―島と海と山と―自然と歴史と文化と」を開く。

同大は、東京全体を〝キャンパス〟と位置づけ、奥多摩や伊豆諸島などの島嶼地域でも研究・教育活動を展開している。

2005年度からは、教員と学生が伊豆大島や小笠原諸島などに宿泊し、自然や民俗、歴史、地域文化などを調査する野外演習を行っているほか、社会人を対象に島嶼地域などを舞台にした野外講座も開いている。

三原山のカルデラで地元の講師から火山の歴史、溶岩の説明をうける学生たち（今年3月、黒川准教授提供）

同大のこうした活動は、現地でも歓迎されている。地元の人たちが講師となり、学生たちに授業をしたり、同大の教員が島民向けに講座を開いたりしている。同大大学院の黒川信准教授は「学生には地元の人たちと接するいい機会。教育を通じた交流をこれからも深めたいと話している。

今回のフォーラムは、これまでの研究成果を紹介するために企画された。「島嶼社会の文化資源とその活用」「奥多摩の豊かな植物」「御岳山と山岳宗教」などをテーマに、同大の教員や地元で講師を務めた在野の研究者らが報告を行う。

午後2～5時。会場は1号館310教室。定員約200人。参加無料、事前申し込み不要。問い合わせは同大大学院生命科学教室（☎042・677・2578）へ。

2010年（平成22年）9月28日（火曜日）　第2088号

東京七島新聞

発行所
東京七島新聞社
東京都港区麻布1丁目3番7号
〒106-0032（島嶼会館内）
電話 03(3450)4666
電話 03(3450)8983
FAX 03(3431)6332
編集発行人 松本俊一郎
新聞口座 00160-9-99828
（購読料 1カ月800円）

大島支局
電話 04992(2)1102
電話FAX 04992(2)1014
新島通信部
電話FAX 04992(5)1323
式根島通信部
電話 04992(7)0003
FAX 04992(7)0403
三宅島支局
電話 04994(2)0051
FAX 04994(2)0676
三宅島支局通信部
電話FAX 04994(2)0715
八丈島通信局
電話 04996(7)0014
FAX 04996(7)0484

首都大が学外体験講座

小笠原と八丈で実施 10月は神津島で開講

変化に富んだ自然環境、長い歴史と特徴ある社会、民俗、文化をもつ東京の島々や奥多摩山間部を「学外体験プログラム」として開発している首都大学東京の「特徴ある教育プログラムを目指す研究」プロジェクトが、8月は小笠原、9月に八丈島で学外体験型集中講義「自然と社会と文化」を開講した。

小笠原では8月19～24日まで受講生12人、教員ら5人、現地講師6人が参加して「小笠原の自然を通して外来種問題を考え、戦跡や欧米系の人の話から社会を臨み、フラや南洋踊りの芸能体験から文化に触れる」をテーマに開講、森下一男村長表敬訪問、食文化、世界自然遺産登録、戦前の生活・強制疎開・米軍統治下の生活・返還に関する対談やディスカッションなどを行った。

八丈島では9月9～14日まで受講生15人、教員ら9人、合同実施の歴史ゼミ参加者ら10人、現地講師5人が「縄文時代から流人の歴史、戦争史跡などを通して、八丈島の社会と文化を考え、黒潮・火山・食物などから人と自然のつながりを考える」をテーマに開講。

この後、同プロジェクトは10月1～3日まで神津島村共催で首都大学野外講座「神々が集う伝説の島・神津島」を開講する。

朝日新聞

多摩 多摩 13版 2009年(平成21年)12月3日 木曜日

宿坊に泊まり車座で討論

首都大学東京、5日御岳神社で

首都大学東京は5日、1泊2日で青梅市・御岳神社の宿坊に学生や留学生、教員計約50人が泊まり込み、車座になって自由討論する体験講座を開く。「コミュニケーション能力に欠ける」とされる最近の学生を自然、文化、社会に直接ふれあえる都内の島や山へ連れ出し、留学生も交えて問題意識を深めてもらおうという学外教育プログラムの一環という。

すでに春と夏の年2回、伊豆大島で野外講座を続けている。三原山に登り、特別養護老人ホームを訪ねてお年寄りに会い、町長から直接行政の話を聞くというような体験から発展させたテーマで自由討論をする。学生全員が対象で、「座学とは違った新鮮な刺激を受けた」など学生の評判もいい。

学内に在籍する約220人の留学生にとっては、泊まりがけで「東京の地方」へ行くことで学内の雰囲気にとけ込むきっかけにもなる。留学生を遠巻きにして「お客さん扱い」せず、学内交流を活発にさせる狙いもある。

御岳山では、江戸時代に建造された歴史的建造物の御岳神社を見学、宮司による説明を聞く。自由討論は宿坊御岳山荘で食事後に約3時間の予定。いくつかのテーマをもとに中国、ドイツ、スペインなど留学生十数人も参加する。

東京七島新聞 2011年(平成23年)2月8日(火曜日)

首都大 大島で野外講座

【大島】「自ら考え、自ら学び、自ら動く学生を育てる」という教育プログラムを実践している首都大学東京は、3月に大島で「学生向け野外講座」と「伊豆大島野外企画」を実践する。

学生向け野外講座は、「自然と社会と文化」というタイトルで3月1日～4日（2泊3日船中1泊）の日程で開催する。大学は毎年3月と8月に学部の1、2年生向けに行っているが、今回は地元の白井嘉則さんの案内で三原山登山をはじめ流人墓地、郷土資料館を訪れるほか、特養ホーム入居者との対話や町長に島の話しを聞くなど、伊豆大島での共通の体験・経験を通して、学生同士、また、地元の人たちとも議論しながら「大島」を考える。

「伊豆大島野外企画」は3月13日～18日（5泊6日、船中1泊）の日程で野外講座「自然と社会と文化」を受講した学生が自らプログラムを考え、大島の自然や文化に触れながら自主性、主体性、問題発見力、問題解決能力の育成を目指すもので、実際に大島を歩いてハイキングマップを作るなどフィールドワークを行う。

1 第3426号（毎週金曜日発行） 2009年（平成21年）12月18日 金曜日

**今年もご愛読いただき
ありがとうございました。**

本年中の発行は今号が最終で、次号は新年合併号です。来年も引き続きご愛読のほどよろしくお願いいたします。

南海タイムス社

NANKAI TIMES
南海タイムス
発行所／南海タイムス社 〒109-1401 東京都八丈島八丈町大賀郷2522-1 TEL 04996-2-3456 FAX 04996-2-0293

海藻おしばで年賀状づくり

首都大学公開講座で

首都大学東京の公開講座「『海藻おしば』で海を学ぶ」が12日、八高生物室で約40人が参加して開かれた＝写真。

「海藻おしば」は、「押し花」の海藻版で、浜辺に打ち上げられたさまざまな種類の海藻を素材にして、陸上の植物とはひと味違うおしばを製作するもの。海藻を広げて標本をつくってもきれいだが、カラフルな海藻を組み合わせて、絵を描くことも楽しい。

この日は伊豆で採集し保存していた9種類、八丈島にある3種類の海藻を使って、おしばのクリスマスカードと年賀状づくりに挑戦した。講師を務めた海藻おしば協会の野田三千代会長は「陸上の草花と違って海藻は透明感があり、しなやかで折れないのが特徴です」と参加者に説明した。

次はダイバーにも

八丈学入門の野外講座を企画した首都大学の黒川信准教授は「次は平日に実施してダイビングショップのみなさんにチャレンジしてもらう上級コースも検討中。海藻の魅力や海の環境について、ダイバーにより深く伝えられるし、ダイビングの後の空き時間を埋めることもでき、仕事にも役立てられると思います」と話している。

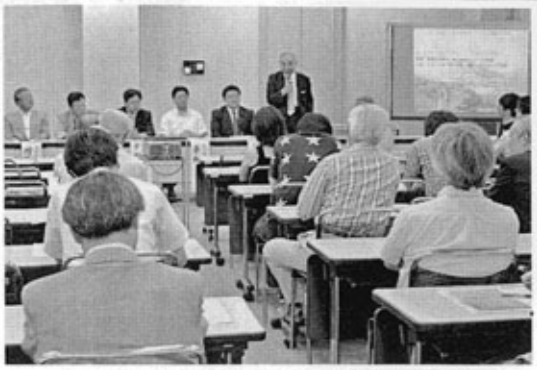
東京七島新聞
発行所
東京七島新聞社
東京都港区麻布1丁目4番7号
〒106-0022（島嶼会館内）
☎ 03(3459) 4666
☎ 03(3459) 8988
FAX 03(3451) 6338
編集兼発行人　松本茂雄
振替口座　00160-9-99828
（購読料　1カ月800円）
大島支局
☎ 04992 (2) 1102
☎FAX 04992 (2) 1014
新島通信部
☎FAX 04992 (5) 1323
式根島通信部
☎ 04992 (7) 0003
FAX 04992 (7) 0403
三宅島支局
☎ 04994 (2) 0051
FAX 04994 (2) 0676
三宅島支局通信部
☎FAX 04994 (2) 0715
八丈島通信局
☎ 04996 (7) 0014
FAX 04996 (7) 0484

『東京に学ぶ魅力』

首都大が公開フォーラム

首都大学東京の全学的共同研究プロジェクト「特徴ある教育プログラムを目指す研究」に取り組む研究班が7月16日、公開フォーラム『東京に学ぶ魅力―島・海・山―自然と歴史と文化と』を同大学南大沢キャンパス91年館で開催した。

同大学では東京全体をキャンパスにして自然と社会と文化を題材に研究活動を行っており、特に伊豆諸島・小笠原などの島しょ地域や多摩・奥多摩地域などで教養・専門課程の学生や大学院生の学外教育活動のほか、社会人を対象に野外講座や各地域での公開講演会を実施している。今回のフォーラムでは、その活動成果の報告を通して、「東京の島と海と山」に広がる特徴的で魅力的な自然と社会について、原島文雄学長の基調講演の後、発表とパネルディスカッションが行われた。


フォーラムでまとめのあいさつをする高橋理事長

第1部「東京の島、海、山々を舞台とした学外・体験型教育」では福士政広氏（健康福祉学部）が「特徴ある学生・留学生・社会人教育を目指して」、黒川信氏（生命科学専攻）が「海に学ぶ―生命の誕生と環境」、菅原敬氏（牧野標本館）が「奥多摩、伊豆・小笠原諸島の豊かな植物」、伊藤宏氏（八丈島歴史民俗資料館）が「八丈島―縄文時代から戦争史跡まで」、ダニエルロング氏（日本語教育学専攻）が「島ことばと文化」、小澤順一郎氏（小澤酒造）が「奥多摩・日本酒の魅力・その伝統と文化」をそれぞれ発表した。

続いて、第2部パネルディスカッションは「社会貢献力・国際貢献力をもつ骨太な若者を育てるために―地域と首都大学東京との連携―」と題し、11人のパネラーが参加。

島関係では三宅正彦都議、白井嘉則前大島町議会議長、増木米孝大島町教育長、中林大島高校教諭、金川育男八丈町教育長がパネラーとして参加したほか、各政党の都議会議員、首都大学東京の高橋宏理事長らが参加し、島、海、山、自然、多様な文化、歴史をもつ東京の魅力や、今後の展望など、予定時間を延長して語った。

東京七島新聞　2010年（平成22年）8月28日（土曜日）

首都大学東京と共に

大島町在住　白井　嘉則

第3回首都大学東京開発プロジェクト公開フォーラムが7月16日南大沢キャンパスで開催されました。

この公開フォーラムに第1部で八丈島歴史民俗資料館の伊藤宏氏が「八丈学」のすすめ―学びの場としての八丈島―というテーマで報告を行い、第2部のパネルディスカッションでは社会貢献力、国際貢献力を持つ骨太な若者を育てるために―島嶼、奥多摩地域と首都大学東京との連携―というテーマにパネラーとして八丈町教育委員会教育長金川育男氏、大島町教育委員会教育長増木米孝氏、東京都議会議員三宅正彦氏、そして基調発言として首都大学東京菅又昌実教授から有益な若者育成のための本学の役割について、伊豆大島からボランティアガイドの立場で中林利郎氏、そして私白井嘉則が迎える島の立場から都市と離島の交流発展という視点で報告を行いました。

首都大学東京において、この事業が始まったのが2006年度「東京都大島を拠点とした自然環境、科学教育プログラム開発のための研究」2007～2008年度「特徴ある学外、体験型教育プログラム開発、実施のための全学的研究―伊豆大島を拠点として―、2009～2010年度「特徴ある教育プログラムを目指す研究」で、すでにこれまでに大島、八丈島、小笠原で野外講座、一般講演会などを行い、これまで実施したプログラムの参加延べ人数は約3200人にも及びました。私の報告ですが私は2007年の一般公開講演会に参加し、議長時代に磯焼け対策でお世話になった先生がいらしたことから、中林先生に声をかけていただき、伊豆大島で開講してきた「自然と社会と文化」や「社会人野外講座」などに地元の一人としてお手伝いをしてきました。

これらの講座では、複雑で多様な都市化社会における自然や文化、歴史を背景に持つ学生諸君、社会人、そして諸外国からの留学生を大勢お迎えしました。その中で彼らは島の成り立ち、歴史、暮らし、食生活、火山、動植物、海洋生物、文人墨客、流人などに関するさまざまな疑問や質問を私たち島民に投げかけてきます。

私に投げかけられたその一つの例としては、「大島町はなぜ伊豆大島なの」との問いかけでした。

伊豆大島の成り立ちは伊豆国と言われ、伊豆諸島は明治元年韮山県に、4年には足柄県、9年に静岡県、11年には東京府というようにもともと伊豆国に所属していたことと併せ、日本書紀に西暦699年、役の小角（えんのおづぬ）伊豆大島に流されるという記載もあり、また1156年、源為朝伊豆大島に流される、1840年、韮山代官所伊豆諸島の支配も兼ねる。

「野外講座」で説明する白井氏（右）

1954（昭和29）年、伊豆七島国定公園に指定、1964（昭和39）年、伊豆七島の富士箱根伊豆国立公園の編入決定――などというように、一つの問いかけに応え説明しようとするなかで、私も自分の島の歴史を再調査するなど、文化、歴史の探求が促され、多くの再発見がもたらされています。

すなわち大学の野外講座は島民自身を新たな勉強、島の魅力の再認識、再発見へと導き、それにより島嶼地域をさらなる発展へとつなげる方向性をもった講座となっています。

また、これらの事業で多くの人たちとの交流は楽しく、私にとっては人生の蓄積、財産になっています。

この事業はすでにこれまで述べましたように、参加人数から見ても3000人以上になっており、観光誘致などに発展拡大していく大きな可能性を持っています。島嶼地域にとっても重要であり、対象地域をこれからも大いに拡大していただきたいと考えていますし、私も今後とも首都大学東京と共に積極的な展開を継続したいと考えています。

（前大島町議会議長）

2010年（平成22年）10月18日（月曜日）（昭和27年11月24日 第3種郵便物認可）　東京七島新聞

首都大の野外講座

講師　中村　親夫

【寄稿】10月2日、3日、神津島で初めて社会人を対象とした首都大学東京野外講座（参加者18人）が神津島村共催のもと開催されました。

このような野外講座は、すでに大島や八丈島で実施されていて、参加者と島民とのふれあい、そして島民には新たな島の魅力再認識、再発見など、地域を見直し発展へとつなげていく事業となっています。

今回の講座のテーマは、「神々が集う伝説の島・神津島」と題し、1日目は、その昔、伊豆諸島の神々が集まり、会議を開いたといわれる天上山の頂で、上古時代の伊豆諸島創生神話・神津島の神が議長で伊豆諸島の神々に命の源である水配りをしたといわれる神話を織り込み、矮（わい）性化した樹木、山野草、アルプス並みの山塊、洋上360度の大パノラマを楽しみながら、満々と水をたたえる池にパワースポットを感じた参加者もいて、天上山トレッキングを楽しみました。

2日目は、神津島の歴史と民俗、食文化、海藻おしばの体験講座があり、前浜の真っ白い砂浜、流人墓地、濤響寺、物忌奈命神社を散策して、「アカイカ入り塩辛」製造所の見学解説を受けました。

海藻おしば体験では、村民と一緒に海藻おしばの美しさ、海中に広がる海藻の森と地球環境、生命との関わりについて知識を深め、赤、褐色、緑のさまざまな海藻を素材に、はがきを作成しました。

参加者との懇親会には神津島村長、教育長、観光協会理事長、観光協会職員も加わり、地域の見直しと発展について熱い話が語られました。

今回の講座には大島から前大島町議会議長の白井嘉則氏と都立大島高等学校主任教諭の中林利郎氏が参加されました。

（神津島ネイチャークラブ代表）

天上山の頂上で記念撮影（前列中央筆者）

社会人野外講座募集案内

大島町共催　首都大学東京　伊豆大島野外講座

人と自然のつながり

咲き誇る椿を楽しみながら

大海原に囲まれた火山の島、伊豆大島の魅力の数々を、首都大学東京の教員と大島を　愛する地元の方々のご案内で満開の椿とともに堪能して頂く講座を企画致しました。観光とはひと味違った旅へ是非ご参加ください。

2011 年 3 月 4 日(金)

竹芝桟橋 21 時集合 22 時出航

1 等船室をご用意。大型客船の夜行船旅です

5 日(土) 朝 6 時入港後、宿で温泉に入って休憩、朝食

大島の食文化、椿園を訪ねて　～自然、歴史と食文化～

大島の郷土料理を通して～島料理作り体験～

椿園・椿資料館の数百種類八千余本の椿

製塩所、くさや製造所、生命の発生(見学と実験)

～海と塩、潮と生命のつながり～

温泉付き民宿 大陣 泊

6 日(日)

椿夜祭り参加

伊勢海老漁業体験

伊豆大島の椿染め(体験)

元町を散策しながら　～伊豆大島の歴史と文化～

為朝神社、流人(赤穂浪士間瀬定八遺児・小栗兄弟)墓地等

15 時 35 分出航のジェット船にて 17 時 35 分竹芝桟橋着

講師:

白井嘉則(前大島町議会議長、大島椿協会会員)

黒川　信(生命科学専攻)菅又昌実(人間健康科学専攻)

中林利郎(都立大島高校教員、伊豆大島ふれあい観光ガイド)

費用

29,000 円(受講料、竹芝桟橋からの旅行代金、食費、宿泊費、旅行保険代込)

大型船は1等船室をご用意しています。プラス料金で往路大型船は上等船室へ変更可,調布飛行場からの空路参加も可

参加お申込み、お問い合わせ:黒川まで以下いずれかで。

電子メール kurokawa-makoto@tmu.ac.jp　ファックス 042-677-2559

郵送 192-0397 八王子市南大沢 1-1 首都大生命科学教室

どなたでもご参加出来ます。皆様お誘い合わせの上、奮ってご参加下さい。

お申し込みは 1 月 30 日までにご参加希望者全員の「住所、氏名、連絡先電話(＋電子メール)」をお知らせ下さい。

首都大学東京　特徴ある教育プログラム開発プロジェクト　黒川、菅又、近藤

首都大学東京野外講座八丈学入門
自然と歴史・文化を訪ねて

東京から280km、黒潮を越えて辿りつく亜熱帯の島、八丈島。八丈を愛する地元各界の方々を講師として、この島にまつわる多くの魅惑的な歴史と文化をじかに触れながら学び、雄大な自然と食そして島酒を堪能します。

2010年5月28日(金)
竹芝桟橋21時半集合22時20分出航
黒瀬川を渡る大型客船の夜行船旅です

*29日(土)*朝9時半底土港入港
八丈島の歴史と民俗その1見学と散策歴史民俗資料館・陣屋跡・玉石垣など
八丈島の食文化その1焼酎酒造元、くさや工場など見学
食文化その2 宝亭(昼食)島の食材を使ったおもてなし
八丈島の自然その1ビーチコーミング:黒潮が運んだ様々な漂着物から垣間見る世界
八丈島の自然その2八丈富士大噴火が造りだした南原千畳岩海岸、八重根港、温泉
八丈島の歴史と民俗その2八丈太鼓と樫立踊り(体験)

30日(日)
八丈島の戦争史跡その1末吉・震洋基地壕跡と東光丸慰霊碑など
八丈島の歴史と民俗その3黄八丈・染めと織り 染め元・め由工房

食文化その3 いそざきえん(昼食)
八丈島の戦争史跡その2 三原山鉄壁山・司令部跡、底土・回天壕跡など
八丈島の歴史と民俗その4見学と散策
近藤富蔵墓・顕彰碑・宇喜多秀家墓など

17時10分発のジェット機にて18時羽田着解散

講師:菊池健(八丈ビジターセンター)　結城広枝(樫立踊り保存会・元町立中学校教諭)
林　薫(八丈町教育委員会)　山下　誉(黄八丈め由工房)
伊藤　宏(八丈島歴史民俗資料館解説員)

費用:37,000円(受講料、竹芝桟橋から羽田までの旅行代金、食費、宿泊費、旅行保険代金込)

参加お申込み、お問い合わせ:黒川まで以下いずれかで。
電子メール kurokawa-makoto@tmu.ac.jp　電話 042-677-2578　ファックス 042-677-2559
郵送 192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京　生命科学教室

お申し込みは、4月23日(金)までにご参加希望者全員の「住所、氏名(ふりがな)、年齢、連絡先電話(+あれば電子メール)」をお知らせ下さい。

本講座は首都大学東京「特徴ある教育プログラム開発プロジェクト」で黒川・菅又がオープンユニバーシティとは別に企画しました。どなたでもご参加出来ます。お誘い合わせの上奮ってご参加下さい。

伊豆大島連携フォーラム展示ポスター

首都大学東京と伊豆大島の連携
― 教育と研究 ―

東京の洋上に広がる島々には、特徴ある自然と社会と文化が展開しており、たいへんに魅力的でユニークな研究と教育のフィールドです。公立大学法人首都大学東京では、前身の東京都立大学など都立の4大学の時代から引き続き、この特徴的なフィールドを舞台に人文・社会学、理学・工学、健康福祉科学など様々な分野の研究を行っています。なかでも伊豆大島は、東京都の島しょ地域の中で最も近くに位置し、三原山をはじめとする豊かな自然と美しい海洋環境を有するとともに、長い歴史と特徴ある民俗・文化が育まれており、豊かな教育・研究の場となっています。

首都大学東京では2006年度以来、本学の教育を特徴づける『学外体験型教育プログラム』を拡充し、また新たに開発する事を目的とした全学的プロジェクトが伊豆大島を拠点として進められています。この中には学部生・大学院生の教育はもとより留学生、生涯・社会人教育、中学・高校−大学連携教育、教員再教育、公開講演会など本学のあらゆる教育プログラムが含まれます。また本年度からは新たに、これまで島しょ地域でそれぞれに行われてきた多様な研究分野を融合させて、人と自然が持続的に共生するための文化的、社会経済的、自然的条件を実証的に解明する全く新しい学術領域を確立しようとする研究プロジェクトもスタートしました。

これまで本学が、大島町、東京都大島支庁はじめ地元の諸機関、組織、地域の方々との連携関係を基軸に、東京都島しょ地域や、都全体を野外キャンパスとする構想も視野に入れながら展開してきた活動の一端をご紹介致します。

- 教　育
  - 社会人講座
  - 学生教育
  - 中・高・大連携活動
- 研　究
  - 自　然　科　学
  - 人文社会科学
  - 社会環境基盤

首都大学東京
特徴ある教育プログラム開発プロジェクト
島嶼共生系学際研究環研究グループ
連絡先：island@tmu.ac.jp
042−677−2578（黒川）

野外講座

首都大学東京の社会人講座（オープンユニバーシティ）では、学内での座学だけでなく、市町村と連携して学外宿泊型の野外講座を開講しています。伊豆大島をはじめとして、八丈島、小笠原、青梅・奥多摩での開催を含めのべ16講座がこれまでに開講されました。地元の諸先生方を講師陣に加え、地域の自然・文化・歴史などの魅力を楽しく学んで頂いています。地域を改めて知る機会として住民の方の参加も歓迎しています。

2泊3日　♪伊豆大島野外講座の旅♪

生きた火山
ー三原山の大自然探訪ー

伊豆大島の成り立ちを学ぶ
@郷土資料館

波浮の港
ー自然と歴史と文学とー

伊豆大島の山海の幸と食文化

伊豆大島の椿染め・明日葉染め

生命の発生
ー伊豆大島の海と生き物ー

夜は地元講師も交え
フリーディスカッション

公開
講演会

地域住民の方々にむけ様々なテーマで開催しています。

2006年3月（大島）「島に学ぶ長寿の秘訣」「世界の島と日本の島」
2007年5月（大島）「大島の民俗と言語」
　　10月（八丈島）「老いに向かって-こころとからだの健康-」
2008年3月（大島）「伊豆大島の流人」
　　06月（首都大学東京）「東京に学ぶ魅力-島と海と山と-」
　　10月（大島）「『海藻おしば』で海を学ぶ」
　　「海中森と地球環境」「東京・伊豆諸島の海でいま起きていること」
　　10月（八丈島）「世界の高齢者生活」
2009年1月（八丈島）「裁判員制度にどう臨むか」「風水の思想と東南アジア」
　　09月（八丈島）「宇喜田家中に見る豊臣政権の実態」「もの忘れと認知症」
　　10月（大島）「首都大学東京と伊豆大島：連携活動フォーラム」

中学・高校・大学連携の取組み

首都大学東京は、都立大島海洋国際高校との高大連携協定などを中心に、高校・中学などとの連携活動に取り組んでいます。

首都大学は東京都立大学など都立の4大学が併合して生まれた大学です。大学院も充実しおり文部科学省の特色ある大学院教育プログラムに採択されています。高校・中学の教員志望者も多く、研究の経験を積んで教師を志す学生が多数います。

インターンシップ

「インターンシップ」とは学生が将来の職業を体験することです。

全寮制の都立大島海洋国際高校では、寄宿舎（ドミトリー）での宅習（夜間の学習）の時間が設けられています。インターンシップ生は授業体験はもちろん、宅習や課外活動の指導・生活指導など、一般の教育実習とは異なる様々な教育現場を実体験することで、将来の教員としての能力を高めることを目指します。

夏期休暇から戻ったばかりの生徒に対し、インターンシップの学生たちが宅習の補助をするなど普段とは異なる形で指導することで、生徒が気持ちを切り替え、学習意欲をより一層高めることも期待されます。

体験実習講義

様々な講義、実習、セミナーなどが伊豆大島で開講される時、島の中・高校生の皆さんにその様子をじかに見学し、また質問し、実験を体験していただく機会を設けています。希望に応じて、簡単な講義をすることもできます。生徒の皆さんは、「大学の講義、実習でどのようなことをするのか」「学生はそれにどのように取り組んでいるのか」 などを直接に理解することができ、大学生活を体感することができる場です。大いに活用していただきたいと思います。

日本語教育の支援

アメリカ人留学生に対して、日本語の集中授業を実施しました。留学生は、来日し一週間のホームステイの後すぐ、都立大島海洋国際高校での半年間の学校生活と寮生活を始めたため、日本語カリキュラムは読み書きよりも会話表現を重視し、速やかに日本の生活に対応できることを第一の目標としました。こうして留学生に対するカリキュラムをデザインする（例えば、動詞の活用形を作る練習問題を行なうか挨拶などの日常会話を繰り返し練習するか、などを決める）ことで、日本語教育学の大学院生にとっては実践教育の貴重な経験を積むことにもなります。

進路説明会

進路説明会には様々な分野の本学教員や大学院生が講師として参加し、「大学とはどういうところか」「大学では何を学ぶのか」 などのテーマで生徒に語りかけ、質問に答えます。都内の大学説明会等に参加する機会が少ない生徒たちにとって、進路を考える貴重な場です。

生命科学臨海実習
海に学ぶ－生命と環境－

海は天然のリンゲル液である海水をたたえ、それ自身生き物のモデルであり、最大の遺伝子バンクでもあります。日本全体の40%近くの広大な海をもつ東京にあって、首都大学東京では海と環境とそこに生まれた生命をテーマにした様々な体験型プログラムを実施しています。干潮時に磯に出て、あるいは桟橋でプランクトンネットを引けば、地球上の生物の形とその生きざまの多様性に学生達は圧倒されます。ウニやホヤの卵子を自ら受精させ細胞が増える様子を目の当りにしながら生命について調べ、議論します。海の中で今起きている様々な深刻な問題を直に見てそれを学ぶ事は、地球環境問題について真剣に考える端緒ともなります。

ウニの卵・精子の採取

アメフラシは大きな神経細胞（ニューロン）を持つことから脳・神経科学の重要な実験動物です。

発生中のウニ

アメフラシの脳

ウニやホヤを使って卵から発生し体を作っていくしくみを調べます。

数理科学セミナー

数理情報科学　小林正典

・数理科学（数学）では、一つの問題・テーマについて長時間考えたり議論したりすることが大切です。

・解けないからといってすぐに答えを見ることはできません。そもそも、世界中の誰も答えを知らない問題を解くからです。

・**実は数学には興味深い「未解決問題」が沢山あります。**

・ただ、それらの問題を正確に定式化したり理解するためには、言葉の準備や予備知識が必要です。そのため、「問題」があることが自身が一般的にあまり知られていません。

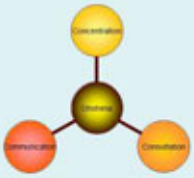
合宿の利点（3つのC）と伊豆大島

・Communication:　リラックスしながら食事や入浴などの生活時間を共有することで気持ちの垣根が低くなり、発言し易くなります。

・Consultation:　教員はアドバイスを随時与えることができます（大学では結構難しいことです）。

・大島は都内という近郊にありながら、好奇心を大いに刺激する自然環境や文化があり、合宿に適しています。

・Concentration:　普段と違う場所に行くことで、日常の瑣末なことから切り離され、気持ちが切り替わり、長時間連続して静かに集中できます



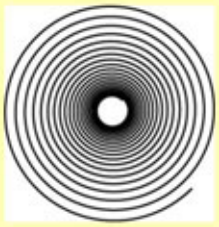
セミナーの実施

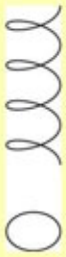
・大島では、2泊3日にわたって、参加者が共通して興味をもつテーマに関するセミナーや、教育プログラムの作成・実践にあたっています。また、高大連携の打ち合わせ、分野を超えた交流も行っています。

・本年度は前身となるプロジェクトから数えて4回目の開催であり、参加者は教員1名と学生・院生7名（4年からPDまで各1名）でした。テーマに関する講義や議論の合間に島を見学しました。ゼミ内の交流を深めることも学生生活で重要であると考えています。

教育プログラムの作成・実践
大島海洋国際高等学校寄宿舎にて

今年度のテーマ「層切断とモノドロミー」





・数学では、一周すると別の年代の層にずれてしまう切断を考えることができます。例えば、螺旋階段（ダンブルドア校長の部屋の階段など）は一周すると一段ずれて、元の場所には戻ってきません（図）。この「ずれ」をモノドロミーと呼びます。

・これらは抽象的ですが実は重要な数学的概念で、微分方程式の解の幾何的表現などに広く使われています。

・地層切断面（写真）で、ある年代の層を辿りながら島を一周すると（思考実験としては）元の場所に戻るはずです。

漁場の荒廃・海の異変に対する取組

島しょ農林水産総合センター・国立環境研究所等との連携研究

生命科学専攻　黒川　信

東京都は日本の200海里排他的経済水域(EEZ海域)のうちの約40%の海をもつ海洋都市です。

ヒロメの海中林

テングサ干場

沿岸の海にはたくさんの生き物たちがくらす海藻の森「海中林」があり、私たちに多くの恵みをもたらしています。

しかしいま、日本中の海、世界の海で「磯焼け」などに代表される様々な異変が起きており、東京の海、大島の海でも例外ではありません。テングサやアワビ、サザエが豊かに育つ海を守るためには、小さな変化も見落とさず、その原因を科学的に解析し適確に対処することが求められます。

近年、伊豆大島沿岸で広大な「海中林」をつくるコンブ科のヒロメ(アントクメ)が激減し、魚介類の漁獲量にも大きな影響が出ています。減った原因は何か、どうすれば回復できるのか、今後どうなっていくのかなどを様々な方法で調べています。

日の出浜で実施した実験の一例

スポアバッグ事業

ヒロメの種(胞子)を集中的にまいて芽生えを育てる事業も漁協の協力を得てスタートしています。

天然のヒロメが消失した場所で、2月に数cm幼株をステンレスカゴ内に移植して育てると3ヶ月で1m以上に成長しました。しかし、カゴに入れなかったヒロメは動物に餌として食べられてすぐに消失してしまいました。2月～5月の成長期のヒロメにとって栄養や温度などの環境条件は充分足りているでことが確かめられました。

一方、別の実験から6月～7月に海水温度が下がることで、次世代のための種(胞子)の成長が悪くなって量が不足し、翌年に動物の餌としても充分な量のヒロメの森が育たないことがわかりました。

伊豆諸島・小笠原諸島の言語に関する研究・教育活動

ダニエル・ロング（Daniel Long　日本語教育学）

伊豆大島で留学生に対する日本語学習支援

2007年夏に一週間、大島海洋国際高校のアメリカ人留学生Baraq Stein君に対して日本語学習の支援を行いました。

教室内での授業だけではなく、教室で覚えた表現を使い実際に店で買い物をする課外授業も行いました。

2008年にはCameron Grimes君に対して支援を実施しました。博士課程の小玉博昭がダニエル・ロングの指導の下で日本語カリキュラムを立案しました。

Baraq君は、来日前に二年間日本語を勉強していましたが、初日に「どこから来ましたか？」と「いつ来ましたか？」の意味を間違えました。しかし、最終日にはこちらの質問を理解し、ある程度答えられるようになりました。

彼の上達スピードが速かった理由として、三つのことが考えられます。一つは若さです。二つ目は彼の耳の良さです。一回目の発音は違っていても、ネイティブが音読したのを聞いた後にもう一度発音すると、同じ発音を真似できました。三つ目は、彼のとても話し好きで、好奇心の強い性格です。

Cameron君は来日する前から日本語を少し勉強していたので、授業の初日、OPIと呼ばれる方法によって日本語のレベルを計り、教え方の微調整を試みました。留学生に対するカリキュラムをデザインする（例えば、動詞の活用形を作る練習問題を行なうか挨拶などの日常会話を繰り返し練習するか、などを決める）ことは、大学院生にとって実践教育の貴重な経験となります。

小笠原諸島の日本語教育史のオーラルヒストリーを記録する言語調査実習

この調査の主目的は野外実習を通して、学生にフィールド言語学の方法を学ばせ、その魅力を伝えることです。フィールド言語学は現地へ赴き、その土地の文化や風土を肌で感じ、現地の人々とふれあうことで、生きたことばを捉えることに意義があります。今回の実習では、アクセント調査やオーラルヒストリーの収集を通してフィールド言語学の具体的な方法を学ぶだけでなく、南洋踊りなどの現地のイベントに参加することで島の文化や風土を肌で感じ、島の人々とふれあうことができました。

観光資源となっている伊豆諸島・小笠原諸島の『言語景観』の実態調査

大島の文化・東京の島の文化についての研究
—波浮地区と泉津地区の実習調査から—

高桑史子（社会人類学）

大島の豊かな生活文化について学びました。

研究の内容

私たちは、大島を学ぶために次の枠組みを設定しました。

- ○ 海洋型社会として東京をとらえる
- ○ 島から東京をみる、海から東京をみる
- ○ 海や山と人との係わりをみる

大島をはじめ伊豆諸島の島々は島社会ということばでひとくくりにされます。しかし、島ごとの歴史や民俗は異なり、さらに同じ島の中でも集落ごとに違いが見られます。海や集落の背後にある山との係わり、あるいは他の集落との係わり、さらに本土との係わり、そしてそれらが近・現代の歴史のなかでどのように変化を遂げたのかを調べることで、東京の島社会の多様性を学びます。同時に島に生きた人々の生活の知恵を学び、私たちの毎日の生活のあり方について考えます。

以上の問題意識により、社会人類学専攻3年生の学生達と教師は、波浮（2007年）、泉津（2008年）に約10日間滞在し、歴史・民俗、生活の変化、地域振興のあり方について考え、報告書にまとめました。

社会人類学と大島

社会人類学（文化人類学と呼ばれることもあります）の目的は、人間が創り出してきた文化について学ぶことです。つまり、人と人との関係のあり方、人は社会の中でどのように生きてきたかを知り、そしてそれを未来にどのように伝えていくかを考える学問です。

海と山を有し、しかも島しょであるという、豊かでかつ時には厳しい姿を見せる自然に囲まれた伊豆大島は、人が自然との係わりの中でどのような生活文化を創り出してきたかを考える魅力的な場です。

研究の方法

○書物や記録資料、新聞や雑誌など、書かれたものを調べる
○博物館、資料館などに保存されているもの、展示されているものを調べる
○建物、景観、風景など、目に見える様々なものを見て感じる
以上のことに加えて

大島に暮らしていらっしゃる方々から直接お話をうかがう

私たちの研究にとって重要なことは直接お話をうかがうことです。集落に滞在し、丹念に歩き、五感を駆使して感じ、地元の方々から多岐にわたるお話をうかがいます。このような研究方法は、現代も息づいている民俗や歴史を学ぶだけではありません。多くの方々とのすばらしい出逢いがあります。この出逢いと体験が学生達の生きる糧となっていきます。

遠ばたの日陰でくつろいでいらっしゃるところでお話をうかがう学生

歴史や民俗についてお話をうかがう学生達

お忙しいところをお邪魔してお話を聞かせていただく。どんなに忙しくても私たちのために時間を割いてくださった。

桜株（サクラッカブ）の見学。けなげにしなやかに生きる老桜を地域振興のシンボルにしていきたい。

神社の奥の聖域の調査。三原山の信仰とも関係のある興味深い信仰伝承を残したい。

研究の発展と地域との関係

○移住や移民などの人の移動の研究についての可能性

漁民の移動、開拓移民、伊豆諸島と神奈川県沿岸・東京湾・房総半島との関係のみならず、八丈島さらに南西諸島へと、海を舞台とした人やモノの移動の研究の可能性をさぐる。

○大島特有の豊かな文化や伝統をどのように発信していくか。

波浮の町並みと歴史的に重要な建物、季節が来ると鮮やかに咲き誇る椿をはじめ、クサヤ、アシタバ、山や海の幸など、大島ならではの文化資源と食文化を今後どのように発信していくか？

○集落毎の特色ある文化をどのように残し、それをいかに地域振興に生かしていくか。

歴史のある神社、様々な神様の保存の問題、各地に伝わる民話や伝承など有形・無形の文化を地域振興に結びつけることはできないか？

報告書：『波浮の民俗　伊豆大島波浮地区調査実習報告書』2008年3月31日発行
『泉津の民俗　伊豆大島泉津地区調査実習報告書』2009年3月31日発行

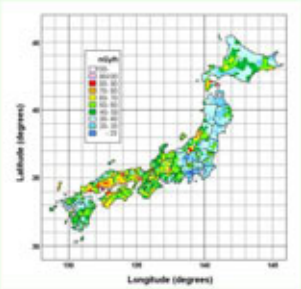
社会人類学コースは同様に利島でも2008年11月に、大学院生による調査実習を実施しました。

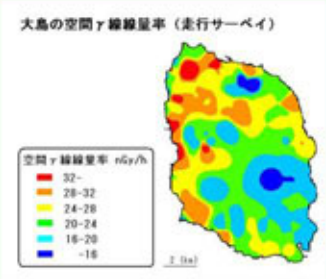
報告書：『伊豆利島調査報告－過疎・高齢化する東京における文化資源開発の可能性に関する基礎的研究』2009年4月30日発行

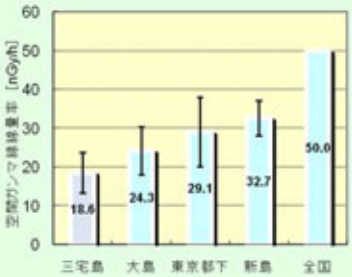
また大島調査参加者はその後も卒業論文研究を大島や小笠原で行ったり、大島海洋国際高校主催のドリームプロジェクトに参加するなど、研究を発展させています。

伊豆大島の環境放射線分布

健康福祉学部・放射線学科　福士　政広







環境放射線とは私たちの生活環境の中にある放射線のことです。日常生活の中では、どこにいても宇宙や大地、そして食物を通じて**放射線**を受けています。

日本列島の環境放射線の分布は、西高東低の傾向を示しています。全国平均は50nGy/hで100nGy/hを超える地域は日本にはありません。

伊豆大島の環境放射線レベルはグラフに示すとおり、全国平均の半分以下で東京都下に比べ5nGy/h程低いを示しています。これは、大島を形成する基盤岩の組成が関係しており、放射性核種の含有量が少ない玄武岩質であるためです。

高齢者に優しい室内空間を提供する

公衆衛生学　菅又　昌実

生活空間の温度や湿度を適正に保つ上でエアコンの使用は避けることができません。しかし、エアコンは室内の空気を循環しながら温度と湿度を調整しているので空気中の様々な物質を吸着しています。このため、室内空気中に存在する微生物がエアコンに集中して集められることになります。もしその中に、インフルエンザウイルスやノロウイルスがいたら施設の中に感染症の流行が起こりやすくなります。

本学では椿の里と一緒に施設内の空調機に付着する微生物の種類や分布を調べ、特に空気感染するインフルエンザウイルスや食中毒を起こすノロウイルスの存在を調べてきました。その結果、椿の里のエアコンからは対象の約20種のウイルスが検出されないことを確認しました。

高齢者も含めて健康弱者に優しい環境とは？という問いかけに対して大島からも情報発信をしています。

特別養護老人ホーム「椿の里」との共同研究

発　行　日：2011 年 3 月 31 日

発　　行：2009 年度-2010 年度　首都大学東京　傾斜的研究費全学分
「特徴ある教育プログラムを目指す研究」
『社会貢献力・国際貢献力を持つ骨太な学生の育成を目指した多面的な学外教育プログラムの開発－その定常プログラム化を目指して－』
研究代表者：福士政広　健康福祉学部　放射線学科　教授

制作・編集：近藤日名子　理工学研究科　リサーチアシスタント
八王子市南大沢１－１
首都大学東京　理工学研究科　生命科学コース
電話：042-677-2578　　island@tmu.ac.jp

印　　刷：有限会社　三珠印刷所　電話：042-581-8226